

を磨いたりしていた毎日——そのせいで今でもパチンコ屋に行くと当時のことを思い出します——から解放され、敵機の飛ばない空を見上げた時、「ああ、生きているんだ」と新鮮な気持ちでいっぱいでした。そしてその後の生活のしるべとなったのが新憲法です。あの前文と第九条を読んだ時の感激が、いまの私に至る出発点とっていいでしょう。弁護士になりたいと言って父親を説得し、同志社に進みました。当時の同志社には、滝川事件を契機に京大を去った先生方がたくさんいて、私はその学問・信条を全うしようとする見識、自由と反権力を貫く姿勢に強くひかれ、京大でなく同志社を選んだのです。

第二の転機は六九年にきました。弁護士志望からかわって研究生活に入っていた私に、当時の成田委員長から総選挙への出馬要請がありました。私はそのつもりはなかったのですが、新聞に名前が出たりしましたので、迷惑をかけてはいけないと思い、人事委員をしていた神戸市に辞表を提出しに行きました。市の助役さんは「出馬しないのなら辞めることはない」と慰留してくれたのですが、途中何度も「当選できっこないんだし」と言われているうちにだんだん腹が立ってきました。「負けてもともとで出ます」と言ってしまったんです。助役さんはびっくり。成田さんも、「お預けします」という電話に対し、「本当？」と信用してくれませんでした。

後悔してませんか、とよく聞かれます。しかし戦争を知っている人間として、憲法を守り、伝えていく責任が私にはあります。一度歩き出したら、その方向でどしどし歩むしかないと思っています。そういう意味で私は、委員長就任の時、「やるっきゃない」と本気で言ったんです。

第二部 市長時代

初当選

女房に「しくじった」。そう言った覚えがある

〔メモ〕三十八年の横浜市長選は戦後五回目。社会党は最初の二十二年こそ、石河京市氏で勝ったものの、その後は平沼亮三氏、半井清氏と保守系候補に敗れ続けた。ところがこの年、自民党は現職の半井氏と新顔の田中省吾氏の二派に分裂することが決定的となり、社会党に市長選挙の好機が訪れた。選挙前年の秋ごろから、飛鳥田氏も中心の一人になって候補者選びが進められた。

本命は安倍能成(学習院長Ⅱ当時)の弟で横浜地裁の所長をやった安倍^{はか}恕だった。最初に名前があがったのは十二月になってからだ。同じ法曹界だったんで知ってたけど、名前を上げたのはボクじゃないよ。確かボクの親父だったな。

穏やかで非常にさっぱりした人だった。兄貴が兄貴だから信念を変える人じゃあないし、わりと自分の政策をやるだろうという期待があったんだ。社会主義的な期待じゃないけどね。

年末になって、委員長の河上(文太郎)さんたちと東京の赤羽台のうちに口説きに行ったら、兄貴がいいと言うならば出るって言うんだ。そこで、たしか大みそかに、また河上さんたちと、今度は兄貴を口説き



市長に初当選し、胴上げされる飛鳥田氏=38年4月18日、横浜市中区の選挙事務所で

に行った。その時は、正月を迎えるために、熱海にある岩波(書店)の社長の別邸にいたんだよ。

恕の言う通り、出る出ないは兄さんの諾否によると話したよ。そしたら「駄目だ。うちの弟は政治家じゃない」。頑固だからね、あのじい

さん。河上さんが主に説得したんだけど、内容は「君、そろそろルビコンの河を渡りたまえ」

っていうような話でね。吹き出したんだよ、オレはそこで。あんまり古いから。結局駄目だった。

一時ごろ行って、四時間ぐらいはいたかなあ。ショックだったよ。帰りの列車は大変な込み

ようでね、車掌に頼んで車掌室に座らせてもらったんだ。話しているうちにね、河上さんがつ

くづく考えて言ったんだ。「こりゃ、駄目だよ。選挙までにはもう時間もないしな。ほかにいな

いから君、出たまえ」って。その時は、そうですわね、なんて言ってごまかしてね。まだ、出

るつもりはなかったから。でも、安倍に断られたら、もう責任を取るよ

りほかしうがないかって感じもあったね。年が明けて七日ごろ、伊勢佐木町の小料理屋に呼び出されてね。党県連の幹部に口説かれて結局、ボクの支持母体だった横交の大ボス、三塚（慶次郎）のおやじたちに進退を任せただ。

代議士は続けたいけど、安保問題で国会でさんざんやったのに、たいして何も変わりゃしない。間接民主主義ではねえ、どうにもならないんじゃないか。このまま代議士を一生やってみたところであつたこととは。市長になって、直接民主主義を実践してみようという気持ちもあったんだ。でも、古いものへの愛着もあつてね。心中ではそういうのがないまぜになつてたんだよ。出馬表明は結局、一月十七日だったな。女房はね、初めは反対だったよ。市政の泥にまみれるより、それまで通り軍事・外交の専門家として国会で働いてもらいたいわけだ。でも、オレはとにかくやるって言ってね。一週間ぐらいであきらめたよ。鈴木茂三郎（元社会党委員長）なんかもね、ずいぶん止めたよ。よせって言うんだよ。君はこのまま黙っていいやあね、書記長になれる。そっち行っちゃえばそれちゃうじゃないか。そういう人材を失いたくないってね。向坂（逸郎）先生もね、つまらないじゃないかって。

党本部内でも賛否分かれてたね。まあ、当時は党本部でも、地方の首長なんてものはね、そんなに大きくみるなんて考えなかったんだ。代議士の方が格が上ってみられてたから、国会で同僚に会うと「なんだ君。地方へ逃げるのか」なんて言われたよ。自民党の議員なんて、あ然としてた。

〔証言〕 岡三郎氏（社会党県連会長として飛鳥田氏出馬の説得に当たった。同党県本部顧問） 保守派が分裂しさえすれば何とか勝機があるだろうとの見方でした。当時、飛鳥田君はバリバリの現職衆院議員、引張り出すからには、四分六分の可能性では踏み切れない。彼を擁立する考えはだいぶ前から腹にありました。が、自民側の一本化工作をずっと見ていました。一月に入ってから二人立つことがはつきりしたので、他

の県連役員と相談して、説得することにしたんです。しかし、私が河野一郎と会って、保守が一本化しないように裏取引をしたといった、当時うわさされたようなことは覚えていませんね。

開票の時はね、選挙事務所はうるさいからすぐ目の前にある喫茶店に行ったの。オレは少なくとも五万票くらいは開いて勝ってみせる、と思っていたんだよ。選挙中の反応は良かったからね。どこ行っちゃった必ず手を振ってくれるしね。地元の磯子区なんて、全部オレに入っちゃうかと思ってた。

ところが開けてみたら、こっちが負けてんだろ。驚いたよ。午後になつてもひっくり返らない。そのうち半井の方がね、祝勝会をやりだすんだよ。万歳もやってた。これは負けた、と思ったよ。女房に電話で「しくじったよ」。そう言った覚えがあるよ。

結局、開票の遅れてた港北の票が出てきて、逆転したんだな。もう夕方だったと思うよ。連絡を受けて、事務所に戻ったんだ。新聞記者やテレビもね、皆、半井の方へ行つてたのが、あわてて駆けつけてきた。

〔メモ〕 二七九六四 飛鳥田一雄 社新

二六七一八八 半井 清 無現

一〇六〇九四 田中 省吾 自新

（38年4月17日投票、18日開票）

接戦になった理由はやっぱり向こう側にあるんじゃないかな。半井と田中がもっと激しく対立して、真つぶたつに割れると思つたんだ。そうすりゃ、オレが勝つに決まつてるっていう根性でね。そうしたら、二人の差が十万票も開いたろう。半井がとり過ぎたんだよ。もし負けたらね、もういっぺん総選挙に出たよ。それは約束してたよ、党内で。

宣伝のやり方ではすぐれてたよね。ほとんどボクが考えたんだ。そういうことには癡る方だから。目新しかったのは「横浜市政に関する三つの手紙」だね。有権者にあてた手紙の形で、公約を訴えたわけよ。そういう形にしたのは、分かりいいからさ。その時分は珍しかったよ。

〔メモ〕「三つの手紙」は「F君」にあてた形で書かれた。四十八ページの小冊子で、第一の手紙は「市政と中央・市民集会・市政の三本の柱」、第二は「特に市営交通機関について」、第三は「横浜における港湾問題」だった。集会などで配られた。

構想を練り始めたのは出馬表明する前だよ。あのころ一日中、うちに寝ころがっていて、女房に書き取らせた。だから女房とボクの二人の合作だよ。無駄じゃないかっていうやつもいたよ。しかし、実際まき始めるとものすごい反響でね。みんなくれ、くれて。後から増刷して、結局十萬部作るようになった。ポスターと一緒に表紙のデザインは錦ちゃん（高橋錦吉氏）。写真は牧田仁、詩は山田今治。出馬を決心してから頼むよって。どれもこれも、皆、子供のころのワル仲間だね。いかにオレの手作りかって分かるだろ。

大勢の人の討論を経てないからね、あとから見ると間違いもあったよ。政策なんかも全くのベテンもあった。例えば、横浜市に港湾専門学校を作ろうなんてね。公約したけど必要なかった。これは外国のまねなんだよ。世界最大の港、オランダのロッテルダムで作ってた。それを思いついたからさらさら書いてちゃった。今思えば必要ないんだ。ここにでね、浜港労連って組合がしっかり教育的なことしてるからね。

あと、シンボルマークにね、ハトのマークのワッペンつけた。こんなのもボクが全国初めてだよ。後で、美濃部（亮吉）さんが都知事選に出た時に貸してくれて言ってきたよ。

選挙戦では社会党を前面に出したよ。その時分は、社会党だって今と違って全盛だもん。でも党本部は

知らん顔よ。金はくれなかったし、応援だって普通の総選挙と同じぐらい。市長選なんて重視していなかったし、当選できるもんかって冷たい見方だったね。県本部は夢中にやってくれたけどね。

浜っ子なるがゆえのプラスもあったね。その当時はまだ今みたいに横浜市が大きくないだろ。人口百五十万のうち五十万くらいは浜っ子だよ。これはやっぱり大きかったね。神中の同級生とか、浜っ子は前面に出て応援してくれた。保守票もかなり食ったはずだよ。

〔証言〕 竹田四郎氏（代議士時代の秘書で、当時、県議候補として一緒に統一地方選を戦った。前参院議員）ボクは港北区から立候補していて、開票の時は港北にいた。票の開き具合が遅いんで、飛鳥田さんの票が少ないと誤解されて、事務所から「何やってんだ」って文句言われたのを覚えています。本当は、まだ開いていない分に飛鳥田票がたくさんあって、最終的に半井をひっくり返せるって情報を流したのに、全然、信じてもらえなかった。飛鳥田当選を最初に知ったのはボクじゃないかな。

「市長の申し子」って思わせるようにした

「メモ」「富士山山頂に落下傘で降りたようなもの」。初当選の時、飛鳥田氏がもらした言葉だ。飛鳥田氏はまず、外部からブレンを呼んだ。第一号は鳴海正泰氏。東北大を卒業後、後の美濃部都政の政策集団となる東京都政調査会で自治体・都市問題を研究していた。三十八年六月に入庁した鳴海氏は、以来、一貫して市政の中核で活動が続ける。マスコミからは、ニクソン大統領の補佐官キッシンジャーをもじってナルミンジャーと呼ばれた。

とにかく、大統領補佐官に相当する人間が欲しかったの。だって一万人以上の吏員がいるだろ。ボク一人でそんなに分かるもんか。「これどうなんだい」って聞くブレンは、なくてはならぬもんだ。もちろん、助役や局長などの職員にも相談するし、優秀な役人もいたよ。でも彼ら、自由にものを考えられないの。庁内に入って型にはまっちゃうからね。

鳴海君と最初に会ったのは市長選に初めて出た三十八年の二月。ボクの演説会の前座で講演をしてくれたんだ。それまで全く知らなかった。だれかが頼んだんだろう。ボクも途中から会場に入って聞いたけど、民主主義の原点みたいな話だったな。外国や歴史上の例を出してね。で、こいつは絶好の野郎だと思つたよ。市長として民主主義を進めるためにね。彼の論文も何本か読んで、間違いないってんで、都政調

査会に頼んで譲ってもらった。

最初の一年くらいはずいぶん辛かったらしいよ。普通の職員は四十代で課長になるのに、彼は三十二歳で課長級だからね。ブーブー言う職員がいたよ。一杯飲んで「若いのに生意気だ」とからまれたことも多かったらしい。ボクにはひと言も訴えないけど、ムードで分かるもん。

若いやつの中には「鳴海は飛鳥田市政の森蘭丸だ」なんて言うのもいたね。でもボクは、もっと蘭丸にしようと思ったんだ。彼を頼っていることを何度も何度も職員に見せつけてね。「やつは市長の申し子だから言うことをきかなきゃ損だ」と思わせるようにした。すると、一年ぐらいいでもう、鳴海君がいなきや夜も日も明けないようになっちゃった。彼の判断も公平だったからね。

実に有能な男だよ。例えば一万人集会ね。全く新しい試みだろ。各局各課全部が集まんなきや条例案なんかできない。でも、役所ってのは縦割りだからなかなかまとまんない。そこを彼、いろんなところに出向いてはうまく調整してね。実に鮮やかなもんだったよ。

市政だけでなく、他の革新自治体との連携も一手に引き受けてね。四十七年にロンドン、モスクワ、ニューヨーク、パリ、東京の首長が集まる世界大都市会議ってのを東京でやったり。あれも実は、鳴海君の発案なんだ。その随分前に、新幹線でボクと彼が美濃部さん（美濃部亮吉東京都知事当時）と乗り合わせてね。「世界の大都市同士で都市問題を話し合うべきだ」っていう鳴海君の持論を、オレ、美濃部さんに話したんだ。美濃部さんは「いいアイデアだ」って喜んでね。これがあの会議の発端さ。

ボクの政策はみんな彼が考えたと言ってもいいよ。そりゃ、ボクもたくさん思いつくけど、その中から実行するものを選択するのは彼だからね。随分、ボクのアイデアつぶされたよ。桜木町駅の高架下の塀があるじゃない。あそこ国際的な画家をたくさん呼んで壁画大会をしようって言ったんだ、オレ。でも彼

は「わき見運転で事故が増えるだけだ」って反対してね。仕方がないってあきらめた。まあ、これなんか、いま思い出したばかりのつまらない例だけだね。

思想的には二人は違うんだよ。ボクが彼を「ウエーバーの輩」、彼がボクを「オールド・ボルシェビキ」ってよく言い合ったよ。ボクはイデオロギーを出し過ぎるからね。彼は「それは危険だ」って再々言った。だから、ボクの政策は、マルクスがウエーバーを着て歩いてるようなもんさ。

〔メモ〕 ウエーバー(マックス)は近代合理主義を歴史的に分析したドイツの社会学者で、ここで言う「ウエーバーの輩」とは「闘わぬ市民派合理主義者」といったところ。ボルシェビキはロシア革命を主導したレーニン派の通称で、「オールド・ボルシェビキ」は「古くさい革命論者」のような意味あい。

市長を辞めたとき、彼を市役所に残しとくのはオレの義務だと思った。だって市にとって大事な人だもん。彼がいれば、ボクがいなくても、これまで通りの市政でゆくだろうとも思ったしね。彼も残るって言ったから安心してたんだ。結局、彼も辞めちゃったけど、残念だね。使える人なのにな。大きな組織だから、どこかに風穴をあけとかなきゃ駄目なんだよ。

〔メモ〕 鳴海氏は、飛鳥田氏が社会党委員長に転出した五十三年春以降も庁内にとどまり、同年七月、職員共済組合事務局長に。五十五年四月に退職した。

〔証言〕 鳴海正泰氏(関東学院大教授) 飛鳥田さんは、それまでほとんどつきあいもなく、小生意気な若僧のボクの意見を実によく採用してくれた。ボクはそのことを喜ぶより、むしろその度量の広さにびっくりするくらいだった。しかも市長とブレインという関係でなく、全く対等に議論し、つきあってくれたからね。本当に感謝してる。その一方で、やんちゃなアイデア市長だから苦労もした。でも、だからこそ、あんなに多彩な自治体行政の実験ができたと思う。とにかく、飛鳥田さんが太陽でボクは月だった。太陽あつての月だからね。

〔メモ〕 飛鳥田氏のブレインと言われた人に田村明氏もいる。東大の建築、法律、政治各学科を卒業し、運輸、大蔵、農林、労働各省にそれぞれ短期間、キャリアとして勤めた変わり者。民間会社を経て四十三年、新設された企画調整部長として横浜市に入り、以後、六大事業(都市部強化、金沢地先埋め立て、港北ニュータウン建設、高速鉄道Ⅱ地下鉄Ⅱ建設、高速道路網建設、ベイブリッジ建設)をはじめ数々のプロジェクトを手がけた。船橋成幸氏も四十七年に社会党本部組織局長から飛鳥田氏のブレインに。

田村さんにはねえ、初対面で文句を言われたんだよ。市長になって間もないころ、二十人ほどの学者と港湾局のランチに乗って港を視察したの。その中に彼がいてね。山下公園の臨海鉄道を指して「あれじゃ公園の景観が台なしになっちゃう。あんなものひくべきじゃない」って言うんだ。ボクも全く同感なんだよ。あれ、半井さんが決めてひいちゃってたんだ。教養の点でも人間的にも、いい人だったのが第一印象だったね。

六大事業のプランニングを頼んだのが市との縁の始まりさ。直接民主主義への道を進むと同時に、都市のフィジカルな面も変えていかなきゃ、都市の改定ってのはできっこないと考えてね。彼の先輩の浅田さん(浅田孝環境開発センター所長Ⅱ当時)の事務所に頼む形にしたけど、もちろんそこで仕事していた田村さんの実力を意識してのことさ。もう二人のコンビに全面依頼だよ。

できてきたプランを見てね、壮大すぎてちょっとやりにくいなあと思ったよ。だってボクは市長やるの一期だけと思ってたの。直接民主主義を市に植えつけさえすればいいんだからね。後は国会に戻ってもよし、弁護士やってもよしと考えてた。ところが、この六大事業は一期じゃとてもやれないだろ。ボクらが想像してたのはせいぜいあの半分ほどの規模だった。こりゃあ最低三期はやらなきゃって思ったよ。

それからもう、田村さんはほとんど毎日のように市役所に来たよ。事業を実際に進めるためにね。ボクにも話をするし、部局長たちにも話す。当時はまだ部外者だから反感を持った職員もいたらしいけど、彼

の話を直接聞いたやつは皆、感心してた。だから後で市に入ってもらった時も自然な感じだったね。市には道路や橋を造るのに優秀な人は随分いたけど、全体を見通せる人はいないもん。田村さんはその専門家だからね。オレも法律屋で都市計画なんてものは知らない。彼が先生だ。あのころシティー・プランニングの本をよく読んだよ。彼に教えてもらってたね。

強情でね、彼。いったん言い出したら絶対に自説を曲げないの。助役になった大場（正典）さんがつけたあだなが「坊ちゃんマムシ」。坊ちゃんみたいな顔してるくせに食いついたら離さないって。うまいこと言ったもんだね。彼は国、県とか市議会とか、よそ行って強ええんだよ。だから議会のうけは良くなかったらうね。彼が答弁すると長くてね。「そもそも」から始まって世界各国の例を挙げてやるんだから。委員会とかで答弁してる時、ある議員が「田村教授、講義はやめろ」って書いて彼に見せたこともあるらしいよ。自分の発言を絶対取り消さないから、議会が紛糾したこともあったな。

オレも何度かみつかれたよ。当時、毎週月曜日の朝に首脳部会議ってのをやってね。ボクと鳴海、田村、助役が集まってるいろんな問題をディスカッションした。人事でね、ボクがある職員を部長に上げようって言ったら、彼がまずいって頑張ってたね。結局、会議が流れちゃったこともあったよ。

田村さんも鳴海君も、結局は辞めちゃったけど、ボクが委員長になる時は市に残った。社会党に連れて行ったのは船橋君だけさ。彼は党内では無派閥でね。ボクが三期目に入ったころ、派閥人事の關係で党を出て就職先を方々探してたんで、囑託として市に入れたの。遠慮して表には出ないけどね。区民会議をプロデュースしたりして、直接民主主義をやるボクの意図を一番察してくれたのは彼だよ。文章書かしたらうまいもんでね。今の社会党で文章書けるの彼だけだよ。ボクの代表質問なんかみんな彼が書いてくれたんだ。

委員長に出るときね、ボクは彼も市に残そうと思ったの。党にはもったいない人材だからね。でも彼がどうしても行ってくてね。まあ党は彼の古巣だし、その方が本望だろうと思って連れて行った。鳴海君たちも、裸で行くより一人でもついて行くのがいいんじゃないかって言ったんでね。

〔証言〕 田村明氏（法政大教授） ボクは、縦割りの行政機構を横につなげなきゃ絶対いいものはできないという問題意識がありましてね。市に入ってもそのためのシステム作りと人間づくりに最も力を入れました。それも具体的な仕事を通してやらなきゃ駄目。だから部下を持った「長」になった。この意味でボクは完全なラインだし、ブレーンとひと言で片付けられるのは不満です。飛鳥田市政は自治体が初めて自治体たり得た市政でした。しかし今、その成果をとり入れているのはむしろ保守市政の方だと思いますね。

〔証言〕 船橋成幸氏（社会党本部企画調査局長） 一般に革新市政は、高度成長の波に乗り、そのメリットを革新的に配分することで勢力を伸ばしてきました。ところが横浜市は、人口急増で市民のニーズをすべてカバーするのは困難だった。本来ならこの点で市民から非難されてしかるべきだったのに、飛鳥田先生は苦しい中でも次々に革新的手法を打ち出し、市民と苦楽を分かち合う市政を実践しました。市民参加を進め、考え、行動する市民を作り上げたのが最大の成果だと思います。

一万人集会

いつでもバリ・コミューンが模範さ

「メモ」選挙での大きな公約の一つに「一万人市民集会があった。市民の生の声を直接聞いて市政に反映させる——」との狙いが、野党の反対が強かった。九百四十七万円の市民集会費をめぐって、三十九年三月の予算市議会ではもめた。

間接民主主義ってやつに限界があるってことは、六〇年安保の時に代議士やっててしみじみ感じてたんだ。いくら政府をやっつけたって、カエルの面にしょんべんだろ。市議会だってね、それまでのような沈滞したものなら、無くていいって思ってたんだ。本当に。

それで、何かうまい民主主義はないかって探してみたら、直接民主主義があった。「間接」がいかにとすれば、どうしても結局、個人に戻るだろ。それでも、二、三人がワイワイわめいたりするんじゃ、意味がない。そこで、間接民主主義でありながら、もう少し個人に近いところを求めたらどうだろうと考えた。これがオレの言う「直接民主主義」の原点さ。要するに、ボクはバリ・コミューンのやり方を考えていたわけだね。いつでもバリ・コミューンが模範さ。

「一万人」の根拠なんて、ただ何となくよ。初めは五百人にしようか、千人にしようか考えてみたけど、

ええい面倒くせえ、一万人にしちやえと。

決して市議会の権限を超えるもんじゃない。市民と生の意見を交換したいんだって説明したんだ。けど議会ではね、野党が「議会軽視だ」「社会党の党勢拡大策だ」、果てはオレの選挙対策だなんていつて反対したんだ。特に民社が強硬でね。県連会長だった曾祢益（参院議員Ⅱ当時）なんかは『朝日ジャーナル』に反対の論文書いてたな。かえって自民の方が柔軟でね。途中で妥協策を出してきたよ。妥協するより否決された方がいいって思ってたけどね。

でもね、曾祢はごく当たり前のことを言ってるんだ。正しいってんじゃなく、それまであった民主主義をね、守ってあげばそうなるよ。新しいものを出して何か殻をぶち破ろうとするのは、今までの制度に反する、という理屈だ。だから新旧の争いさ。

社会党はね、市民集会が否決された場合には、議会解散で対抗しようっていうんで、オレを信任する動議を出そうって決めたんだ。野党が反対して否決になりや解散ってわけよ。オレも了解してた。でもね、解散なんかなりっこねえって気持ちがあったよ。だって選挙をやったばかりの人間がねえ、また選挙やるってことは大変なことだよ。まあ、いわば脅しってとこだな。事実、野党は信任動議には賛成よ。弱腰だって思ったね。

結局、野党四党派が修正動議を出してね、市民集会の予算案は否決されちゃうわけだ。オレは過激派だからね、裏の根回しはしなかった。だから通るとは思ってなかった。しかし、うわべだけはシヨックを受けたような顔したね。やられたっていうような。

ところがこのどさくさでね、市長や議員の報酬を上げる条例が可決されちゃったんだ。よりによって、選挙で公約した一万人集会が否決された時に、オレの給料の値上げが決まるなんてね。しかも社会党まで

賛成だ。オレ怒ったね。辞めるって言って、鳴海君にも机のものを片づけろって指示したんだ。

議会提案はね、二回目からは予算案じゃなくて、条例案に変えたんだ。予算案の場合には金の出し入れがあるだろ。条例ならそれがない。けちな議会は金の出し入れがなければ文句ないだろうと考えてね。次からはもうテクニクだからね。騒げば騒ぐほどこいて。要は、市民に直接民主主義を知って欲しいということなんだよ。否決されたって新聞が書いてくれりゃ書いてくれるほどこい。だからしつこく何回も何回も提案し続けたんだ。全部で四回だったな。

議会でする一方だね、市民の組織化をどんどん意識的にやったわけさ。要するにボクの第一の目的は市民集会を市民の問題にすることだからね。「市長と市民の会」なんかができたのはボクの作戦通り。ただし、金や人を与えたりはしなかった。やってくれないかって頼んだ程度で、あとはもう任しちゃった。十万の署名が集まってね。当時は署名なんてやってない時分だから、かなり影響あったね。議員なんて人気商売だからね。反対をよそうか、なんて話も出てきたよ。

結局、四十二年になって、この「市長と市民の会」の主催で万人集会は開かれたんだ。

〔証言〕 北村清之助氏（中区の連合町内会長連絡会長で、「市長と市民の会」の初代会長となり、万人市民集会を開いた。自民党市議） 私はもともと自民党の支持者ですから、選挙では半井を応援してたんです。しかし当選した以上、協力していかなくては良い町づくりはできないし、まわりからも頼まれて、会長になりました。私になったんで、保守系の人も安心して入ってきたようです。イデオロギーで応援しているわけではありませんから、私としては「直接民主主義」という言葉より、なぜ市民の声を聞くのが悪いのかって気持ちが強かったですね。否決されたのは、野党に「飛鳥田」イコール「社会党左派」という先入観があったことと、飛鳥田さんの側にも、あんまり直接民主主義をふりかざしすぎたという対応のまずさがあったためだと思いますよ。実際は、市長になってからは別段、左派的なことをしなかったのね。

〔メモ〕 万人市民集会は、二期目に入ってすぐの四十二年十月二十二日、横浜文化体育館で開かれた。約六千人の市民が集まった。

ボクが真ん中に座って話し合うわけだ。でも、感慨っていうのは別になかったね。わりと興奮しない方だからね。普通の演説会と同じだったよ。

議論自体はそう、思ったほど楽しくなかったね。実際、市民集会を開いてみると、そこで出てくる問題はもう身のまわりのね、ゴミの問題とか何とかがって問題だけであって、少なくとも次元の高いものは出ないわけよ。政治的な、こう飛躍ってものがない。

初めはね、横浜市民のレベルはうんと高いと思った。漠然と本なんかで思ってたただけだけど。そのうちはんだんやっていくうちにね、そう高くねえなっていう印象だったよ。

万人集会は結局二度開いたんだけど、その後は、規模を小さくした区民会議を市の手で開くことにしたんだ。万人集会じゃあ、結局、発言できない人間が多いんだよ。だから、不満が出るだろうって考えて変えたわけだ。区民会議なら三、四百人だから、発言したけりゃいくらでも発言できるからね。それでもやっぱり、ありがたかな発言が多くて駄目だったね。

出てくる人の半分はね、昔からのおいさん。そして半分は若い人。だからかみ合わないんだよ。小さくしたんで、ボクがかなり高度な解説できるっていう効果はあったけど、市民の話は万人集会の時と似たりよったりだね。それから区民会議だとね、区長が参加者を制限しちゃう可能性があるんだ。するなっすいぶん言ったんだけど、やっぱりそれは役人がね、きれいにやりたいだろう。発言のお膳立てまでしちゃうんだ。

だから学者の中からはね、オレが啓蒙君主であって、市民は支持、対立、無関心の三つに分裂して広が

りが無い、なんて批判が出るわけだ。でもね、だれでも最初から完成した形でできっこないんだよ。ともかく始めてみるってことが大事。そのプロセスを忘れてるんでね、そんな批判者は。

初めて日本でやるんだから、不完全なことはある。そんなことぐらい、こっちは十分知ってる。そういう欠点もちながらも、なおかつやる。やることによって、新しい、それまで加わっていなかった人間が入ってくる。そして、それがだんだん広がってゆく——こういう感じでやってたの。だから、最初が啓蒙君主制であることはもう、分かりきったことなんだ。そしてまた、当時の日本人は啓蒙君主型の民主主義しか受けつけないんだ。啓蒙君主であっていいんです。ただ、それに終わっちゃうようじゃ駄目なんだ。鳴海君なんかにも始終言ってたよ。フリードリヒ大王みたいなもんだなって。その欠点はその人たちよりも先にボクは知ってるの。

参加する市民としての横浜市民が成長している、とは思わないねえ。今なお、啓蒙される立場から変わっていないね。だからボクは少しせっかちだった。市長やってた十五年でそういう体質は一応、植えつけられたと思ったんだ。それで、成田さん（成田知己社会党委員長当時）に呼び出されて、東京へ行っちゃった。でも十五年は短すぎた。三十年くらいずっとやってればね。

とにかく種はまいたつもりだけど、芽をふき、実がなったかというところ、そいつはどうかな。結局、代議士として、市長になった時に考えてた直接民主主義っていうのは達成されなかったね。市役所には初めは残ってたけど、ボクがよした時。しかし、やがて死んじゃったね。細郷さん（細郷道一現市長）がボクのとを引き継いでくれなかったからね。市民の方もね、啓蒙された人もいたけど、そういうのがどんどん転動していつて散っちゃうんだよ。違うやつが来るだろう。で、結局、全然新たになっちゃう。全日本的にやらないと難しいね。

このままで行けば、啓蒙時代はまだ続くだろうね。やっぱし、そいつを打ち破るような全国的なテーマが出てこなくちゃ。テーマを作って、その状況を作って攻めることを考えなくちゃ。今までの革新の悪いくせは、向こうから問題持ち出されて、受けて立つって形だったから。今度はこっちがテーマ持ち出して、それで攻めるということを考えなきゃ無理じゃないかな。このチャンスとしては国家秘密法がなるなって思っ、尾崎君（尾崎秀樹）文芸評論家。ゾルゲ事件で処刑された秀実の実弟なんかと話し合ってたんだよ。

〔証言〕 中村紀一氏（大学四年生だった三十八年に「市政モニター」一期生となり、一万人市民集会の分科会にも参加するなど、一市民として「市民参加」を体験した。筑波大教授） 一万人集会の総会を実際に議論する場というより、飛鳥田売出しのイベントとしての色彩が濃かったと思います。それでも、それまで「雲の上の人」だった市長が住民の前に出てきて、親近感を持たせたことは大きな意味があったと思います。初期の飛鳥田さんは、それほど市政に自信がなかったのか、市民の声を聞かなくて、という柔軟な姿勢が感じられました。モニターとの懇談会でも、大学生だった私ともよく話し合いました。しかし、当選を重ねるに従って自信がついてきたのか、だんだん偉くなっていき、「市民と一緒に」という姿勢が薄くなっていったようです。

戦車闘争

「日本の法律を守れ」とマイクで叫んだよ

〔メモ〕 四十七年春、アメリカは北ベトナムへの爆撃を再開。あわせて、ベトナム戦線で使う戦車を相模原補給廠で修理し、横浜ノースドックから積み出す作業が始まった。五月上旬からの一カ月だけで搬送された戦車は七十台と推定された。代議士時代、「安保五人男」の一人と呼ばれ論陣をはった飛鳥田市長は、市長権限で戦車を止める手だてを考えた。八月五日午前零時五十分、補給廠を出たM48戦車を積んだ五台のトレーラーが、ノースドック手前の村雨橋にさしかかったところでビケ隊に行く手を阻まれた。その後二日間、戦車と市民とのにらみ合いが続いた。

現場はそりゃ大変な騒ぎだよ。まさかと思ってたのに本当に戦車を止めちゃったんだからね。百人ほどのビケだったけど、みんな興奮して指揮者も何もありやしない。国道をまたぐ歩道橋には市民が鈴鳴りだ。真下に見えるんだよ。むき出しの戦車がね。オレもM48を見たのは初めてで、思ったよりでっけなと感じた。すぐハンドマイクで何度も叫んだよ。「米国は日本の法律を守れ」って。

その年の四月に車両制限令が改正されたのが事の発端なの。制限を超える重さや幅の車が市道を通るとき、市長の許可を得なければならなくなった。本格的な車社会になり、道路が傷んで困るってんでね。こいつを利用して戦車を止めてやれと考えたわけだ。

戦車が通る市道は、国道15号を曲がってからノースドックに入るまでの五百メートルだけ。この間に村



M48戦車闘争で、ビケ隊と一緒に座り込む飛鳥田氏=47年8月5日、横浜市神奈川区で

雨橋と千鳥橋の二つの橋があるのを利用したんだ。「M48は、橋の重量制限四六・九トンを超えており、危ないから通行を許可できない」ってね。でも、ここでもう一つうそついてるんだよ。他の車を通行止めにして、一台ずつゆっくり通れば通れたらいいの。でも、橋を造ったのは横浜市だからね。市が「通れない」って言えば国もどうにもならなかった。

作戦は、社会党県本部や相模原で運動の中心になっていた丹治君（丹治栄三相模原市議当時）らと立てた。戦車が補給廠を出れば、門近くの監視小屋から電話連絡が入る。その一方で、社会党を通じて国会議員や県議、市議、社青同（日本社会主義青年同盟）の若者を村雨橋に動員して迎え撃つ。オレは、女の人ばかりを道路に座らせて止めちゃおうと思ったんだ。女をひけやしないからね。実際は、男がたくさん座り込んだけど。と、ここまで準備してオレ、しくじっちゃったんだよ。戦車を止

めた日、オレ、女房と箱根に行ってたの。夏休みで。ここ二、三日は搬送しないだろうと思ってね。おかげで現場に着いたのはその日の午後になってから。「あと一、三日待ってくれば、すぐ行けたのに」なんてこぼしこぼし車でも向かったのを今でも覚えてるよ。

すごい反響だったよ。近所の奥さんは、握り飯を炊いて持ってきてくれるし、大型トラックの運転手が「今までオレたちばかり悪者扱いされてた」とジュースを一ダースも差し入れてくれたり。いわゆる組合闘争屋だけが参加したんじゃないんだ。「西側諸国の一員」なんて言って、アメリカに盲従する今の状況とは全然違う。

この戦車闘争のポイントはね、「国内法を守れ」としか言わないこと。もちろん、本当の目的は、知らないうちにアメリカの戦争を手伝わされてしまう日米安保体制の危険性を市民に知らせること。でも、「安保反対」なんて抽象論をいくら叫んでも駄目。みんな耳慣れしちゃってるから。で、アメリカが日本の法律に違反して戦車を運んでるといふ具体的な事実を市民に突きつけたんだ。これだと国も自民党も妨害する余地はないしね。

世論のバックアップがあったから、米軍や国とのその後の交渉でもオレたち高飛車だったよ。小泉さん（小泉富太郎総務局長当時）なんて海軍帰りだからね。すごいよ。国との交渉で机をバーンとたたいて「駄目だ」って。いってみれば、独立国の尊厳をかけた闘いだからね。

話はそれるけどね。現場に青年がいてね。社青同の小泉っていう。これが後で、娘の亭主になるんだよ。娘も行ってたんだ。親子で闘争よ。その前からやつことは知ってたけど、オレは結婚に反対してたんだ。このとき見直したってとこかな。

〔証言〕 小泉富太郎氏（県公安委員） 夜、自宅でくつろいでいると、市長から電話で「すぐ来い」。横浜駅西

口の東急ホテルに行くと、すでに市長が陣頭で指揮をとっていました。以後、私はつきっきり。市長は何度か現場に行って演説しましたが、社会党から「反対派に刺されるなど事故の恐れがあるから、市長を外に出すな」とクレームがつきましてね。私が「あまり出てくれるな」と頼みました。市長は思想的背景があってやっただけじゃなくて、法律に基づいたことですからね。われわれ行政マンも、当然のこととして素直についてゆけました。それにしても、私は海軍帰りですからね。戦車が引き返した時には「米軍では変わった軍隊だなあ」と思いましたよ。搬送する命令が出てくるんですからね。旧日本軍なら、絶対強行突破してると思いますね。

〔メモ〕 戦車がいったん相模原補給廠に引き返した後、政府の態度は「戦車搬送については米国に日本の国民感情を考慮するよう求める」「ベトナム戦争用戦車の修理、補給、輸送は安保条約上問題ない」などと二転、三転、結局、米軍車両などを車両制限令の適用から除外する政令改正をし、十一月八日、米軍は九十六日ぶりに搬送を実施した。

二日で引き返しちゃったろ、戦車が。あの時はみんな「勝った、勝った」って大喜びしてたけど、オレは「困ったな」と思ってたんだよ。だって戦車が五台止まり、ボクらが前でわいわいやって初めて市民にアピールするからね。ビケ隊のみんなは寝る間もなく頑張ってたから、次々に新手を入れて闘争が続けるつもりだったんだ。ボクは、米軍は一週間ぐらい止まった後、必ず強行突破してくると読んでた。よし、その時には、先の市道のアスファルトを工事の名目で全部ひっぺがして阻止しようと思ってたの。それがすぐ帰っちゃうんだもん。やりにくいよ。向こうにも知恵者がいるなと思ったよ。

ここから国との交渉が始まるわけだ。社会党本部とも連携とってね。ボクが「問題はもう道路法内での議論を超えた」と、記者会見で発表する同じ日に、党本部が相模原補給廠の機能停止を政府に申し入れたりね。国の対応もころころ変わってしどろもどろ。やればやるほどボロを出すって感じだったよ。

木村元帥（木村武雄建設相当時）も市役所に来たよ。代議士のころからわりとボクと親しかったんで、

「オレが飛鳥田と話つけてくる」なんてしゃべって、政府の完全な了解をとらずにすつ飛んで来たらしいんだ。ボクの方は譲る気ないから、ああ元帥、ばかなことやってるなって思ったよ。三木（武夫国務大臣）は逆に、激励してきたよ。オレと同じ明治出身だからね。自民党でもこの程度のことはいいんだよ。ところで、こんな闘争をするんだから、ボクがガチガチのアメリカ嫌いだなんて思う人がいるかもしれないけど、本当は、座間や横浜の司令官たちと仲良かったんだよ。最初は彼らが表敬訪問に来てね。それから行ったり来たり。随分一緒に酒を飲んだよ。軍のバーなんかでね。女房連れて行くと、必ず酔って「アメリカ人は好きだが、アメリカは嫌いだ」とか「安保反対」って叫ぶんだ。でもその後、ダンスしたりね。こんなことを始終やってたよ。反安保だからこそ必要なんだよ。誤解を作らないためにもね。

結局、政府は政令を改正して戦車を通しちゃった。そりゃ残念だった。でも本心は、「もう大丈夫」ってのんびりしてた。だって、闘争の目的はベトナム戦線に合うように戦車を送らせないことだろ。それには十日ぐらい止めりゃあ十分だった。それを九十六日も止めたんだからね。もともと、安保を無効にするような大革命やるわけじゃないもん。部分的にある程度の効果があればいい。だから、敗北感はないからね。

五十二年にベトナムに行った時ね、ファン・パン・ドン首相がしみじみと礼を言ったよ。おかげで、わが軍の兵士が何千何万と助かりましたって。だってM48は三階くらいの高さあるもんね。そいつが縦横無尽に撃てばたまんないよ。片っ方は立派な武器があるわけじゃなし。

一つだけ残念なのは、こういう闘争が他の自治体にあまり波及しなかったこと。随分言ったんだけどね。安保反対という原則だけの闘いじゃなく、具体的な闘いをよそでもすべきだって。党本部もね、口では「横浜に学べ」って言うけど、出て来ないんだな、知恵が。いざ何をしたらいいかがね。やっぱり基地

問題に直接対面してないだろ。真剣さが足りないんだろね。

今、全国を見渡してね、うまくやっているとと思うのは富野さん（富野暉一郎逗子市長）だね。ただね、彼は腹の中に安保反対ということがあるだろう。それを腹に置いて、しかし表面的には何も言わず、今のやり方をやる。これが理想的だと思うんだよね。しかし、こういう理論を彼、とらない。だからボクは満足しないし、弱いと思う。けどうまくやっていることは確かだよ。

〔証言〕 丹治栄三氏（元県議） 相模原ではその年の五月から戦車阻止闘争を続けていました。しかし、そのころは車両制限令を思いつかず、せいぜい三十分ほど止めるだけ。舞台を村雨橋に移し、飛鳥田市長を得て初めて、あんな大きな闘争にできたと思います。現物を市民に突き出す形でベトナム反戦を意義づけてきたんですから。戦車搬送当日の午前十時に、補給廠で働く知り合いの日本人から私の自宅に連絡が入り、党の各議員や社青同の仲間に連絡して集結しました。戦車を止めた後も、いつ強制排除されるかと心配でたまらなかつたから、戦車が引き返したときは本当に泣けてきました。

接収解除

「書類忘れていく」って司令官が言うんだ

〔メモ〕 市長になった三十八年、横浜市内には二十七カ所、約七百三十万平方メートルの米軍施設があった。この接収地の解除も、飛鳥田市政の課題となった。在任中の十五年間で解除されたのは十四カ所、約百三十万平方メートルにのぼる。

一番印象に残ってるのは、本牧の住宅地区だね。当時の住宅地区司令官がバンバグっておじさんでね。海軍大佐なの。彼自身、もともと技術屋で応召して軍人になったから、わりと普通の市民の感覚を持ってんだ。最初は、将校クラブにボクが招待されて行っ一杯飲んでね。それで気が合っちゃったんだよ。それから、お互いに女房連れて行ったり来たりのつきあいさ。

ある日、彼がいきなり市長室に遊びに来てね。世間話した後、握手しながら「オレ、書類忘れていく。後で取りに来るから」って言うんだ。事実、ソファに革のかばんを置いたまま帰っちゃった。中を見るとね、本牧の住宅の移転に九十五億円かかるっていうアメリカの見積書が入ってたんだよ。ちょうど当時、移転費のことで米軍や国と話し合ってたね。向こうは百三十億円かかるって言ってたの。ふっかけてたんだ、米軍は。すぐコピー取ってね。その後の交渉で使った。すごく役に立ったよ。

バンバグってのはやるなと思ったよ。たぶん、米軍がうんとふっかけて日本と交渉してるって話を聞いたんじゃないの。で、オレにだまされるなってことだったと思うよ。その後もよく一緒に飲んだ。「お前がソシアリストでなければ、もっといろいろいいことあるのに」って盛んに言ってたよ。

この話、今までだれにもしてないよ。でも、もういいよ。彼、死んじゃったんだ。司令官辞めて、退役して故郷のサンジエゴに帰ってね。女房がわざわざ知らせくれた。オレ、花を贈ったよ。

田中（角栄元首相）のところに陳情に行ったよ。大蔵大臣だったころね。あそこの下水や何かは、昔、土建屋だったときにやつが造ったらいいんだ。で、「あれはただでやるよ」なんて言う。「そんな物いまださらもらったってしょうがない」って言うよ。「いや違う。オレがやるって言えば、ほかの業者も工事やらせろとうるさく言っこないから」なんてね。

まだしっかりしてるから十分使えるって盛んに言ってたけど、実際は駄目だね。今、みんな造り直してるだろ。

〔メモ〕 本牧一号住宅地区は四十四年三月、日米合同委員会で返還が合意された。しかしその後、隣の二号地区と一括返還ということになり、住宅の移転先である横須賀基地の受け入れ態勢の問題などが出たため、実際に返還されたのは五十七年三月。飛鳥田市長時代には実現しなかった。

住宅の移転先が決まらないもんだから返還が延びに延びてね。結局、横須賀基地内に埋め立て地を造って移すってことになったけど、内々で長野先生（長野正義横須賀市長）に移させて欲しいって頼んだ。でもなかなかうんと言ってくれなかったな。

接収解除ってのは、ボクの仕事の柱の一つだったね。何しろ山下公園の中にも米軍宿舍があった時代だからね。どけなきや都市計画も何もできないよ。米軍も当時は、必要で筋が通ってるなら返そうって腹だ

った。国も解除を進める立場だし。だから、重要なやつはほとんど解除させたつもりなんだよね。完全に一掃したわけじゃないけど、横浜の安全は保ったってふうに考えてるんだ。

ただ、上瀬谷（通信施設）は失敗しちゃったよ。電波妨害になるといって、地元農家はビニールハウス一つ造れなかった。で、地下室を造って、中でウドの栽培を奨励したんだ。大場さん（大場正典農政局次長当時）が話を持って来たとき、ボクも大賛成した。もちろん農家の人たちも喜んでくれたよ。今思うとこれが失敗だった。ウドによって基地と周辺の住民が共存しちゃったわけだからね。基地の存在を認めちゃった。

〔メモ〕 上瀬谷通信施設は市内最大の米軍基地。西太平洋からインド洋に展開する艦艇、航空機からの電波受信が主な任務だが、近年C-1（指揮、統制、通信、情報）システムの中心としてP-3C対潜哨戒機などを指揮していると言われている。六十一年には、米議会に出された軍事計画の中で、米海軍が同基地内に艦隊作戦統制センターを新設する計画を持っていることも明らかになった。

ボクらがね、上瀬谷の米軍の中の位置づけを、十分には知らなかったんだ。何かくさいぞ、ということとは分かってても、C-1の中心になるなんてね。当時は読み切れなかった。最近の増強ぶりを見ると、ウド栽培なんかしないで、もっと闘争を激化させるような方法をとるべきだったと思うよ。全部接収を解除しろってね。そうすれば今のような増強はないだろう。後悔してるよ。

〔証言〕 川松康作氏（本牧接収地区解除返還同盟の事務局長として運動した） 同盟は地主の集まりですから、保守的な人が多くてね。飛鳥田さんに反感を持ってる人もたくさんいました。そんな中で、私は神中の後輩にあたり、個人的にも飛鳥田さんをよく知っていたので、同盟と市長との仲立ちをするような形で事務を引き受けたんです。接収解除への飛鳥田さんの意気込みはすごくてね。『ど真ん中が接収されてる市なん

て世界のどこにもないよ』とよく言っていました。社会党だったから、国との関係で難しい点もあったらしく、しょっちゅう東京に行って、自民党の代議士なんかにも頭下げてましたよ。みんなの目に見えないところですごく努力をしてる彼に、私も本当に感謝しました。解除は市長を辞めた後だけど、全部彼がやってくれたと思いますよ。

基地立ち入り

雌伏何年の懸案よ。しつこいね、オレも

〔メモ〕三菱石油水島製油所の重油流出事故(四十九年十二月)がきっかけとなり五十年十二月、石油工業地帯災害防止法が制定された。京浜工業地帯も特別防災区域に指定され、横浜市は計約二千基のタンクの調査を始めた。ところが、米海軍鶴見貯油施設(鶴見区安善町)の検査ができない。日米地位協定が、基地内の米軍自主管理を保証しているからだ。

雌伏何年だよ。六〇年安保の時に、地位協定の審議を満足にやらなかった。地位協定ってのはボク、国会でしゃべりたいとこだったんだ。西ドイツとNATO(北大西洋条約機構)軍の協定なんか見るとね、基地内の安全や衛生について国内法の水準を下回ることを得ずって規定があって、西ドイツの行政機関の立ち入り検査が認められてるんだよ。ところが、日米の協定ではそういうこと作らなかった。そこを追及してやろうと質問の準備をしたのに、審議打ち切りだからね。恨み骨髄だよ。この時以来の懸案よ。地位協定に風穴をあけるってのがね。随分しつこいね、オレも。

米軍基地といったって、鶴見はもともとアメリカの石油会社の施設だからね。防災対策がちゃんとされているか分かったもんじゃない。火が出れば、すぐ近くの寛政の町に燃え移っちゃうからね。こんなんじや、市民の安全なんてとて守れないよ。コンピナートの法律ができた時、絶好のチャンスだと思ったん

で国に協力を求めたんだ。五十一年の一月のことだよ。ところが、いくら待っても地位協定をたてに、色良い返事がないんだよ。だからいろいろ作戦を練った。まず国にはね、「検査できないって言うなら、災害が起きた時、市は一切面倒みない。国で全部やってくれ」って言ったの。まあ一種の脅しだね。

米軍に対しても知恵をしぼったよ。鶴見の施設は二カ所に分かれてて、この間は地下パイプで油を通してた。途中に安善橋って橋があって、ここではパイプは橋の下にぶら下げてあるんだ。この橋がかなり古い橋でね。で、老朽化を理由に架け替え工事をやることにした。するとぶら下がっているパイプをどうするかが問題になるだろう。そこで「立ち入り検査を認めれば、仮橋へのパイプ移設に応じてもいい」とやったんだよ。もう一つ。パイプが埋まっている市道を舗装してくれっていう陳情書を周りの企業に出させた。実際必要なんだよ。タンクローリーが始終通るのに、道路は凸凹だったからね。工事すると、道路掘り返すだろう。「パイプに穴があいてもいいのか」ってことさ。これを突破口に、パイプの安全性を調べるには、基地内の送油装置なんかも見なきゃならんって作戦よ。

地元の町内会も協力してくれてね。おじいちゃん、おばあちゃんを集めて視察に行くんだ。基地の中には入れないから、ゲートから中をじっとのぞくだろ。「オレのパパみたいなのが来てちよろちよろしてる。あれはやめてよ」って基地の米兵が言ったらしいよ。このあたりの交渉は全部、白居君(白居昭三渉外部長)がやってくれた。いま振り返っても、あの手この手とよくまあ考えたもんだね。

〔メモ〕この年の十二月、日米合同委員会で、日米共同の形を取って市の基地立ち入り検査を認めることが合意された。第一回の検査は翌年七月六日。タンク間の距離、タンクの保有空き地、防油堤容量の三点について、巻き尺や測量器具を持った市消防局の職員が調べた。

検査が実現したのは、最後にボクらが譲歩したからだと思うよ。交渉が膠着状態になったんでね、ボ

ク、横田基地に行つて共同チームで検査しようって提案したんだ。こうすりゃあアメリカのメンツも立つだろう。ただ、米軍が検査するのを市は横で見てるなんて意見が出たんで、これはけったよ。実質的には市が中心になって調査した。タンクと敷地の境界の距離が短かったり、防油堤の量が足りないってことが分かったんで、改修してくれて要望もしたよ。

〔メモ〕この後、鶴見貯油施設では五十四年七月に落雷による火災が発生し、小柴貯油施設（同市金沢区紫町、長浜町）でも五十六年十月、タンクが爆発した。米軍は六十二年七月、鶴見貯油施設の防油堤と流出油等防止堤を国内法の基準を満たすよう改修する旨連絡してきた。

六〇年安保の時ね、立ち入り検査権ないの当たり前じゃないかって言う人、多かったんだよ。当時はね、安全面だって衛生面だって何もかもアメリカの方が優秀だって感じたからね。米軍に任しときゃ大丈夫と思うのが一般的だったんだ。事実、あのころは米軍の方が優秀だったろうね。でも今は違う。基地といえども行政にとってタブーじゃない。そして、日本の水準以下のことだってあるんだということが証明できた。

〔証言〕長谷川寿夫氏（消防庁危険物規制課長補佐として横浜市や米軍と交渉した。消防研究所研究企画官）
米軍との交渉は基本的には国と国との外交問題ですからね、一市長が騒いでもどうにもならないですよ。立ち入りは、米軍が安全確認について日本政府の技術援助を要請するという形で実現したんですが、これは米軍が日本国民の心情を理解してくれたからできたんです。それにこの形式だと自主管理を定めた地位協定に全く抵触しませんからね。横浜市も、国、つまり消防庁が立ち入り検査する際の手足として基地内に入れたんです。それを飛鳥田さんは「安保に風穴」なんて言っていて、いかにも横浜市の力でやったように宣伝するもんですから困りました。下準備をしたのも検査したのも国なんです。「横浜市、立ち入り検査」とデカデカと書いた新聞を見て、「トンビに油揚げさらわれた」と憤慨したのを覚えてます。

フロントム墜落

「米軍のやつら、とうとうやったな」って思った

〔メモ〕五十二年九月二十七日午後、横浜市緑区在田町（当時の宅造地に米海軍厚木基地を飛び立って空母ミッドウェイに向かうRF-4Bフロントムジェット偵察機が墜落。破片が付近一帯に飛び散り、九人の死傷者を出す大惨事になった。ちょうどこの日、飛鳥田市長は、社会党本部から委員長就任要請の使者が来るのを待って市役所を離れられず、翌日、現場へかけつけた。

現場に行った時、まだエンジンの残がいなんか残ってたね、方々で煙が出てんだよ。焼け落ちた建物を見て「米軍のやつら、とうとうやったな」って思った。四十六年にも旭区の雑木林に落ちたことがあるし、今度のような大事故になる可能性は、前からあったわけさ。被災者のことがまず頭に浮かんでね、すぐ緑区の吏員に一生懸命世話するよう、特にハッパをかけたよ。

その後、二週間に一回くらいの割合で、米軍や国に抗議したんじゃないかな。「厚木基地を撤去しろ」とか「墜落原因が分かるまで飛行を中止しろ」とかね。マンスフィールド大使にも直接会って文句言ったよ。彼も「私にも三歳の孫がいる。この子が事故で死んだら私は気が狂うかもしれない。人間の気持ちとして最善の努力を払う」って言ってたのを覚えてる。米軍が事故機のエンジンをこっそり本国に持ち帰ったことが後で分かってね。この時は「すぐ返せ」ってカーター大統領（当時）に電報打ったよ。交渉の中

心になってくれたのは、この時も臼居君でね。不眠不休で仕事して、奥歯が全部抜けちゃったらしいよ。

一番頭を痛めたのは、市民の安全の確保だね。十月に入ってから、航空工学や飛行技術の専門家に頼んで航空安全対策委員会ってのを作つたんだ。要するに、飛行中にトラブルがあつても、海に落ちてくれれば犠牲者は出ないわけだ。そのためには、市の上空を飛ぶ米軍機にかなり高い高度をとらせなきゃいけないだろ。委員会の議論もこの点に集中したよ。ところが、航空法や安保条約が航空機についてはすでにいろいろと規制してるからね。それらに触れないで新たに規制することは難しいんだよ。で、どっかに穴はねえかって探してね。委員会のメンバーだった宮城さん（宮城雅子航空法調査研究会代表幹事）が見つけたのが、地上の騒音の大きさで高度を規制する方法だった。

ボクはね、住宅地騒音の環境基準と同じ四五ホン以下にしろって言ったの。でも、猿田君(猿田勝美公害対策局長)に「道路近くの住宅地だって、車の騒音が基準を達成できずに困ってるのに、飛行機だけを強く規制するのはむちゃ」と反対されちゃってね。結局、七五ホン以下になった。七五ホンていうと、当時の新幹線騒音の環境基準と同じだね。この辺が限界ってことだった。これでもF4ファントムだと高度四千米ートル以上を飛ばなきゃならないからね。故障しても海まで行けるんだよ。

「メモ」委員会の検討を経て市は十一月末①騒音は地上で七・五ホン以下②飛行経路などの市長への通報③市長の騒音測定と公表——などを骨子とする「横浜市の上空を飛行する航空機に起因する障害から市民生活を守るための条例」案を作成した。しかし、十二月市議会は、飛鳥田氏の社会党委員長就任をめぐり野党が審議を拒否、同条例案を含む三条例案を市側が撤回することで空転は収拾された。

実を言うかね、もともと条例案自体に無理があったの。横浜上空で四千メートルになるには、かなり急上昇しなきゃ駄目だね。燃料の消費量は多くなるし、技術的にも難しいんじゃないかって話も委員会で出

たよ。無理な条例案を出したのは、十五年間市長やって、この時だけだよ。条例案を発表した時、「精神条例だ」と書いた新聞があったけど、その通りよ。こっちも、条例できたって米軍がきちんと守るなんて思っていない。ただね、米軍ってのは案外、法律とか条例とかに弱いんだよ。とにかく守ろうと努力はするんだ。この辺は戦車闘争で経験済み。だから、徐々に良くなるんじゃないかって期待で作ったんだ。もちろんボクの最終目標は厚木基地の廃止だからね。それへの予備攻撃って意味もあったよ。

だから、条例案を引つ込めるとき、仕方ないなあって気持ちも強かったよ。このころになるとね、米軍の方も上昇高度を上げるとか、横浜市と反対側へ旋回するとかの改善策を行方らしいって情報も入ってた。無理でも条例案を出したのはね、市民への置き土産として最大のことをやっていこうという気持ちからだった。米軍の対応の見通しも立ったんで、やや安心して委員長に行つたんだよ。

【メモ】米軍は五十三年七月、墜落事故再発防止のため、上昇高度を約六百メートルから千八百―二千四百メートルに引き上げる新方式による運航を始めた。

〔証言〕宮城雅子さん 私は安保反対論者じゃないので、飛鳥田さんから話があった時、正直言って戸惑いました。でも、直接自宅に電話をかけてくる熱心さに打たれ、あくまで専門知識でやって欲しいと言われ引き受けました。既存の法律に抵触しない範囲で高度を規制する方法を見つけることが私の主な仕事。一番困ったのは、安保条約に基づく各種取り決めの細目が公開されていないことでした。これでは抵触するかしないか調べようがありませんからね。ところが、何とか手に入れて見ると、非常にきちっとしたもののなんです。これじゃあ非公開にする理由はないと、五十五年に私の主宰する研究会で、航空機事故に関する情報公開を提言しました。この提言は、当時社会党委員長だった飛鳥田さんに紹介していただいて運輸大臣に直接渡しました。それにしても、条例案を撤回した時はがっかり。市民のために良いことなのに、随分姑息な市議会だなあと思いました。

公害防止

大事なのは技術の進歩を見続けること

〔メモ〕 市長に初当選した時、根岸湾では約五百万平方メートルの臨海工業地帯を作る埋め立て事業がすでに始まり、電力、鉄鋼、石油など八社の立地が決まっていた。ちょうど三重県四日市市の大気汚染が社会問題化し始めたころ。一日三百トンの亜硫酸ガス排出が予想されるのに、表向き、市長には公害防止の権限が何もなかった。頭を悩ます飛鳥田市長に三十九年二月、立地企業の一つ東京電力が、敷地の一部を電源開発の磯子火力発電所用地として譲渡したいと申し入れてきた。半井前市長との土地売買契約の中に、第三者に土地を譲る場合、市の同意が必要との項目があったからだ。

とうとう来るべきものが来たなって思ったけど、同時にしめたって気持ちもあったよ。ボクは代議士のころ、四日市を視察に行ったことがあって、横浜では絶対公害を出させたくないって思ってた。でも、具体策はなかったんだ。そこへ同意条項の話だろ。こいつを利用しない手はないよ。譲渡を認めず電発の立地を拒否するって手もあったけど、そんなことしたら埋め立て地が野っ原になっちゃう。技術的に可能って見通しもあったから、公害対策を万全にしたら立地を許すって方針にしたの。

電発はね、釧路市の太平洋炭鉱の炭を使うことを決めていた。立地を拒否すると、その炭鉱労働者が半分以上失業しちゃうわけだ。炭労（日本炭鉱労働組合）から随分、陳情があったし、釧路の市長（山本武雄

氏）当時も直接市役所に来て「釧路を助けてくれ」って言うんだ。炭労は社会党の支持母体の一つで、当時は強かったからね。この辺の事情も関係してる。あんまり表面には出さなかったけどね。

それからの交渉や実験は試行錯誤だからね。いろんなことやったよ。煙の流れを調べるため、埋め立て地から風船を飛ばしたこともある。風船に印をつけて、拾った市民はその場所を教えてくれてね。でも風船飛ばす時が大変だね。大きな袋に入れてロープで二百メートルくらい上空に上げるだろ。そのロープをどうやって切るか。最初、火をつけた線香をロープの先につけて焼き切ろうとしたけど、風で火が消えちゃって失敗。結局、カメラの自動シャッターにカミソリの刃をつけてね、そいつで切ったらうまくいったんだ。随分原始的だったよ。

電発も強硬だね。国策だからやらせろって。担当の助川君（助川信彦公衆衛生課長）当時も一時、弱気になってね。オレ、「そんなら場所（職場）変えてもいいんだよ」って言ったんだ。職員にこんなひどいこと言ったのは、このいっぺんきり。今でも気がとがめてる。助川君は正直でいい人だし、信頼してたけど、最初のころはおとなしい吏員だからね。でも彼、この後の交渉で「これをのんでくれないと、辞表を出さなきゃならん」って芝居打ってね、相手を脅かしたらしいよ。

市の要求に電発が従うよう指導してくれて通産省に要望して、助川君が返事もらって来たら「要望の趣旨に沿うよう取り計りたい」て文面なの。「たい」ってあいまいだろ。で、言ったの。「タイじやなく（やり）マス釣って来い」って。「マス・タイ論」なんて言われて役所の中で話題になったよ。ボクも強硬だったよね。

〔メモ〕 約一年にわたる交渉の末、市と電発は三十九年十二月、①はい煙の排出量は一立方メートル当たり〇・六グラム以下、亜硫酸ガスは五〇〇ppm以下②良質炭を使う③市の立ち入り調査を認める——などを内容とする全国初の

公害防止協定に合意。規制数値は、当時の法定値の二分の一四分の一だった。自治体のインシアチブで公害対策を講ずるこの方法は横浜方式と呼ばれ、全国に波及した。

ボクはね、恵まれていたんだよ。根岸の埋め立て地に来るのはみんな大企業だろ。大企業は公害防止技術開発の力があるし、約束も守るんだよ。それに地理的に恵まれてるからね。言うこと聞かない会社の立地を断つても、すぐ代わりの会社が見つかる。「条件のめないなら、出てってくれて結構」なんて話を随分したよ。こんなこと、小さな地方都市や過疎県では言えないよ。ボクは公害に対して非常に功績があったって言われるけど、有利な条件にあっただけだよ。

ただ、横浜方式が広がっていくうちに、そいつを悪用するやつが出てきたのは不愉快だったよ。福井県の発電所なんかでは、厳しい協定を結んだのに、裏でもっと緩やかにするっていう密約をかわしたりした。人がまじめにやっているものをね、逆用するんだから。

〔証言〕 瀬川弘氏(電源開発火力建設課長として横浜市との交渉にあたった。開発肥料常務) 市街地のすぐ近くに発電所を造るんですからね。われわれとしてもぎりぎりまで譲歩せざるを得ないと思ってましたよ。それにしても、無理難題をふっかけられて苦労しました。ばいじんを取りやすくする装置はこのとき開発したのですし、二本の煙突の高さを変えたと煙がどンドン上昇することも、実験で分かってね。これで博士号を取った人もいました。オーストリア大統領のワルトハイムさんをはじめ、世界各国から公害防止装置の見学者が今も絶えません。飛鳥田さんは、操業開始の式典に市民の方を連れて来ましてね。わざと集じん機を止めて黒い煙を出させた後、合図して作動させると煙がスッと白くなって市民も納得する。そんな演出をしました。われわれから見ても、光ってるなって感じてました。

〔メモ〕 四十四年三月、日本鋼管は横浜、川崎両市に分散している京浜製鉄所を、扇島の前面約五百五十万平方メートルを埋め立てた先に移転し、近代化を図りたいと埋め立て権者の両市長に申し入れた。京浜工業地帯最大級の工場移転計画に、飛鳥田氏はさっそく県津田文吾知事と川崎市(金刺不二郎市長)に呼びかけて対策協議会を結成した。

当時、鋼管の社内にも、埋め立てなんかしないで苦小牧へそっくり移転しちゃおうって言うグループがあったね。彼らが埋め立て派と対立してたらしいんだ。ボク個人としてはどっちでもいいと思ってたけど、大変なのは川崎よ。鋼管の従業員と家族、それに下請け、孫請け入れりゃあ十万人はいて、ほとんどが川崎に住んでるだろ。十万人の失業を考えてごらんよ。かりに、全部が苦小牧に行くとしたら、これはもう民族大移動だよ。市も税収がガクンと減っちゃうだろ。金刺さんも本当にまいってたよ。

この辺の立場の違いが協議会内部でも微妙に出てきてね。横浜はそれまでほかの企業に要求してたのと同じ〇・〇一ppm(亜硫酸ガスの複合着地濃度)以下を主張した。最初はこれでもとまっていたけど、いろんな交渉や実験をして、鋼管が〇・〇三が限界って言った時、川崎が「もうこの辺でいいんじゃないか」って言い出したんだ。あんまり無理言って、出ていかれたら終わりってことさ。県も調整役ってことで、川崎に近いこと言ってたと思うな。こっちは猿田君(猿田勝美公害センター副主幹)当時の細かな計算をもとに、こうすりやできるって説明するんだけど、なかなか分からなくてね。最後には、〇・〇一が可能だってことを川崎市民に知らせるぞ、と金刺さんなんか脅かしたよ。

鋼管は、なるべく横浜市の意見に沿いたいって感じだったけど、それでも〇・〇一は技術的に無理だって言う。こっちは鋼管のデータを出させて、猿田君に研究させたよ。公害防止技術が、将来どこまで進むかも織り込んでね。最後に〇・〇一二で手を打ったのも、彼がオーケーしたからさ。

〔メモ〕 交渉は結局、横浜市ベースで進み、四十五年十二月、協議会と鋼管は①複合着地濃度〇・〇一二ppm以下②一時間当たり総排出量六百五十立方メートル以下——などを骨子とする公害防止協定に調印。埋め立て申し入れから約一年九カ月後だった。その後、協議会は、移転実施計画が出された四十八年、〇・〇一ppm、四百八十五立方メートルというさらに厳しい条件を提示。これも合意した。

大事なのは技術の進歩をずっと見続けること。本当にどんどん進歩するからね。協定を結んだ後も、鋼

管に技術開発の状況を報告させて、後で条件を厳しくしたんだ。それとね、公害行政で忘れちゃいけないのは世論のバックアップだよ。この時は「京浜に青空を取り戻す会」っていう住民団体ができて、鋼管本社に向いて申し入れたりしてね。これは効いたよ。

でも、全部が全部、うまくいったわけじゃないよ。車の窒素酸化物。これは駄目だったねえ。もちろん国でやるべきことなんだけど、自治体でもやってやろうってね。七大都市で排ガス規制調査団を作って研究したんだよ。

調査団は、低公害車以外の車の自動車税を引き上げる、なんて報告を出した。でも、これ、言ってみればはったりだね。できっこないんだよ。市内の車は通過車がすごく多くて、市民の車だけ税金上げると不公平だろ。かといって、全部の道路で検問みたいなことして金を取るのも不可能だ。東京からの車が多いんで、美濃部さんと連携してやったら、なんて話も出たけど、それでも駄目だよ。通過するかしないか、何回通過するか分かんないもんね。ボクは、メーカーの経営者が排ガス対策さぼってるって考えてたからね。とっても無念だった。

横浜方式ってのは、企業受け入れが前提だからけしからんって言う人いるけどね。横浜は立地条件がいいから結局来ちゃうんだよ。それなら、変なところに来られるより、ちゃんとした企業に来てもらって公害対策をきちんとしてもらった方がいいだろ。事実、立地を断った例もいくつかある。言えないけどね。今、よそで稼働してるんだから。

それに、企業進出はほとんど埋め立て地だからね。市街地にはほとんど来てない。横浜では市街化区域にすべきところまで調整区域にして、工場なんか入れなかった。こういう全体のバランスを見てないから、そういう議論が出るんだと思うよ。

〔証言〕 今田正春氏（日本鋼管環境管理部長として公害防止対策に携わった。日本鑄造参事） そりゃ、われ

われも公害は防ぎたいと思ってるし、可能な技術は積極的に導入するつもりでした。ところが、横浜市の方は「今はできなくても、将来できるはずだから」と難しい注文をしてくる。社内の技術屋は完全に否定的ですし、正直言って協定を結んだ時も、実現できる自信はありませんでした。時間に賭けた、と言ってもいいと思います。脱硝装置一つをとっても、百億円を投じた世界唯一のものですからね。それにしても、企業は悪なんだって決めつけてくる市の職員もいて、本当に苦労しました。こちら公害のない工場を造るのは良いことなんだと思ってるのにな。

地下高速道路

高架は横浜の額に傷、旗本退屈男にできん

〔メモ〕 東京方面から首都高速道路を利用して横浜に入ると、道は桜木町駅付近で急な下り坂になる。トンネル内を走ること約二キロ。再び外に出た時には、横浜、関内の中心街はすでに通り抜けている。時間にして数分足らずだが、この区間の(半)地下化を実現するために、飛鳥田市政は大変な努力を払った。話は、高速横浜線・高島町―新山下間四・二キロの延長を計画決定した四十三年二月十六日の神奈川県都市計画地方審議会にさかのぼる。

決定そのものには、高架とも地下とも書いていない。でも本当のところは、高架ってことで話はできてたんだ。建設省のペースでね。だけど考えてごらんない。あそこはもう根岸線が高架鉄道で走ってる。その上にもう一本ね、高いのができるってことはたまない。関内っていう横浜の玄関口に、旗本退屈男じゃないけど、こう、額に傷つけることだからね。何とかそれを防ぎたいっていうんで頑張り出して、せめて桜木町から関内までのあの区間だけでも地下にしようとしたの。

市役所内でもあんまり味方はいなかったね。すでに決まったことに何を因縁つけてるんだという感じで。でも断じてオレはのまないって姿勢を見せた。三月末の首脳部会議で、「みなさんも共犯になって下さい」って言ったよ。共犯ってのは、弁護士やってたくせでね。出来たばかりの企画調整室の初仕事で、

この問題さ。室長の鈴木(和夫)さんとか田村さんが苦労してくれた。

建設省がウンと言わないのはね、まず金。皇居の周辺が地下方式ね。あれがとってもねえ、金がかかったんです。で、もうまねはしたくないってのが建設省の意見だったよ。あそこは皇居だから特別。あとは町の景観よりも、早く、安くの時代だからね。でもその景観に、ボクはこだわったんだ。それから彼らにヤメンツもある。いっぺん決めたものを引っくり返されたんじゃ、かなわないってね、盛んに文句言ってたよ。

しかもボクには前科があるんだ。横浜駅西口に地下街あるだろう。あれは半井さんの時に地下一階が店、二階が駐車場って決まったんだけど、ボクは市長になってすぐ、三階もつくって駐車場を二重にしろって主張したんだ。先行き、必ず必要になるよって言ったんだけど、駄目さ。そういう前科者がまた言い出したってんで、あいつ、何でも因縁つけるじゃないか、と。

鈴木さんなんか、毎日苦しそうな顔してたよ。正直でいい人だからね。前に建築局長と土木局長をやつて、高架を承諾した同じ人が、今度は断りに行くんだ。おまけに彼、建設省出身だもん。途中で何べん辞表を出すところだったか、分らないよ。でもオレは、大丈夫だよって言って、へらへらしていたよ。だってこの方が市民のためにいいことだろう。それをやらないってことはないよ。「平気、平気」なんてね。田村さんは「断じて譲ってはいけませんよ」と言ってるね。彼は「緑の軸線」の発想者で、高架にされたら街が死んじゃうって、強硬だった。

〔メモ〕 「緑の軸線」とは山下公園から日本大通り、横浜公園を経て大通り公園、さらに蒔田公園に至るグリーンベルト構想。都計審決定では、この大通り公園入り口にインタチェンジが建設され、公園の上をまた別の高速道路が高架で走ることになっていた。

苦勞したんだよ。地下鉄とのからみもある。どっちも着工が延び延びになって、市会からは責められた。ボクら、もう立場なくてね。でも、横浜の美観を傷つけて、環境を悪くしてまでやる気はない——そこまて言ったよ。そのうち国も手ごたえが良くなってきて、天井を空けてる今の半地下形式ってことで、ようやくまとまった。緑の軸線もできる。一年かかったよ。金もかかって、市の持ち出し分が二十億円増えた。二十億で買った美観だよ、あれは。でも、しょうがない。今、考えてみれば安いもんだもん。

「メモ」延長部分の使用開始は五十三年三月七日。その六日前に、飛鳥田氏は横浜市長を辞めた。

今でも、あそこにもぐるたびに、「ああ、ここオレが造ったな」と思うよ。オレも勢いがあつたから出来た。そして、出来ちゃったら、もう当たり前でしょ。苦勞なんて消えちゃう。みんなが便利なら、もうそれでいいんだよ。偉そうなことを言って城を築いたりね、なんかしたって、忘れるもんだ、みんなね。オレはねえ、そういうのに名前をつけたり、書いたりするのが大嫌いなんだ。政治屋が橋造ったり、高速道路造るなんてのは当たり前だ。後に名を残すようなことは、したくないからね。

〔証言〕 依田和夫氏（当時、建設省都市局都市計画課長補佐。同省技術審議官。国としても、いいものを造りたい気持ちは同じです。しかし公平な取り扱いをするのが行政の大原則。戦後の影を引きずっている時代に、私たちも理想と現実の違いに悩まされました。何しろ日本橋の上にも高架道路を通したんですからね。量から質への転換が始まったのはオイルショック後ですから、飛鳥田市政は五年から十年先を展望する目を持っていたといえます。私もその後、街路課長として小樽運河を舞台に「誇れる街づくり」に取り組み、今は京都市街を走る山陰線の立体交差問題に頭を痛めています。古都の景観を守るためこちらは地下化を主張したのですが、京都市は財政難を理由に高架を譲りません。それならそれで、後世の批判は必至ですから、それに対する弁明書を書くつもりでデザインの質を高めるようお願いしました。二十年たって立場が逆転したわけです。

宅地開発要綱

市民のためだったら強盗にもなります

昭和四十年前後はすごい開発ラッシュでね。市の人口が年に十万人も増えるんだよ。市役所全体、まさにてんやわんやさ。なかでも学校建設。こればかりはほととけないからね。あらゆるものを犠牲にして、取り組んだよ。

そのうちに、東急が今の田園都市線沿線を開発して、大々的に売り出そうとしているのを知った。いや、計画は分かっていたけど、それがどんなものか実感できてなかったんだ。ところが、東急の「田園都市展」っていうのを見た鳴海君があわててね。完成予想模型には学校や消防署なんかの施設がちゃんと建ってて、見に来た人たちが「あら、あの辺を買えば学校にも近いわ」なんて話してるって言うんだよ。みんな東急が建ててくれるんらいよいよ、でも、横浜市に用地を買わせて、建てさせるんだからね。ふてえ野郎だと思ったよ、本当。開発する以上、自分たちで用意するのが当たり前だというのが、ボクの考えたった。

で、交渉が始まるわけさ。向こうは、「開発が進んでいる地区から早く用地を買って学校を建てて欲しい」と言う。こっちは、「そんなこと出来っこねえ。開発する側の責任をどう考えてるんだ」と言う。話

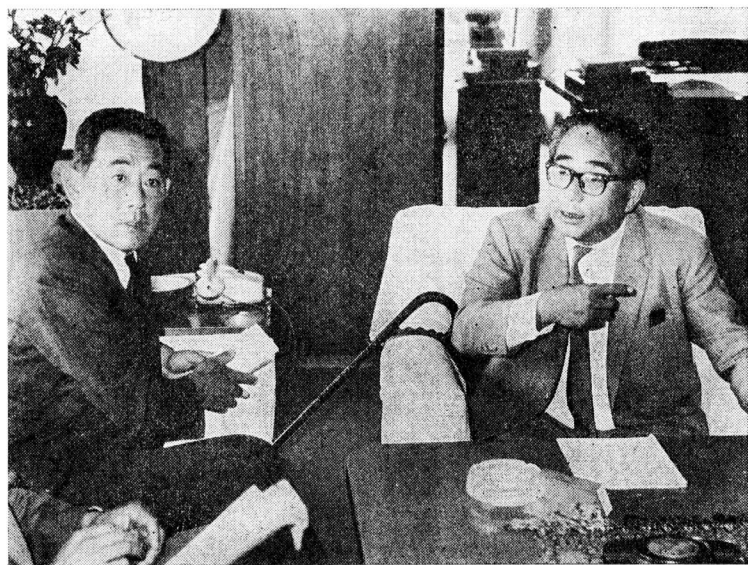
はなかなか進まなくてね。どっちも強情だった。

いろいろ揺さぶりもかけたよ。田園都市展の会場に行つて、「この完成模型はでたらめです。横浜に学校をつくる計画はありません」っていうビラをまこうしたり、「ここに引越してくる人は私立学校に通う覚悟で来なさい」っていう新聞広告を出すぞって脅したり。オレ、こういうドンパチやるの好きだからね。

そうでなくても横浜市は立ち遅れているんだ。すでに住んでいる市民の面倒さえ見切れない最中にね、新しく入ってきた人に土産をやるなんてことできないよ。市民税は市民に返すつてのが、ボクの公約だからね。学校でも旧市街なんかで必要なものから建てていくのが筋だろう。東急の計画だと開発地域に二十の学校を造んなきゃならない。大変なことだよ。

ところが思わぬところに敵がいてね。市役所の役人よ。学校なんかは地方自治体が負担するつてのが法律の取り決めだからね。それに違反して向こうに押しつけるのはどうでしょうか、という。どうでしょうか、それをやらなきゃ市財政はパンクさ。法律もへったくれもない。彼らは行政の職人としてのの言うけど、こっちは市民の常識、素人の発想でいくわけさ。財政当局や、当の一番困つてる教育委員会の平島君（平島進管理部長、教育長当時）なんかと一緒になつて、できないものはしょうがないじゃないか、現実をみろつて押し通しちゃったよ。こっちだって命がけだもん。

東急とは二年ぐらいもんでね。両方が歩み寄る状況になつた。それで四十二年のクリスマスの日に五島さん（五島昇東急電鉄社長）と会つて、この問題を検討する協議会をつくることにした。この時点であ、実質解決さ。五島さんと会つたのは、クリスマスの時と、次に覚書を結んだ時の二回だけさ。彼に、「私の父親は強盗慶太と言われましたけど、飛鳥田さんはそれ以上ですな」なんて言われたよ。だからこっちも



覚書を交換する飛鳥田氏(右)と五島社長=43年6月5日、市長室で

「市民のためになるなら、強盗にでも何にでもなりますよ」つてね。平気でいばつてた。

〔メモ〕四十三年六月五日、四校分の用地を東急が市に無償で提供、残る十六校分についても時価の約六分の一に当たる開発前の価格で譲ることを内容とする覚書が調印された。

東急は一件落着いたけど、開発は市内の至るところで進んでるからね。全部に網をかける必要がある。その作業をしたのが、できたばかりの田村さんの企画調整室さ。以前から役所内で議論はしてたけどまとまらなかった。法律は守らなきゃいかんつていう、さっきの理屈さ。私権を制限するのは憲法違反だ、なんていうのもいたよ。各部局縦割りでしょ。自分の担当する法令さえ守っていればいいつて考えたからね。

そいつを横に結びつけて、宅地開発みたいな問題は市全体で取り組む体制を作る必要があつた。東急だけに犠牲を強いるのは不公平だ、というのも反対派を抑えるのに役立ったよ。こう

して生まれたのが宅地開発要綱。横浜の要綱行政の始まりだね。全国に広まったよ。

〔メモ〕 同年九月一日から実施された宅地開発要綱は、①公園、学校、清掃工場などの用地を開発業者の責任で確保、提供する②市の方針に合わない小規模開発は認めない③これに従わない場合、水道の供給やゴミの収集などを行わない——など、法の基準をはるかに上回る厳しい内容だった。

県並みの権限をもつ政令指定都市がやるんだからね、大反響よ。建設省は「横浜はいつから独立国になった」なんて言うし、不動産協会も反発するし。でもやらざるを得なかった。これ以外に方法があるなら教えてくれて気持ちよ。そりゃあ、窮余の一策だね。法律的にいいものかどうか分からないよ。しかしこのおかげで、その後十年ちよつとで何千億という税金が節約できたんだからね。宅地開発要綱は確かに横浜を救ったよ。ボクは開発の憲法だと思ってる。

〔証言〕 酒井辛一氏（東急電鉄開発事業部長として横浜市と交渉した。ヴィボン社取締役相談役） 東急が恐れたのは、交渉が難航して開発そのものが進まなくなることでした。私は、名乗りをあげて途中から話し合いの中に入りました。当時の横浜市はお役所っぽくなく、また都市問題を十分理解してことに当たっている、という印象でした。機が熟していたのでしょう。数カ月で協議会の発足にこぎつけ、合意に至ったわけ。五島社長自身は、飛鳥田さんを高く評価し、決着を喜んでいました。ただ財界でのおつきあいなどがあるため、一応批判的な談話を発表したと思います。東急側にも、「うちは単なる不動産屋じゃない、都市づくりの専門家なんだ」というプライドがあり、これが決め手になりました。しかし、市役所内に意見の対立があったなんて、そんなそぶりは全く見ませんでしたね。こりゃ一杯食わされましたなあ。

原子力船拒否

大体ボクのところに持って来るのがおかしい

〔メモ〕 原子力委員会の長期計画で四十五年までに原子力商船を建造する方針が決まり、四十二年六月、科学技術庁と日本原子力船開発事業団は根岸湾埋め立て地の一部を母港用地として譲渡して欲しいと、横浜市に要請してきた。

大体おかしいよね、ボクのところに原子力船を持って来るなんて。今でもボクは反対なんだから。原子力開発そのものにね。だって、発電コストからいったって石炭より実質的に高いと言われてるだろ。そして、すぐ軍事転用されちゃう。だから、原子力を一切、横浜に入れないっていうのがボクの本音だったんだ。すぐ、拒否のための理論武装を始めたよ。

当時、日本に寄港するかしらないかで話題になっていたのが、アメリカの原子力商船サバンナ号だね。猿田君（猿田勝美公害センター主査当時）に命じて、資料を集めて研究した。

〔メモ〕 サバンナ号（二二、二〇〇トン）は世界初の原子力商船。一九六二年に完成し、二十六カ国の親善訪問や貨客運搬などで延べ約六十五万キロを航海したが、七〇年にコスト高などを理由に解役された。

サバンナ号の母港はテキサス州のガルベストン港っていつてメキシコ湾に面してるの。大きな川が港に注いでいてね。仮に事故があっても川の水が放射能を港の外に押し出しちゃう。メキシコ湾も潮の流れが

速くて、放射能はすぐ拡散するんだ。こういうところを母港に選んでるんだよ、アメリカも。

ところが、横浜の場合は全然違うんだ。三宅先生（三宅泰雄東京教育大学教授Ⅱ当時）に聞くと、東京湾の水は時計回りに回っているんだけど、流れがすごく遅い。湾外の海水との交代も遅いんだって。底も浅いんで、放射能の与える影響はガルベストーンに比べてずっと大きいんだ。三宅先生も「横浜には原子力船を迎えない方がいい」って言ってたよ。サバンナ号の資料だけだね。熱心に集めてくれたのは実は丸善石油なんだよ。取締役役には神中の同級生がいてね。たくさん資料を送ってくれた。当時、丸善石油も埋め立て地を買いたいって申し込んでね。彼らも原子力船が来ると困ったんじゃないの。とても役に立ったよ。

母港化を正式に断った後だけど、サバンナ号が韓国の釜山やフィリピンのマニラに寄ったことがあってね。その時、サバンナ号の先乗りをするアメリカ人二人が市内のホテルに泊まることが分かったの。オレ、すぐホテルに行って二人に会ったよ。「横浜に寄るかもしれないんで、断ろうか断るまいか困ってる」と言ってる話を聞いた。彼らの仕事はね、サバンナ号が入る一時間くらい前から港のあらゆる船を止める。出港するときも同じさ。で、次の寄港地に先回りして同じことをやるんだ。衝突したりすると危険だからね。これを聞いて、やっぱり原子力船というのは大変なことだとよく分かった。

しかし、この勉強の成果は表に出なかった。だって、安全性の論議は水かけ論になっちゃうだろ。市議会も自民党なんかうるさくなるだろうしね。だから、母港化は経済的なメリットがないってことを第一の理由にして断ったんだ。これも本当なんだよ。乗組員もたいしていないだろう。それが一年にいったんくらい来て金落としていったって、そんなものは目じゃないものね。企業が来る方がよっぽどまし。安全性の調査は、それでも政府が強行してきたののために、二段、三段の戦闘の構えを取ってたってことさ。不発に終わっちゃって損した気分だったけどね。

国や事業団は抵抗したねえ。一番しつこかったのは西堀栄三郎（事業団理事Ⅱ当時）だよ。西堀って言うても今の若い人たちはピンとこないだろうけど、南極探検隊の越冬隊長で、当時は花形だ。彼が来て、母港化しなきゃ損ですよって言う。経済性があるって。でも、こっちが売らないって言えば終わりだからね。結局、あきらめたわけだ。

〔メモ〕この年の十一月、母港は青森県むつ市に決まり、船名も「むつ」に。しかし四十九年九月、太平洋上で出力上昇試験中、放射線漏れ事故を起こし、以後、佐世保市、むつ市と一度も原子炉実験を行わないまま「漂流」を続ける。六十一年現在、むつ市の大湊港に係留されているが、六十五年度から一年程度の実験航海を行った後、解役されることが決まっている。

むつに決まった時ね、オレ間違えたんだよ。その前に青森県の知事（竹内俊吉知事Ⅱ当時）が市役所に相談に来たもんだから、ボクたちの調査資料をね、全部彼にやっちゃったの。ところが彼、自民党の大ボスだろ。ネグられて、それでパーさ。奈良岡君（奈良岡末造青森市長Ⅱ当時）は革新系でよく知ってた。彼のところにも送ってやれば展開は変わったかもしれないかった。青森県には気の毒なことをしたと思うね。

〔証言〕 甘利昂一氏（事業団専務理事として母港化を働きかけた） 十カ所ほどの候補地から規模や立地条件を考えて横浜に決めた。飛鳥田君は決して最初から拒否してはいないよ。むしろわれわれは、彼が迷っていると判断したからこそ、説得を続けたんだ。半年くらい毎日横浜に通っては、市議や商工会議所、婦人会の人たちに説明したよ。婦人会なんか実際は力持ってないけど、飛鳥田君が婦人票たくさん取ってるから狙ったんだ。市議会も多数派工作がうまくいった。ところが、議会で決を採れて何度言っても彼はうんと言わないんだよ。これで駄目だと思った。今でこそ政府の見通しの誤りが分かり、飛鳥田君が賢明に思えるかもしれないけど、当時はだれもが原子力商船時代が来ると確信してたからね。母港があれば、世界各国の原子力商船が集まるわけだし、彼の反対はとんでもない間違いだと思った。今でも彼には将来展望がないと思ってますよ。

市民外交

姉妹都市じゃなくて友好都市がいいって

「メモ」「市民外交」は、自治体レベルで外国との交流を進めようという飛鳥田市長ならではの政策だった。スポーツの交流から始まって三年目の四十年には、ボンベイ、オデッサ、バンクーバー、マニラと相次いで姉妹都市提携が実現した。飛鳥田氏は共産圏との交流に力を入れ、特に国交が回復していなかった中国に対して、熱心に働きかけた。四十六年の年頭会見で上海との姉妹提携を提案。その年の十一月、日中国交回復国民会議訪中団の団長として市長就任後初めて中国を訪れた。

中国がね、姉妹都市ってことを考え出したのは、横浜が刺激になってたんだ。泊まっていた北京飯店のボクの部屋にね、王国権（中日友好協会会長代理当時）が表敬に来たんで、姉妹都市になりませんかって話したんだ。そしたら姉妹都市って何ですか。知らないんだよ、全然。だから、鳴海君と一緒にね、兄弟のごとくつきあいをするという意味だよって説明をしたんだ。そしたらいづれを兄とし、いづれを弟とするんですかね。それで、姉妹都市ってのはおかしい、と言いつつ出したんだ。上下が出るんです。いってわけだ。ボクは弟でも平気だった。だって上海は一千万だもん、人口が。だからそう言ってたんだけど、向こうが友好都市にして下さいって。アメリカやフィリピンは姉妹都市だけど、中国はそんなわけで、みんな「友好都市」だよ。だけどそのままほっぽりとかれてねえ。向こうから結びたいって言ってき

て締結するまで、二年近く待たされた。

その間に、上海からジュニアサッカーのチームが来たんだ。四十七年だった。そのだいぶ前、文化大革命前の四十一年にね、横浜市の高校選抜チームが向こうに行ってるんだ。そのお返してわけさ。日中国交回復の直前で、まだ中国から日本に直行できない時代だった。それを鳴海君が、どうせ来るならお互い港町なんだから船で直接来ないかって提案したの。すんなり決まっちゃった。だけど台風で遅れたりしてね。ボクも大栈橋まで迎えに行つたけど、子供たちは船酔いでフラフラなんだ。それでも精一杯元気にふるまってるね、かえって悪いことしちゃった。

市内や県内の選抜チームと試合やったんだけど、朝鮮のチーム（神奈川県朝鮮中高級学校チーム）とやった最終試合でね、ゴールキーパーの子が、劉文斌君（当時一六）っていったな、腹をけられたかなんかで、腸に穴が開く大けがをしちゃったんだ。ボクも三ツ沢の競技場に行つて試合見てた。担架でかつぎ出されてね。隣がすぐ市民病院だから、そこに運び込んで手術よ。

結局、チームと一緒に帰れなくてね、半月ぐらい遅れてから帰ったんだ。ちょうど田中訪中の直前で、テレビ中継の技術者を乗せる特別機が飛ぶっていうんで、それに便乗させてもらったの。入院中もお見舞いがいっぱいだね。向こうに帰れば帰ったで、日中友好の美談だっていうんで、『人民日報』にも書かれたり、しまいに、教科書にまで取り上げられたりした。当時の友好ムード盛り上げに随分役立ったよ。まさにケガの功名ってやつよ。

この一件で、向こうでは横浜がすっかり有名になっちゃってね。翌年の十一月に、念願の友好都市の提携ができたんだ。当時、実は大阪もね、上海との友好提携を狙ってたんだ。だから向こうからはね、大阪とも結んでもいいかって言ってきたよ。いってオレの方は返事したんだ。だけど大阪は、オレたちよ

半年遅くなった。こっちが言い出しっぱだからね。横浜に敬意を表したわけさ。要するに礼節の国だよ、中国は。

最初に行った時の上海の副市長がね、馬天水。四人組の張春橋の一の子分さ。そいつとオレは仲良かったんだ。すべてを取りしきっていて事実上、市長みたいなもんだったから、一緒に記念の木を植えたりしたよ。ところがね、五十二年にまた行ったら、そいついないんだよ。失脚しちゃってたんだ。で、随分捜したんだけど、どこ行ってるのか、とうとう教えてくれなかったよ。

〔証言〕 北村鑣三氏（横浜市立市民病院の外科医長として手術を担当、帰国にも同行した。県立衛生短大教授） 運び込まれた翌日の早朝に、小腸せん孔であることがはっきりしました。開腹手術がすぐに必要となったのですが、子供なので親の同意が必要です。団長に話したのですが、本国との連絡に時間がかかり、やきもきしました。結局、同意がとれたのは午後三時ごろでした。手術、回復とも順調でしたが、入院中は中華街の皆さんが中国風のおかゆを運んでくれたり、随分お世話になりました。上海に着くともものすごい歓迎で、お母さんからは涙を流してお礼を言われました。私たちの乗る車は信号もノンストップ。よく分かりませんが、国賓のような待遇だったと思います。「上海市民であなただがたのことを知らない人は一人もいない」と言われたのを覚えています。

アジア卓球

スポーツで来るのに「いけねえ」はないだろ

〔メモ〕 「ビンボン外交」がひとつのきっかけで両国が歩み寄り、ニクソン訪中が実現した四十七年、北京でアジア卓球連合（ATTU）の総会が開かれ、四十九年の第二回アジア卓球選手権大会を日本で開くことが決まった。その後、日中文化交流協会の村岡久平事務局次長と日本卓球協会の荻村伊智朗国際部長が横浜市を訪れた。

村岡さんと荻村さんはね、鳴海君のところに相談に来たんだ。村岡さんとは上海市との友好提携のことでお互い、よく知っていたからね。大会を横浜で引き受けてくれないかっていうんだ。この大会のような種目別国際大会は、国は何もしないのが原則だったからね。おまけに、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）や南ベトナム臨時革命政府なんて、日本政府が承認してない国の参加問題があるだろ。ほかのどこじや引き受けられないって思っただらうね。正式な回答は翌年に延ばしたけど、内々では、すぐにやろうってことになったんだ。

市役所のはかに、卓球協会や日中文化交流協会なんかから人も出してもらって組織委員会を作った。ボクが会長になったけど、実際の仕事は鳴海君と村岡さん、荻村さんの三人が中心になってやってくれたんだ。

大会を引き受けるのは結構じゃないかって言ったけど、ただ金の問題でね、迷っちゃった。だって、何億ってかかるだろ。それを横浜市で出したものか、どうやってつくるのかって、そのことが気になって

ね。ひどく苦しみ、考えたよ。見積もりでは大体二億数千万かかるだろうってことだったんだけど、収入の方は、県と市の補助金、それに入場料なんか入れても二億円ぐらい。足りないんだよ。当てにしていた国の補助金が全くもらえなくなったのも痛かった。

そのころの日本卓球協会の会長が永野さん（永野重雄日商會頭当時）でね。永野さんからも、やってくれて頼まれた。財界の方でいくらか金をつくってくれてね。あと、あそこの銀行へ行ってみるとか何とかって指示してくれたりもしたね。それやなんかで、何とか大会開催までには大体終わってたけど、金集めが一番面倒くさかった。

金の話には裏があってね。大会の規則で、参加国は自費で来なくちゃいけないことになっているんだけど、実際はね、飛行機の切符を送ってくれなくちゃ参加できないってところが多かったんだ。第一回大会でね、中国がそういう前例を作っちゃったからね。しかたないから、香港にある中国の旅行代理店に安いチケットを買わせて、立て替えさせてね。後で職員を払いに行かせたよ。宿舎と食事は初めからこっちもちでしょ。だから、横浜へ行きや何とかなるだろうってね。小遣い銭を一銭も持って来ないのがいて困ったよ。のんきなもんよ。しかたないから、こっちで渡したよ。二万とか三万とかね、一人に。

寄付も結構あってね、決算が終わった後に来た一千万円を卓球協会に渡したんだ。これで、あそこは任意団体から財団法人になったんだよ。

開会近くになって出てきたのが、未承認国の来日とりやめ騒ぎさ。まず北朝鮮が、組み合わせ抽選会の直前になって、急に来ないって言ってきた。理由がはっきりしないんで困ってたら、今度は開会の三日前

になってカンボジア（カンボジア王国民族連合政府「シアヌーク政権」もとりやめたって連絡が入ってきたんだ。北京の日本大使館でね、渡航証明を取るのに、国名欄にどう記入するかもめたというんだ。夜九時ごろ、鳴海君たちからニュージーランド（横浜市内のホテル）に呼び出されてね。インドシナ三国の面倒をみてた中国の宋中さん（ATTU秘書役当時）も交えて、どうしようかって話し合ったよ。

結局、特別機を飛ばしてね、上海まで迎えに行こうってことになったんだ。カンボジア代表団と中国で会ったことのある鳴海君が一人で乗ってね。全日空ともすぐ電話で交渉してね。五百万円だかで話もつけた。わざわざ迎えに行きやあ、向こうも来ざるを得ないだろうって考えたわけさ。ところが、宋中さんが中国を通じて問い合わせたら、カンボジアはどうしても来ないというんだ。しかたないからね、特別機もやめたんだ。みんなで夜中の二時ごろまで話してたなあ。

〔証言〕 宋中氏（ATTU名誉主席） カンボジア選手団は、日本に来ることをとても不安に思っていたのです。選手の中には、当時、敵対していたロン・ノル政権からの亡命者もいました。日本政府はロン・ノル政権を承認していて、東京には大使館もありました。もし、ロン・ノル側に引き渡されもしたら、殺されてしまう危険があったのです。ですから、国名問題でもめたことで不安が大きくなり、参加をやめたのだろうと思います。特別機を飛ばすことは無理だろうと思っていました。ビザや着陸許可の申請にどうしても時間がかかってしまい、間に合わないからです。でも、皆、一生懸命だったので何も言いませんでした。

〔メモ〕 第二回アジア卓球選手権大会は、四十九年四月二日から十五日まで、横浜文化体育館で、三十の国・地域、約四百人が参加して行われることになった。最大の問題は日本と国交のない未承認国の呼称をどうするかだった。大会組織委員会は各代表団の主張する名称を使おうとしたが、政府は難色を示した。なかでも、南ベトナム臨時革命政府とカンボジア王国民族連合政府の二カ国については、日本が認めていた政権と交戦状態にあったため、特に慎重だった。カンボジアが参加をとりやめたため、焦点は南ベトナムに絞られた。

各国の呼称は、大会の母体だったアジア卓球連合(ATTU)の登録名にしようってことだった。第一回の北京大会でもそうしたからね。南ベトナムは、「ベトナム南方共和、REPUBLIC OF SOUTH VIETNAM」となる。それを日本政府はね、「南越(解放戦線)、SOUTH VIETNAM (NATIONAL LIBERATION FRONT)」にしろって言ってきた。この問題が片づかなくちゃ入国は認められないってわけだ。

初めはね、そんなやっかいなことになるとは思わなかったんだ。日本が未承認国が入国するのをさりと認めりゃあいわけ。で、その時は認めると思ってたんだよ。だってスポーツで入ってくるのに「いけねえ」はないだろう。ところがいざ始めてみると、そうでなかったね。

そうこうしているうちに組み合わせ抽選会が迫ってきちゃってね。しかたないから、国側の案をのんで、「南越」を使うって誓約書を書いちゃったんだ。でも守る気はないさ。入国させるための方便だったな。だって、来た連中が自分の国の名前を名乗れねえで満足するはずないじゃない。自分の国の名前を名乗りたいってのは当然だよ。歌とか旗とかっていうのはね、使わなきゃそれまでだけだし、国名はそういうわけにもいかないからね。

それに「南越」なんてって、通用しないよ。しかも、同じ未承認国でも北朝鮮には正式英語名の略称「DPRK」をすんなり認めてる。一貫性がないんだ。一応、北朝鮮は韓国と戦争状態になくって、安定した状況だって説明だけどね。

それがね、開会式の前の日の夕方に南ベトナムの代表団が、記者会見で「大会では正式名称を使うと聞いている」と言っちゃったんで、政府側を刺激しちゃってね。外務省と法務省は「重大な違約だ」って言うんだ。問題は開会式でのプラカードをどうするかだった。鳴海君たちが考えて、結局、「ベトナム南方共

和」を日本語と英語で並べて書くことに決めてたんだ。そこでこの騒ぎだろ。どうしようかっていうんで、夜中まで話し合ったよ。プラカードは市役所近くの看板屋に頼んだんだけど、新聞記者が「プラカードはどこだ、見せろ」ってうるさかった。

開会式の直前までいろいろ考えてね。結局、日本語表示は削って、英語名の最後に「TTAD(卓球協会代表団)」をくっつけることに決めたんだ。考えたのは鳴海君でね。ボクはいいよっていうひとことだよ。要するに、国の名前じゃなくて、ATTUの登録名だから文句ないだろうって理屈さ。

開会式には警察官が来ててね、どうするか見てる。法務省からも開会式の途中に電話がかかってきた。鳴海君は「英文表示だけ」っていうと電話を一方的に切っちゃったんだよ。で、入場行進の時のアナウンスも「ベトナム南方共和卓球協会代表団」さ。それで法務省が怒った。翌日、すぐ警告文よ。背信行為だ、すぐ直せってね。だけどこっちは、ああ、警告が出たかって程度だよ。

そこまではよかったんだけどね、最初は参加しないって言ってた北朝鮮がね、開会式が終わってから急に、「途中から参加する」って言ってきたんでややこしくなった。

北朝鮮の選手団が入国申請してもね、法務省が許可しねえんだよ。「是正が先だ」って。おかげで北朝鮮選手団はモスクワで足止めよ。これで参った。もう突っ張れない。だけど、もう、開会式で政治的效果は満点だったからね。したかないからプラカードは使わない、場内アナウンスは行わないとかいう三項目の条件を申し出てね。やっとオーケーさ。未承認国のために頑張ってたのに、結果として未承認国に振り回される形になっちゃった。

けどまあ、全体的には成功したと思うよ。三十カ国も来て、人数も相当なもんだろ。未承認国を何とか参加させようって目的もだいたい達成されたしね。何より、ベトナム問題に対する意思表示をした。こ

れはでかいよ。

〔証言〕 藤井基男氏（日本卓球協会から大会組織委員会に派遣されていた。同協会事務局長） われわれは政府側の案をのむつもりは初めからありませんでしたから、開会式で使うブラカードは、英文と日本語で登録名を書いたものを用意していました。開会式当日は、テレビ神奈川の中継の解説をすることになっていた。早朝に市内の看板屋に行ってブラカードのでき具合を確認した後、市役所地下の床屋に行きました。半分ほど刈ったところで呼び出しがかり、「日本語を消せ」。そのまま飛び出してタクシーの中で考えて、日本語部分だけ、青い紙を張りました。戻ると今度は、「TTADを入れろ」。三たび看板屋へ駆けつけました。でき上がって会場に届いたのは開会式開始三十分前。ブラカードを持つ係の女子学生が非常にあせっていたのを覚えています。青い紙を張ったブラカードは、「テレビ映りがいい」ってかえってほめられましたよ。現物は萩村さんが、今でも持っているはずですよ。

美濃部擁立

簡単に「出る」と言われちゃ商売にならん

〔メモ〕 四十二年、隣の東京都では東竜太郎知事が引退することになり、二年前の都議選で第一党に躍進していた社会党は、知事ポストをとる好機を迎えた。しかし候補者選びは難航、最後まで名前のあがっていた太田薫前総評議長も二月十四日出馬辞退を正式表明した。全国革新市長会長だった飛鳥田氏は、候補者選びに巻き込まれた。

二月に入ってたよ。当時、候補は太田で決まったと思ってたんだ。だってもう選挙に間に合わないだろう。そしたらある朝、突然、小森（武）さんから市役所に電話がかかってきた。ちょっと来てくれて。ボクだって四月に自分の選挙がある。忙しかったけど何でも急な用らしいんで、すべての仕事をほっぽり投げて、約束した東京のホテルへ行っただ。行くと小森さんがしょんぼりしてる。「太田が駄目なんだよ。どうすればいいんだ」という話さ。もう昼ごろになっていた。

〔メモ〕 小森武氏は明治四十五年生まれ。社会党系の政策集団・東京都政調査会常務理事。革新陣営の選挙参謀として三十年代の二度の知事選を体験、この時も黒幕として奔走していた。

小さなロビーにテレビが一つかかっててね。それを見るときもなく見ながら、二人して「困った、困った」と話しているうちに、思わずパッと手を打ってね。「ああ、分かった」。出た名前が美濃部さん（美濃部亮吉

東京教育大教授Ⅱ当時)さ。もう告示まで一カ月ちょっとだろ。よその候補に対抗するには、やっぱしうんとテレビに出て、知名度のあるやつでないと駄目だ。その点、美濃部さんはNHKの「やさしい経済教室」に出てたからね。思い浮かんだのはテレビがかかったとおかげかね。行政手腕なんて全然分かんないけど、まあ革新思想の人さ。その場から二人別れてね。オレは渋谷の南平台の美濃部さんの家に、小森さんは鎌倉の親分(大内兵衛元法政大総長、美濃部氏の恩師)のところに飛んで行った。

美濃部さんは、庭いじりか何かしてたよ。オレが「太田が引ッ込んだっていうから、あんた出ないか」と言うのと、「出よう」って二つ返事だったよ。本当だよ。こっちの方があわてちゃって、「ちょっと待て」ってオレ、止めたんだ。そんなに簡単にしようと言われたんじゃね、商売にならない。ジャーナリストに取り囲まれた時には、飛鳥田から要請されたけども断ったと言いなさい。出ろって言われりゃあ断る、出ろって言われりゃあ断る。そういうふうにして新聞に始終載らないと、彼の宣伝にならないもん。断って断って断って、間際になってイエスと言いなさい——そう知恵を授けたんだ。

ところが十六日に東京駅の八重洲ホテルで正式要請があったあと、記者に質問されて、もう承諾寸前のことを言っちゃうんだよ。オレ、立ち会っていたからね。ヒヤヒヤしちゃった。

党の方はその前にね、美濃部さんの了解を取ったうえで、成田さん(成田知己書記長Ⅱ当時)をホテルオークラに呼び出したの。ジャーナリストがうるさいから朝七時にやろうって。小森さんも一緒。成田さん、「えーっ」って感じで、びっくりしてね。「本当に引き受けてくれるんだろうね」って念を押したよ。無理はない。オレだって意外だったもん。ただ小森さんてのは策士だからね。オレの知らないところで何かやってたことは、あり得るかもしれない。美濃部さんに会った晩にね、小森さんに「すぐウンと言ったよ」って電話報告したら、「そうだろう」って言ったもん。

むしろ口説く相手は大内夫妻さ。特に奥さんには参った。美濃部さんはその春が教育大の定年で、次の就職先も大内先生の世話で埼玉大学に内定してた。そんな問題もあったし、オレも鎌倉参りをしたよ。いつもなら奥さんがね、「お上がんなさい」と簡単に言うんだよ。それがいつまでたってたって言わないんだ。そのうち例によってあの小さな体に兵児帯を巻いた大内先生が出てきてね、「まあ上がれ、上がれ」。上がってからも、奥さんは「あの亮ちゃんが知事なんて柄じゃない」なんて言うから、オレ吹き出しちゃったの。亮ちゃんだって。あのはげ頭がね。まあ奥さんにしてみりゃあ、本当にかわいがってただね。

しかし大内先生だって、どうせ小森さんが口説きに行った時に、もうそういうことになると思ったんじゃないの。決まっちゃったたら大内さん、夢中だよ。美濃部さんを激励し、政党や市民団体の間に立つて助けてくれた。先生は候補者づくりがうまいんだよ。政治家なんだ。

動き始めちゃってからはオレはね、知らない。成田さんに任せて、こっちは北九州市長選の応援に行ったりしたからね。新聞見ると「美濃部氏断る」なんて出てんだよ。教えた通りさ。やってる、やってる、しめしめって思ったよ。

〔証言〕 高橋正雄氏(九州大名誉教授で、美濃部擁立にかかわった学者グループの一人) 佐賀県知事選の応援に出ていたボクのところ、いきなり小森さんから電話がありまして、「太田が駄目だから、おまえが出る」と言うんです。小森さんとは、人民戦線事件で上海に追われた時(昭和十三年)からのつきあいで、彼の指示には従うことを決めていましたが、こればかりはどうせ出馬しても落ちる、と断りました。その時、ボクは天の声と言っているんですが、何ていうことなしに、やはり親しかった美濃部を使えよと言ったんです。小森さんも賛成してくれました。僕は当時、東京と九州を行ったり来たりだったので細かいことは知りませんが、飛鳥田さんにもいろいろお願いしたんでしょう。美濃部は別に悩んだりしませんでしたよ。その辺が、彼が坊やと言われるところでしょう。

いろいろ考えてみたらミッテランがいたよ

「メモ」五十年にも、革新ゴッドファーザー飛鳥田氏の出番が来た。年明けから美濃部東京都知事の三選出馬問題で揺れたからだ。前年秋に表面化した同和対策をめぐる社共両党の対立は収拾のめどが立たず、共闘困難とみた美濃部氏は二月十六日、緊急記者会見で三選不出馬を表明。翻意に向けて政党、市民団体の動きが活発化した。

美濃部さんが自分の口で「出ません」って、えばって言っちゃったものをね、取り消させるにはどうしたらいいかと思って、考えてみたらミッテランがいた。ミッテランを呼んで来て口説かせるのさ。奇想天外な作戦だよ。自分でもそう思う。まあオレとしては、墓の下からマルクスでも引っ張り出したい気持ちだけど、そうもいかないからミッテランさ。党首で、しかもやがてはフランスの政権を担うのが確実なやつだからね。

日本じゃあ、美濃部さんより格が上って人は当時いない。少なくとも美濃部さんは、自分が最高だとうぬぼれてるからね。だから何か違うやつ、もっと偉いやつを連れてきて、方向を転換するよりほかに方法がない、というんで呼び出したの。

「メモ」ミッテラン氏は当時、フランス社会党第一書記。左翼統一戦線のエースとして前年五月に大統領選を戦い、ジ

スカールデスタン氏に惜敗した。連合政権構想が現実的課題に上っていた当時の日本にあつて、ミッテラン氏の経験は格好の手本だった。



来日したミッテラン・フランス社会党第一書記(左)を出迎える飛鳥田氏=50年3月3日、羽田空港で

美濃部さんは、ああ言っちゃったものの、腹の中じゃ後悔してんだもの。小森さんもそう言ってたよ。むしろ一時は小森さんの方が参っちゃってね。坊ちゃん知事のお守りは大変だし、共産党なんかからの批判もすごかったから。「もういいよ」って言うんで「それじゃあ困る。美濃部は世間的には親分なんだから、引っ込めるわけにはいかない。そこをちゃんとわきまえてくれなきゃ困る」って、やり返したんだ。

党や市民団体も説得に動いたり、歩み寄ったりしてたからね。要は、いかにして美濃部さんのメンツを立てて、翻意させるかってことさ。鳴海君は「自国の首都の知事の去就を、外国人の調整に任せるなんて」って、スジ論で反対したけど。その後、飛鳥田

さんは国際的だよ」とか言って、さんざ人をからかったよ。

しかし二つ返事で来てくれるとは思わなかったなあ。ミッテランもまた、都合が良かったんだ。しばらく休むってことをね、言った直後だったんで、すんなり決まった。

こっちの思惑はあらかじめ、よく言っていて聞かせたよ。美濃部さんには来日した次の日の三月四日に会った。どういう話をしたのか、細かくは知らないよ。ミッテランには、「ボクはついていけないから、君自身の判断で言え」ってことさ。とにかく彼が来て、美濃部さんに会うことが大事だったんだ。あとは何をしゃべろうが構わない。まあ、社共分裂はつまらねえことだから、フランスにおける統一の方法はどうかとかの話よ。オレにも、ともかく社共は一緒になって強くならなきゃ駄目だって、そう言ってた。

何だっいいんだよ。美濃部さんは出さえずれば勝つんだもん。結局、十日に再出馬表明ってことになって、この仕掛けは成功さ。ミッテランにしたっていい話なんだよ。東洋へ行って政治的な調整をとる、なんて向こうの新聞に出てね。大物ぶりをアピールするっていう目的を、ちゃんと果たしたんだ。

この時はミッテランへのお土産で一騒動あった。彼の坊ちゃんかね、アーチェリーやってんの。洋弓坊主さ。日本製のいいのを買ってやりたいて言うんだけど、こっちもそう金はないからね。で、テレビ局にかけあってミッテランの対談番組を作らせて、その出演料として金やアーチェリーをもらったんだ。それからこれとは別に、ポケットマネーで彼の奥さん、これがとてもいい人なんだけど、奥さんにも真珠をプレゼントした。黙ってりゃあいまいものをオレ、女房に話しちゃってさ。そしたら、人の女房に買ってやるのに、自分の女房にはなぜ買わんって怒られて、しょうがねえ、買ったよ。灰色がかった淡水真珠だね。二十五万円した。

ミッテランとはその後、委員長の時にくんかしたの。やつは大統領になって、オレは官邸へ行ったん

だ。そして「フランスは武器を中東へ売っている。不届きだ」って責めたら、向こうは「いや、君の気持ちはよく分かるが、フランスは失業が多くて困ってる。武器輸出でやっとその問題が片付いているんだ。いずれ君の言うようにするから、それまで我慢してくれ」と言う。そうはいかない。その間にだって、その武器でもって傷つく家庭がいっぱいあるじゃないか。撃たれたお母さんのそばで子供が泣いているような姿を、君もニュースで見ることがあるだろう。武器輸出は間違いだ——それでも、口きかんってことになっちゃった。以来、まあ国交断絶だね。

〔証言〕 海原峻氏（ミッテランに来日を要請した。国際地域研究所長） 当時、私はパリ第七大学の客員教授でした。突然、横浜から電話があって、こういう事情だからミッテランを連れて来てくれ、というんです。急いで知り合いのフランス社会党の長老を通じて連絡をとり、事務所を訪ねました。私が日本の左翼の現状や同問題をめぐる紛糾を説明すると、熱心に聞いてくれました。彼にしても、ここで日本とのパイプを作りたいという政治的な判断をしたのだろうと思います。美濃部三選もさることながら、将来の政権担当者の目を日本に向けさせた意義は大きいですよ。滞日中はずっとミッテランについて歩きました。彼はしたたかで強い人ですから、内政干渉になるようなことは一切言いませんでした。口説く前に飛鳥田さんから、「断られたら腹を切るといって脅せ」と言われたのを今でも覚えてますよ。

市民が背景にいるのを忘れちゃ駄目だ

〔メモ〕 飛鳥田市政と前後して、神奈川県内でも革新首長が統々誕生した。長野正義（三十二年、横須賀）正木千冬（四十五年、鎌倉）伊藤三郎（四十六年、川崎）葉山峻（四十七年、藤沢）——そして五十年統一地方選で、全野党共闘にのる長洲一二前横浜国大教授が知事に当選した。

長洲さんを知事に、という話は、前の年の早いうちから進んでいた。美濃部さんの初出馬の時、告示直前に太田に断られたみたいの後手をとったつまらないからね。今度は先手を打ってね、オレがまっしぐらに狙っちゃおうと、八月になって「かをり」（県庁近くのフランス料理店）に呼び出したの。鳴海君がそれまでに、機会を見ては冗談めかして話をしてくれていた。始終、講演を依頼したりしている仲だからね。長洲さん、気軽に出てきたんだよ。個室で一對一さ。オレはいきなり「頼みます」って頭を下げてね。彼、キョトンとしてたよ。政治情勢を説いてね、オレ一人で一時間ぐらいいしゃべったよ。長洲さん、ウンウン聞いてるだけだった。

そして二度目に鎌倉の家に行った。八月二十六日。これが、わりと知られている話さ。奥さんが反対でね。決して歓迎はされなかったけど、四、五時間頑張ったよ。夕方になって奥さんがすしをとってくれて

ね。「これが間違いのもと」って今じゃ言ってるんだってね。この日はもう、出るって感触だったよ。頭のいいとこと、もうひとつは度胸がいいことにはれたんだ。横浜国大の紛争収拾や移転を立派にやりとげたからね。愛さようもい。サッと手を広げて市民にこたえるだろう。あれには驚いたよ。

オレが前面に出過ぎると、まとまるものもまとまらないんで、学者たちが推すって形をつくった。ただ、親分たちの了解は得ておかなければいけないんで、大内さんを訪ねたよ。大内さんとはとても面白いんだ。行ったら、「ああ、もう君が来るころだと思ってた。まあ待ちたまえ」って、長洲さんにすぐ電話をかけてくれてね。「もう君、あきらめたまえ」——スパッとね。すべてがあんまりうまくいくんでね、こりやどっかで破綻が出やしないかと心配するぐらいだった。

ボクも四期目の選挙だったけど、ボクの宣伝カーは「長洲、長洲、長洲」って十回ぐらい言って、一丁ぐらい先に行って「飛鳥田」。そんなことをやって当選するんですかって心配する連中もいたけど、大丈夫、大丈夫。むしろ長洲ブームに乗ったんだ。ただ、学者には限界があつてね。わが身を捨てて政治をやることはないよ。それは美濃部さんでもよく分かった。だから学者をかつぐのは、これが最後だと思つたよ。オレなんかもう、やり出したらね、飛び込んでって最後までやるけど、長洲さんは物事をきれいにやるというか、そういう抵抗を避けてるね。

伊藤君はね、ボクがいままで手掛けたっていうとおかしいけど、革新市長の中で一番てこずったの。慎重居士だからね、彼は。なかなかウンと言わない。中島英夫（神奈川県二区選出代議士（当時））に言われて会ってね、なかなか落ち着いた人物なんで、こいつはいいってんで呼び出しては口説き、呼び出しては口説きね、その数知れずだよ。川崎は学者の通用する町じゃない。伊藤君は組合のボス（川崎市労連委員長）で、長年その道で苦勞してきた。頭の下げっぷりもいいし、ボクは伊藤君一点張りだった。

あと県内でオレが狙ったのはね、厚木とか相模原とかね、あの辺だよ。革新を強くしようと一生懸命やっただけど、何にもねえとこでやるんだからね、しくじっちゃった。

革新ゴッドファーザーなんて言われて、面はゆいし、はなはだ迷惑だね。革新自治体が誕生すれば、あとは口出ししない。自分でやるにこしたことはないからね。ただ相談にはのったよ。長洲さんも、伊藤君もそうだ。藤沢はいろんなことあるたびに、峻ちゃん（葉山峻市長）がオレんとこへ飛んできたよ。

しかし地方自治はいま、本当に暗いよ。敗れに敗れて引っ込んでくたろう。この辺までなら譲りましよう、この辺までなら何とかなるって、引っ込めることばっかり考えている。バーンと出ていってけんかして、駄目ならよしちやうくらしいの腹を持たなきゃ。われ一人といえども戦わんという根性を持たない限り駄目だよ。こっちは一人じゃないんだからね。横浜市でいえば三百万人の人間が後ろに控えているんだ。政府だってね、それを無視できないよ。首長っていうのは、その土地の権力を握ってんだもの。市民を背景にして、その権力を突っ張れるんだ。市民が背景にあるということを忘れちゃ駄目だ。

〔証言〕 長洲一二氏 めしでも食おうかという電話をもらって、「かをり」の部屋に入ると飛鳥田さん一人しかない。ありやうやと思っていると「実はね、先生——あとは一時間話しっ放しです。ボクが「そんな」と言いかけると、「いや、返事はいらないよ」。そのまま送り帰されました。お土産にパンを持たされてね。ゴッドファーザーというのは、うちの女房から最初に聞いたような印象があります。なるほど、うまいこというな、と思ったのを覚えてますから。飛鳥田さんは立派な地方政治をやったと思います。が、まねをするつもりはありませんでした。私は私なりで長洲流でやる。飛鳥田さんも、自分の流儀をボクに講釈したことはありません。北海道の横路君が知事に当選した時、いろいろ教えて欲しいと言っていました。が、なあと、横路流でやりなさいとお答えしました。

革新市長会

もう大丈夫だってうぬぼれがあった

革新市長同士で集まろうって言い出したのは、仙台の島野さん（島野武市長）当時なんだ。ボクが初当選した三十八年の九月にね、横浜までお祝いに来てくれた。一緒にめし食ってたら、革新市長ってのはいかに大変かって話になってね、ボクにまとめ役になってくれって言うわけさ。当時はまだ、革新市長っていったって、日も浅いし、人数も少ない。みんな孤立してたんだ。

とりあえず、まず一杯飲む会をやるうってことになってね。次の年の春に、全国から二十人ぐらい箱根に集まったんだ。まだ、革新市長会なんてしっかりした組織を作ろうって考えはなかった。皆がそれぞれ、悩みを言い合うってことで、あとで「ぼやきの会」だなんて言われたよ。

抱えてる問題は大体、似かよったもんでね。財政が苦しくて、自由に使える金がないとか、議会でいじめられるとかね。それからもう一つの悩みは社会党よ。当時、インフレがひどくてね。どこでも、水道とかバスとかの公共料金の値上げをしなくちゃならなかった。ところが社会党は、公共料金の値上げには一切反対だからね。しないで済む方法を考えろって言うんだ。だけどそんなことできやしない。議会に提案したって与党が反対するんだから、野党だって賛成するわけがない。随分泣かされた。オレだって、市

長になって半年ばかりで、水道料金値上げをしようとしたら、社会党の議員から裏切り者呼ばわりされたよ。当時の社会党は地方の首長なんて重視してないからね。革新市長会にしたって、党の外郭団体だ、くらしいにしか思っていない。だから言うこと聞けっていうわけさ。

ボクは代議士の経験あるし、党の中執もやってたからね。みんなから、党本部に言ってくれて期待されるわけよ。ところが、本部も本部でね。オレを通して、革新市長たちに値上げしないように指導しようって腹でね。党本部のオルグが各都市に行くだろ。その前に必ずオレのところに来たよ。まずオレを説得するためさ。

〔メモ〕 全国革新市長会の正式結成は三十九年十一月、二十八市長に案内状が出され、そのうち二十二人が参加した。正式結成前に何度か集まったけど、東京都政調査会主催の会合もあった。九大教授の高橋正雄さんが、都政調査会の理事長だったからね。高橋さんを表に出してやれば、市議会とのあつきもないだろうってことだった。

結成はしたけどね、別に綱領なんてものはない。総会でオレが基調報告して、それをみんなが認めるって形だった。そもそも「革新」の定義だって、はっきりとしたコンセンサスはなかったからね。「ぼやきの会」の時はみんな社会党公認だったけど、そのうちいろいろなのが入ってきた。ボクは社会党でなければ困る、社会主義を信奉する人間でなきゃ駄目だと思っただけで、事実上は、反自民であればいいっていう鳴海君の説で運営された。まあ、厳密にする必要はなかったんだ。反自民のやつを助けることに夢中だったからね。

初めのうちは仲良しグループだったのが、だんだん政治的な団体が変わっていくんだ。四十二年に美濃部さんが当選したあたりからだな。この年の七月に、五十人の市長名でね、ベトナム戦争反対の声明を出

した。これが最初の政治的行動だったな。

次が超過負担の問題。保育所や学校なんて施設を市で作っても、国は法律で決められただけの補助金を出さないんだ。四十八年には摂津市の井上君(井上一成市長当時)が国を相手取って訴訟を起こすっていうね。革新市長会で全面支援さ。首相に要望したり、数寄屋橋でビラまいたりした。そうしたら「自治大臣が検討する」っていうから、市長五十人で自治省に乗り込んだんだ。各市の職員や全国の市民団体の主婦なんかが三、四百人も一緒にね。大臣室前の廊下に座り込んでいっぱいになったな。大臣に会わせろっていうのに、次官しか出てこない。会えるまで、五、六時間も大臣室にいたよ。警備員とか警察官だかが来たけど、排除できない。地方自治体の長が自治省に来るのは当たり前だろ。もし排除すれば公務執行妨害だって言ってるね。結局、夕方になって大臣も出てきて、「極力努力する」って約束させたんだ。美濃部さんも途中で応援に来てくれたな。

〔証言〕 五十嵐広三氏(旭川市長として全国革新市長会の発足に参加した。社会党衆院議員) 箱根に集まったのは、前の年の三十八年の選挙でなりたての市長がほとんどでした。話は、少数与党だから議会でいじめられるし、職員も協力してくれず孤立化してしまうといった苦勞話に集中しました。熊本の八代市長だった松岡明さんが、応援団長みたいなものすごいひげを生やしていたんですが、この人が、大きな涙をそのひげの上にハラハラこぼしながら、議会でいかにやつつけられたかを話していたのが、強烈な印象として残っています。そうしたら、他の市長も「いやいやオレの方はもっとひどい」という話になって、なるほどみんな苦勞を乗り越えて頑張っているんだと分かりました。孤立しないで組織化しようとして随分主張しました。帰る時は、よしオレも頑張るぞ、という気持ちで別れました。

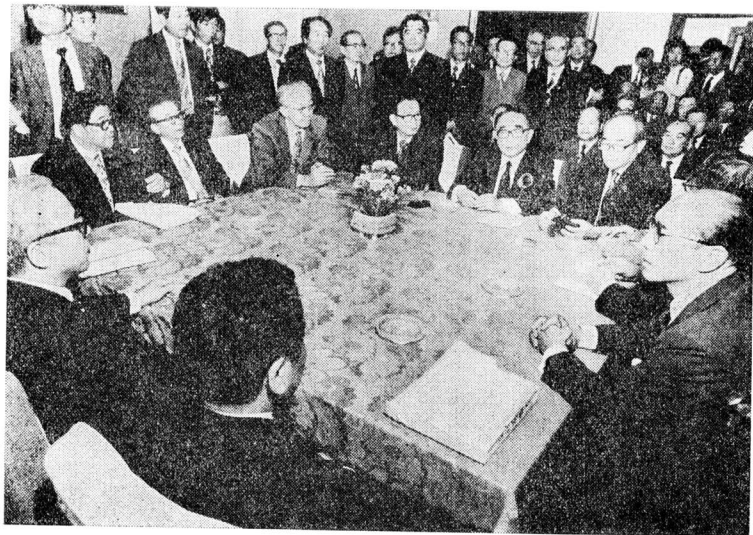
〔メモ〕 三十九年に二十二市でスタートした全国革新市長会は、年を追って大きくなり、四十九年に百三十六市にまでなった。活動内容も、自衛隊員募集業務拒否や朝鮮籍書き換えの受け入れといった政治色の強いものでなく、

四十六、七年ごろから、革新市長会は社会党だけでなく、幅広く革新系市長の集団としてやっていくことになって、どんどん数が増えていった。ところが、それで問題が出てきたんだ。いろんな政治基盤を持った人たちをゆるやかに抱えていくんでね。選挙の時に労働組合や公明党なんかの支持をとりつけたために、一時的に革新市長会に籍を置くなんてやつが出てきた。選挙になると会長名で推薦状を出してただけど、これを欲しいって人が続出した。実際には、名前だけで会合にも出てこない人が、選挙となると「革新」を名乗るんでね。労働組合なんかから、あんなのがなんで革新なんだって抗議が相次いだ。

それじゃまずいっていうんで、拡大幹事会を開いてね。五十年からは革新政党的の推薦を取りつけることと、「反自民、反独占」の立場に立つことを条件にしたんだ。「反自民、反独占」はボクが言ったんだけど、鳴海君は、そりゃ社会党の原則だって、ものすごく抵抗したよ。だけどね、後藤さん(後藤喜八郎武蔵野市長当時)や峻ちゃん(葉山峻藤沢市長)が賛成してくれてね、押し切っちゃった。

選挙では随分助け合ったよ。革新市長が大挙して、応援演説に行くんだよ。十人、二十人って集まるからね。演説するだけじゃなく、市内を旗持ってパレードしたりもするんだ。目立ってね。「飛鳥田一座の巡業」なんて言われたよ。ひと月のうち十日も市役所を空ける時もあった、議員連中は「なんだ、市長どうしてんだ」なんて文句言ってた。またオレんとこの秘書課は平気で、どこそこへ出張ですって教えちゃう。でも留守は田村さんや鳴海君が守ってくれるから心配いらない。電話一本で連絡はつくし、ツッっていや、カーっていう行政やってるから平ちゃらよ。

選挙応援はね、地元の市民や役人に自信をつけさせるって効果もあったんだ。革新はうちだけじゃない。ああ、横浜や仙台もそうなんだって、分かるだろ。それに藤沢なんかでやってるとね、田舎出身の人が結



「超過負担解消」を要求する飛鳥田全国革新市長会会長(○印)ら革新市長たち。手前左端は鎌田自治事務次官=49年10月8日、自治省で

構いるだろ。その人たちが、生まれ故郷の市長が方言でしゃべってるのを聞いたりすると、なつかしくなって聴き入っちゃったりする。

それと世論調査ね。市役所の都市科学研究室に中央大学の横山さん(横山桂次教授)の弟子だった男がいてね。市に入る前から調査をやってもらってたんだ。社会党の調査もやってね、結構知れ渡ってた。それで、全国のいろんな革新市長がね、選挙が近づくとやってくられて頼んでくるんだ。接戦だから必死なわけよ。

横山研究室の政治意識調査っていうことでやって、あとでそのデータをもとにして、選挙戦でどうしたらいいか、処方せんを書いてやるわけだ。各地区ごとにどんな要望が多いかを調べてね。ここじゃゴミ問題、ここじゃ水産振興って具合に演説の内容まで変えたんだ。

あと、湯水で困ってた高松の脇さん(脇信男市長)のところに市の給水車を送ったり、夕張の炭鉱労働者を助けようっていうんで、各市が労金

に預けてる金を北海道労金に集めてね、労働者が借りられるようにしたり、いろいろやったよ。

〔メモ〕全国革新市長会の加盟数は四十九年のピークから二、三年の間、高原状態が続いたが、飛鳥田氏が社会党委員長に就任して会長を退いてからは、年を追って減っていった。六十一年末時点での加盟は六十市。

その点はね、失敗したと思ってる。もうボクが抜けても大丈夫だといううぬぼれがあった。うぬぼれがね。ピークの時には、国を押し込める、と思ったくらいだからね。だけどまだ、革新市長会はスケッチの段階だったんだ。完成品にしていく必要があった。それに、敵の攻撃も強かった。オレは抵抗できる、と思ったんだけどね。

それにね、保守と革新じゃあ、同じ首長でも困難さが違う。自民党は今の保守の体制を受け継げばいいんだからね。流れにのってスーっていけばいい。だけど社会党は常に流れに抗してなきゃいけないからね。苦しいから、途中で政策転換してっちゃう人も出てくる。その違いだろう。

〔証言〕後藤喜八郎氏（全国革新市長会の結成時からのメンバーで、会の幹事長も務めた。地方自治センター理事） 知事を含めれば一時、日本の全人口の四割までが革新の首長のもとにおさまっていました。それが後退してしまったのは、保守側が革新対策に本腰を入れてきたためです。時代は低成長に入り、保守側は一銭を惜しむ政治をしましようということで、革新自治体に人件費攻撃をかけてきました。われわれが言ってきた地域民主主義、市民参加のやり方までとり入れて、巻き返してきました。これに対し、革新側はきちっとした対策を立てきれなかったわけです。飛鳥田さんというと、戦車闘争など社会党的政治戦略だけが目立っているようですが、福祉や公害など個別、地域の課題も着実にやっていました。これは革新市長会についても言えることで、政治闘争だけでなく、超過負担の解消、シビル・ミニマムの策定など、地道な政策活動もかなりやりました。

建国論争

反対の声明出したら日の丸デモが来たよ

〔メモ〕四十二年二月十日、初の「建国記念の日」を翌日に控え、飛鳥田市長は「建国記念の日に反対する」という声明を発表した。主な内容は①二月十一日を建国記念の日とすることは歴史的事実として正しくない②神話としてすら成立していない③紀元節は明治政府が天皇神格化の手段として採用したもので、新憲法下では憲法違反のおそれがある④国民の記念日は国民の大部分が承認するものでなければならない——の四点だった。

声明を出す直接のきっかけは、十一日に西区の掃部山公園で開かれる奉祝大会の案内状が来たことなんだ。それに来賓として、知事や県会議長なんかと並んで「横浜市長」って印刷してあるんだよ。向こうにしてみりゃ市長が出席したっておかしくないって思ったんだろ。しかし、出席依頼なんてないしね。勝手に書いてんだ。失礼だよ。それに、オレが出るわけないってことは分かってもよさそうなのにね。向こうも軽率だったんだ。腹立ったし、誤解を招く恐れもあったから、はっきりさせておこうと思って声明出したんだ。声明はボク個人として出したんだけど、市役所としてもね、この日は曜日みたいになんて単なる休日扱いにして、役所の建物に日の丸は揚げない。市電、市バスにも小旗はつけないってことにしたんだ。交通が赤字だから経費節減って理由をこじつけてね。そしたら、すぐに自民党が反発してきた。

知事の内山（岩太郎）さんもね、「日の丸を禁止したのは、横浜市民のためにはもちろん、県民のためにも迷惑至極だ」って声明出したんだ。ボクは「建国記念の日」には反対って言ったけど、日の丸を禁止したおぼえはないからね。「真実も確かめずに非難するのは無礼だ」って反論したよ。内山はね、県費で紅

白のおまんじゅうを配ろうって言ってたくらいだからね。子供の時分、紀元節に学校でもらってうれしかったなんて話をオレにするんだ。だからオレ、おやじさんそりゃ駄目だ、よした方がいいよって言った。

二月議会の初日には、市役所に日の丸デモがおしかけてきた。みんな、日の丸の小旗持ってね。市役所一階の市民広間がいっぱいだった。「アスカタは北京市長になれ」なんてプラカードもあった。でも、驚かなかったよ。自民党市連の動員で、おじいさん、おばあさんばかり。そんなに憤慨してとは思えないもん。津村さん（津村峰男市議当時）と横山健ちゃん（横山健一市議）が、抗議文を持ってきたけど、断じて駄目だって言った。こういう場合にはね、やるような、やらないような返事したらもう駄目だよ。全然駄目です、とはっきり言った。それにね、デモが帰ったあと、紙の小旗がちぎれて、床に散乱してるんだ。その上にゲタで踏んだ跡がついてんだよ。それ見てね、こんなばかな話があるか、日の丸を粗末してるのはやつらの方じゃないかって、盛んに言ったよ。

その日の議会ではね、自民党の市議団長やってた加瀬忠次って議員が質問でこの問題をやってきた。

「声明は軽率だ、国旗を揚げないのもけしからん」と言うわけだ。ばかなことを言ってるやがると思ったね。ボクは声明の中で、論拠をはっきり示しているからね。答弁でも「縄文時代に国があったのごときことを言ったのでは、子供に科学性を言うことはできない」なんて、改めて言った。気分良かったよ。やじ一つなかったしね。一時間近くやったんだけど、議長が途中から、簡単に簡単になってメモを回してくんの。仕方ないから、はしょっちゃった。いやもう、神代から今日に至るまでの歴史をだーっと述べようと思って

て、準備してたの。そうすりゃ四、五時間かかるからね。紀元節は明治に入ってからできた制度だった、もっと詳しく言いたかったんだ。一番いい事はね、当時、皇族の三笠宮（崇仁殿下）が自ら、紀元節には科学的根拠がないから復活には反対だって言ってんだよ。そういう本も出してた。ボクが答弁で言ったようなことが書いてある。実は、これが主たるタネ本さ。

一応、日の丸の方は国の象徴として尊重します、「市の行事では掲揚するよう努力せられたい」っていう半井時代の助役通達も守りますって言ってたけど。本心じゃ、あんなもん揚げたくねえよ。そもそもの丸ってのは室町時代から侵略の旗印に使われただろ。それにボクの弟はフィリピンで死んだんだ。陸軍に二等兵で召集されてそのまま帰ってこなかった。田舎へ行くと「陸軍上等兵飛鳥田栄一」って墓があるよ。

敗戦直後はマッカーサーが日の丸を禁止しただろ。あの当時はボクらは日の丸と君が代は廃止になるものとはかり思ってた。だから、新しい国歌と国旗は、国民から募集して、投票して決めればいいと思ってた。

〔証言〕 横山健一氏 半井市政のころは、市庁舎には毎日、日の丸が揚がっていましたし、祝日には市電、市バスに小旗がつけられました。飛鳥田さんは市長になると、すぐにどれもやめました。それ以来、自民党市連では「日の丸掲揚」を年中、念仏のように唱えていました。この年には、「建国記念の日」が決まったのに、反対だ、と声明を出し、日の丸掲揚をなおもやらないと言ったので、市連として示威行動を起こそうということになりました。加瀬さんの質問ももちろんその一環です。デモに参加したのは市連の婦人部と青年部が中心でした。私は市連幹事長でしたので、代表で市長に会いました。「オリンピックで日の丸が揚がるのを見ても感激しないのか」なんて言ったのを覚えています。市長選挙が目前で、今度こそ勝ってやろうと思っていたころですから、その辺の配慮もあったと思います。

なおざりにされてるのを大切にしよう

「メモ」 新市長となった飛鳥田氏が施政方針を明らかにしたのは、当選から五ヵ月たった三十八年の九月。「だれでも住みたくなる都市づくり」と並んで、「子供を大切に市政」を打ち出した。

はなっから、子供を大切にしたいって気持ちがあったんだ。オレ、子供大好きだからね。ところが、当時の状況は、あまりにも子供がなおざりにされていた。ボクらの時分には、本当に自由奔放だった。どこに行っても遊べたからね。でも、その後、都市化がどんどん進んじやって、遊び場がなくなった。それなのに子供のための施設は全然ないんだよ。こいつを何とかしようと思った。

市政のスローガンを何にしようかってブレインたちと話し合ってた。都市化のひずみから社会的弱者を守ることを打ち出そうということになった。そして、弱者を代表するものとして子供を選んだんだ。「老人や女性ははっとくのか、なんて誤解が出るかもしれない」と心配する人もいたけど、そういう意見が出てもいいじゃないかって言ったんだ。意見が出ることで、市民の目が弱者に向き始めることだからね。

「メモ」 翌年四月、民生局に青少年部を新設し、矢継ぎ早に子供向けの政策を打ち出した。固定資産税を全額免除して空き地を地元で貸し出させ、子供の遊び場にする「ちびっこ広場」をはじめ、「ちびっこ道路」「ちびっこプール」な

どの一連の「ちびっこ」シリーズが代表的な例だ。

ちびっこ広場はね、母親の目の届く範囲に造るっていうのがミソなんだよ。これは、外国の文献を参考にしたんだ。ロンドンの都市計画案や、スウェーデンの公園について書いた本を何冊も読んだよ。それに「子供は、大きな道路を横切らずに遊び場に行けるようにしろ」と書いてあった。オレも、その通りだなんて思ったの。大きくて立派な公園が遠くにあるより、小さな遊び場が近くにある方がずっといいよ。「遊び場は子供のサイズに合わせて小さくするべきだ」とか「砂は幼児にとって申し分のない遊びの素材で、尽きない喜びを与える」ってことも書いてあってね。とても参考になった。

土地を貸してくれたら税金を免除してやるというのは、ボクのアイデア。いちいち買ってたんじゃあ、金がいくらあっても足りないからね。要するに、金をかけずに喜ばれることをするというのがオレの一貫したものだ。そして、その分をでっかいプロジェクトにつぎ込む。

ほかの都市にもすぐ広まった。革新市長会で「こんなことやってる」って話すだろ。みんなすぐまねするんだ。で、地方の革新都市にちびっこ広場ができる。すると今度は隣の保守の市長までがね、同じ物を作るんだ。方々で「ちびっこ広場」を見かけたよ。中には全然趣旨を理解せずにまねするやつもいてね。ボクはもともと、宅地化が進んで遊べる場所がなくなっただけで窮余の策として広場づくりを始めた。ところが関西のある都市に行ったらね、野っ原の真ん中に「子供を大切に広場」って看板が立ってたんだよ。これには苦笑いしちゃったよ。

市民のアイデアから生まれたのが「おぎゃあ植樹」よ。市長への手紙に「子供が生まれたらその名前をつけた苗木を植え、一緒に生長を見守りたい。緑化にもなる」というのがあって、すぐ実行したんだ。親に千円出してもらい、市も千円の補助金を出して苗木を買って公園に植えるの。ところが、公明党が名札

をつけるのに反対してね。「植樹したくても金がなくてできない家庭もある。子供が差別されてしまう」って言うんだ。で、番号を書いた札をぶら下げることにした。ボクは名前がいいと思ったんだけどね。千円くらい出せないわけないだろう。本当に困ってる家庭には、生活保護なり何なりで補ってやればいいんでね。でも盛んに文句言うから「ああ、そういう人もいるかなあ」ってかわいそうに思っただ。子供が成長してね、デートの約束なんかする時、「ボクの木の下で待ってる」なんてのも悪くない。

野毛山動物園を三十九年に無料化したんだけどね。これなんかボク自身としては大きな政策だったと思ってるよ。市の役人はみんな目をむいて反対した。でも、大人四十円、小人二十円の入場料ね。たったこれくらいの収入とったって仕方ないんだよ。「そんなことしたら、くせになっちゃいますよ」っていう役人もいた。でもボクは、なるべくくせにしようって言ったんだ。市民、子供へのサービスだからね。

十五年間振り返ってね、子供へのサービス行政は随分できたように思うよ。何よりも、子供を大切にする観念っていうか、姿勢がね、市の内部に行きわたったのが大きいよね。それまでそんな考えは全くなかったんだから。子供へのサービスはボク好きだから、苦勞だと感じることもなんかほとんどなかったな。

〔証言〕 安田逸男氏(ちびっこ広場第一号を提供した。横浜市ひかりが丘保育園長) 当時、父が死んで土地を相続したんですが、相続税がかなり高くて困ってたんです。そこへ、町内会長さんが「畑を荒らししても仕方ないから、ちびっこ広場にしないか」と話を持って来られましたね。公共用地ということになると税務署の土地評価の見積もりが安くなり、税金も少なくてすむんで、提供することにしました。市が鉄棒やシーソー、ブランコなどを用意してくれ、毎日子供がたくさん遊んでましてね。提供して良かったなあと感じました。ただ五、六年もたつと「清掃や修理は地主がやるべきだ」なんて言う人が出てきたんで、近くに青少年広場ができたのを機に十一年目で返してもらいました。今は駐車場にしていますが、町内には他のちびっこ広場がまだあり、飛鳥田市長の精神は今も生きています。

交通局再建

全廃も配転もボクと横交だからできたよ

〔メモ〕 市長に初当選した飛鳥田氏を待っていたのは、累積三十億円という交通会計の赤字だった。全国の公営企業共通の悩みとはいえ、四十年代末にはこれが七十億円にも膨れ上がり、自治省から「最重症患者」と診断された。

ボクも選挙公約だった「三つの手紙」の中で交通問題を取り上げたけど、路面電車の廃止までは触れなかった。街の風物だったし、ボク自身、チンチン電車で中学に通ったりして愛着があったからね。でも研究してみても、これは取っ払うよりないことが分かっていた。横浜の地形は、広げた五本の指を海に突っ込んだような形でしょ。丘と谷が交互にあって、線路はそれぞれの谷の中だけを走っている。横の連絡がないんだよ。だから線路を敷き直して丘を突っ切る路線をつくる以外に方法がないんだけど、今さらそんなこと無理だしね。つながりがないんだから、交通体系としては駄目。時代遅れ。これが基本にあるんだ。

横交は初めは反対したよ。やっぱり自分たちの権益を守る、ということさ。ボクの選挙母体だったから、「飛鳥田はオレたちが市長にしてやったのに、なんだ」なんていう声もあった。でも、これをまとめてくれたのが委員長(厚)君。彼はバスの出身で、市電の交通体系が古いつことをよく知ってるし、何より人望があつて横交を完全に押さえてた。再建のルールを敷いてくれた直後に、がんで死んじゃ

ってね。何遍も見舞いに行つたよ。ボクも横交のあらゆる会合に出ていって説明したけど、宮原君なくしてこの問題は片付かなかったらうね。

知恵も絞つたよ。四十一年に運賃を値上げした時に、生活保護世帯や身障者に無料パスを発行したんだ。弱者救済の横浜方式っていわれたけど、頭にあったのはむしろ交通局の赤字減らしさ。パス代は一般会計の民生費から出て、そっくりそのまま交通会計繰り入れになるの。一人が月に何回乗るから、パス何万枚でいくらって計算するんだけど、その利用回数もかなり多めに見積もってね。失業中の人にまで出した。

〔メモ〕四十一年十一月、自治省は地方公営企業法に基づき横浜市交通局の財政再建計画を承認した。六月の同法改正後の承認第一号で、市電の全廃、再建債の発行などを柱としていた。

財政再建団体になると国が介入してくる心配があったけど、「毒まんじゅうかもしれないが、生き延びるためには食わねばならん」って割り切つたよ。当時の自治省の財政局長が細郷さん（細郷道一現市長）。市の立場に立って、大蔵省との交渉なんかで骨を折ってくれた。

交通局の職員を、ほとんど市長部局や水道局なんかに移していったのも忘れられないね。七年間に八百五十人くらい動かしした。しかもただ配転するんじゃないで、納得すくでね。そりゃ矛盾も出るさ。交通局としては高給取りを出して身軽になりたい。受け入れる側は、それじゃ金がかかって困るという。おまけに、それまで交通のことしかやったことのないのが来るんだから、仕事はできないよ。それこそいい年してお茶くみだ。それが、高給取りときちやあ気分いいわけないさ。移った本人もつらいから、朝なんかも人より早く来て黙って机のぞうきんがけをしたりしてるとんだ。気の毒でね。ボクも随分、職場まわって激励したよ。中には逆に喜んだやつもいた。動物園の勤務になってね。そしたら、オレは電車より動物の方が好きなんだ、望みがなかった、なんてね。こんなことができたのも、ボクと横交の関係だからさ。組

合もよく言うことを聞いてくれたし、ボクも財政当局を説得した。人が減ることで選挙への影響を心配するのめいたけど、それはなかったね。かえって横交の活動家が入ることで、市従（横浜市従業員労組）が共産党寄りから、こっち（社会党）の方に伸びてきてね。そんなおまけもあった。

市電全廃をのませる条件が地下鉄を敷くことだったから、この事業免許を取ることでもかけずりまわつたよ。鉄道事業を認める法律はふたつあって、どっちで申請してもいいんだけど、担当する官庁が運輸省と建設省で違つていうややこしさでね。両方が両方とも、オレの方で免許を取って勢力争いをするんだ。相手の方に申請を出すと、あとで嫌がらせが待ってる。こっちは地下鉄ができさえすればいいんだから、適当に調整してくれて言ってもらわなくてね。とうとう国会に乗り込んで、藤山愛一郎さんに運輸と建設の大臣を呼んでもらって、トップ会談で運輸からとることを決めたよ。ばかばかしい話さ。簡単に比べちゃまずいけど、国鉄再建のやり方なんて横暴だよ。ちゃんとした雇用の場を確保しないで、人活センターのようなひどいところに労働者を追いやって。腹が立つよ。

〔証言〕川村政雄氏（四十年四月から四年余、交通局長を務めた。横浜市シルバー人材センター理事長）

以前は有力ポストだった交通局長も、当時はなり手がない有り様でした。泥まみれになるのはだれだっていやですからね。私も助役に随分、説得されて引き受けた口です。交通一家といわれるくらい結束力の強いプロ集団の中に、一度も交通畑を歩いたことのない私が行くんですから、飛鳥田さんではありませんが、それこそ「落下傘で飛び降りる」気持ちでした。しかし組合もよく理解して助けてくれたので、悪名とどろいた横浜も優等生と目されるまでになったわけです。むしろ独立採算の原則を押しつける一方で、交通局資産の処分や一時借入金限度額引き上げに抵抗する、市議会の冷たい態度に泣かされましたね。地下鉄の事業免許の一件も忘れられません。かつて国会で鳴らした市長の力でなんとか収まりましたが、あの縄張り争いには、役所勤めの長い私も本当に面食らいましたよ。

こういう話ならね、損得でいかなきゃ

革新市長の政策を見ると、みんな、「市民を守る」ということで福祉にはかり熱を入れるんだよ。ボクは、それは違うと始終言ってたんだ。革新市長というのは、福祉もやるし都市の再建もやる。都市の再建をやらなくて、何で市民を守ったことになるんだと、よく言ってたんですよ。ただし、それまでの市政がやってきた再建とは違う再建でなければならない。新しい視点に立つことが必要だ。それでボクは六大事業に取りかかったの。革新市長の中で、ボクくらい勇敢に都市の再建をやったやつはいないよ。

〔メモ〕 戦略的な視点から特定の基幹事業を選び出し、重点的に遂行していこうというこの六大プロジェクトは、四十年一月に、市長から市民への提案という形で発表された。

首脳部会議なんかで、こんな事業をやったらい、みたいな議論はした。だから発案者はおのおの違うんだよ。でもそれらを体系的にまとめて都市づくりの指針にしてくれたのが、浅田(孝)さんの環境開発センターさ。市民に分かりやすいようにイラストで説明するPR版も作った。今じゃ当たり前だけど、当時としては画期的だったね。しかし、達成までに二十年か、あるいはもっとかかる大事業だろう。市会でも「こんな大ぶろしき広げて、出来っこない」って話が強かったよ。社会党も心配してくれた。市財政に余

裕はないってね。そりゃそうさ。ボク、市の金を使うつもりはないもん。市の指導のもと、公団や民間の金を使ってやる。いわば他人のふんどしで相撲をとることに、六大事業の大きな特徴があるんだから。

〔メモ〕 中でも、都心部強化と金沢地先埋め立ては表裏一体の関係にあった。都心部強化とは、荒廃した関内地区を再生させ、戦後発展した横浜駅周辺と併せて新たな都心を形成しようという事業。そのためには、両地区の間に横たわる三菱重工横浜造船所(西区緑町)の移転と、跡地の再開発が必須の課題だった。横浜市は移転先として金沢埋め立て地を提示した。

四十二年の暮れ、三菱の本社に乗り込んで河野さん(河野文彦社長)に会った。こういう話は保守とか革新とかいう問題とは別でね、損得でいかなきゃ駄目なんだ。

「あんなところで一体何ができますか。狭すぎるじゃないですか。工場に工場を継ぎはぎしてやってるけど、そんな工場、ボクなら造りませんね。この程度の先が読めないなんて、実業人としてみっともない話じゃないですか」ってね、かなりはつきり言ってたんだ。向こうだって、そんなこと分かっている話さ。だから基本的な合意は、それからすぐのうちにできたよ。

ところが三菱にも都合や、全体の景気の模様があるだろう。それからが苦労したよ。本牧の埋め立て地なんか、市がもっと売ってやるよって言うのを最初は断っておきながら、後になって突然、「もっと譲ってくれ」。もう中小企業用に売りましたから無理ですって答えても、なかなかあきらめないで弱ったよ。

あと、金沢の用地もね、一〇〇万トンタンカー時代だから五十万坪は欲しいって言ってみたり、造船不況だからもういらぬって言ってみたり。まあ、こっちの採算に合う坪数をとってくれりやそれでもいいんだけど、こうも揺れたんじゃあね。ただボクはそんなにやきもきしなかったよ。というのは、相手は三菱だろう。約束した以上、移るのは間違いないんだから。でも担当した田村さんたちは大変だった。

途中、三菱がいまある土地の一部を埋め立てて作業場を造りたいって言うてきたことがある。それまでならすんなり通ったろうけど、田村さんが駄目だって言うてね。埋め立ては市がやって、移転まで三菱に貸すことにした。つまり市所有地を確保して将来の再開発に備える。同時に、ずるずる居座ることはさせないぞ、という市の姿勢を三菱に示したわけさ。ボクんとこに来て、こうしますよって話したから、そりゃいい案だと思つて賛成したよ。

〔メモ〕 曲折を経て横浜市と三菱は五十一年三月、二つの協定書に調印した。移転理念の再確認と、金沢埋め立て地十万坪(三十三ヘクタール)の予約契約。正式契約はその四年後に細郷市政の下で取り交わされ、再開発事業はいま「みなとみらい(MM) 21」の名称で、進められている。

予約契約といつても四十億円の内金を積ませたしね。委員長になって東京へ行く時も、この懸案はもう片付いてるという気持ちだったよ。まあ高島ヤードの払い下げとか、やり残したこともあったけどね。

〔証言〕 中田乙二氏(三菱地所のトップとして、移転―再開発事業に一貫してかかわつてきた。同社相談役) 四十五年に三菱グループが中心になって横浜都市開発会社を設立しましたが、私たちはこれを正式な移転表明と考へていました。あとは機が熟すのを待つばかりです。この時、うちがデベロッパーとして跡地開発をする方向も打ち出されたわけで、今のMM21の基礎が固まったといえるでしょう。そこまで持つてきた功労者が飛鳥田市長。たいしたプランナーであり、先覚者だったと思います。この財産がなければ、細郷市政が言い出したところで、何もできませんからね。ただ、今のような大規模な埋め立てには飛鳥田さんは消極的で煮え切らなかった。ゴースインを出した細郷さんと、保革の差を感じました。MMをもじつて一部から三菱未来21などと言われて、だいぶ警戒心を持たれましたが、重工も地所も市の発展につながるならばと、それぞれのおかれた状況、役割を理解して、相当な決断をもつてのぞんだんですよ。

金沢埋め立て

あわてたのは京急さ。強気が哀願に変わった

〔メモ〕 四十三年七月、金沢埋め立て事業の詳細が決まった。埋め立て面積六百六十万平方メートル、総事業費四百十三億円。四十七年度完成予定だった。

市の金は使わない約束だからね、外債を導入した。当時、外債の売り込みは結構あったんだ。横浜っていえば世界中に名が知られている。ところが神奈川なんて、だれも知らないよ。それで一度、内山さん(内山岩太郎知事「当時」)が怒ったことがある。アメリカの証券会社だかに「ヨコハマには金を貸したいけど、ところでカナガワって何だ」って言われてね。これにはボクも驚いたよ。

ただ、持ち込まれる話には怪しげなもの多いんだ。おまけに横浜は昔、震災の復興にドル建て債を出して、その返済にひどく苦しんだことがある。親父が議員やってたからねえ、よく知ってるの。初めはベイブリッジを架けるのに外債を使うつもりだったけど、それじゃ収益性がない、埋め立ての方がいいんじゃないかってことになって、そして長期で利率の低いマルク債を選んだんだ。

〔メモ〕 マルク債は四十三、四十四、四十六年の三度、一億マルクずつ発行された。

マルク債ではレート問題に氣を使ったよ。二度目の発行は、近くマルク切り上げがあるってうわさされ

てた時で、大蔵省と連絡を取り合って、切り上げされてから円に換えることに成功した。この処置だけでも、横浜市は十何億円、もうけたんだよ。後でオレの退職金が高すぎるって問題になった時ね、冗談で「おつりがくるほど市にはもうけさせたのになあ」って言ったことがあるよ。

三度目は三度目で、ドイツで伊原さん（伊原隆横濱銀行頭取当時）とひと議論した。伊原さんはすぐに円に換えずに、向こうの銀行で利子を稼いだらどうだと言うんだよ。でもボクは自分の金じゃないんだからって言って、すぐに横浜に送っちゃった。そしたら調印の数日後にニクソン・ショックだろ。びっくりして留守番の松ちゃん（松宮理一郎財政局長当時）とこへ国際電話をかけたよ。そしたら「一マルク一〇四円台で為替予約して、すべて円に換えました」。当時のレートよりずっといい値だったんだ。冷や汗もんだよ。処置が遅れていたなら市場閉鎖だ、円高だ、で動きがとれなくなるところだった。

「メモ」 しかし漁業補償交渉の長期化、狂乱物価、埋め立て反対運動等々で事業は難航。途中、計画は二度修正され、総事業費千八百億円、完成目標も五十六年度と大幅にずれ込んだ。

漁業補償費が百億を超えたらう。ちょっと高いなあと思ったけど、まあ仕方ないよ。職場を取っちゃうんだからね。漁民の利益を守るって立場から担当者も誠心誠意やったんだ。それから海岸線を残せ、自然を守れっていう住民運動も起きた。でもあすこの辺はひどく汚れちゃっててね、もう駄目だったの。当時は東京湾で魚とったり泳いだりするののも無理だって、みんな思ってた。それなら手を加えることでよい良い環境をつくった方がいいじゃないか、という気持ちだった。海の公園や人工の砂浜も、そういう精神でつくったんだよ。

埋め立て用の土砂の問題でも苦労した。初めは、富岡や釜利谷を開発する時に出る土を東京からもらうことを考えていたんだ。ちょうどそのころ都市計画法ができて、市街化区域と市街化調整区域の線引きを



第一回マルク債調印。前列中央が飛鳥田氏。（左）内田大使、（右）ドイツ銀行・クラウゼン氏＝43年8月19日、フランクフルトのドイツ銀行で

することになってね。田村さんは国の通達なんか無視して、調整区域をものすごく広くとったんだよ。秩序ある開発をさせるためだけに、釜利谷も調整区域に入れちゃった。そうやってけば、こっちの発言力が強まって、開発する時や土砂を出させる時の交渉の武器になるからね。田村さんの悪知恵だよ。国の言いなりになってたら、市民を守る市政なんてできやしないよ。

ところが今度はオイルショックだ。京急は開発を延期したいって言う。こっちはそれじゃ困るって言う。行き詰まっちゃってね。そこで大場さん（大場正典助役当時）が千葉の浅間山の砂を持ってくる話をつけてきてくれた。日本鋼管の扇島埋め立てに使われて、まだ余ってたの。千葉側も山を削ったまま中途半端にほっとくのは危ないってんで、利害が一致したんだ。量も多かったし、そんなこともあって日本鋼管より随分安く売ってくれ

た。まったく救いの神だったよ。

あわてたのは京急さ。自分んこの土を使わなけりや、金沢埋め立てなんか出来っこねえとたかをくくってたところに、こっちがパンと方向転換したもんだからね。京急の土も何とか使ってくれて哀願に変わった。向こうも土の捨て場に困るんだ。結局、後でいくら使うことで話はついたけどね。

こんな具合だから市会もめたよ。でもオレの出す少し大きな提案で反対のないやつなんて一つもなかったから、慣れっこだった。それに市民のためになる事業だったのは、市会の連中も分かっているし、費用が膨れ上がったって採算が合えばいいんだもん。この埋め立ては企業を誘致して工場地帯をつくるんじゃない、街の中の工場を移転させて跡地の再開発もしようってのがねらいだった。ところが、やってみるとちにとんどん分譲の値段が上がっちゃったから、中小企業は動きづらかったらうね。本来は中小企業のために計画した事業だったから、その辺がちょっと残念だ。

〔証言〕 小串靖夫氏(市議会議長として第一回マルク債調印に立ち会った。県農協中央会名誉会長) 当時の国内市場であれだけの資金を用意するのは不可能でしたから、外債導入は正しい、というよりそれ以外にない選択でした。しかしレートや世界経済がいつ、どう動くかは常に気を配られました。飛鳥田さんは例によって「あなたも共犯ですよ」とありがたくなれない名前を押しつけてきますので、私も猛勉強しましたよ。市会には、社会党の市長ということで飛鳥田さんの施策に抵抗する者もいましたが、彼が言う通り、金沢埋め立てなどは横浜市のためにいい事業なので、自民党の私も協力しました。マルク債はあと一回発行する予定だったのですが、初期のころと違って高金利になるため取りやめになりました。当時私はもう議員を辞めていたのですが、飛鳥田さんから代理でドイツにあいさつに行くよう言われまして、市財政顧問なんて肩書をお願いしました。幕引きもやらせてもらえて、思い出深いですね。

港北ニュータウン

開発されちゃうならこっちで先手を打つ

〔メモ〕 六大事業の一つ、港北ニュータウンの建設は、横浜市港北区から緑区にかけての約二千五百ヘクタールの丘陵地を、市が日本住宅公団(現住宅・都市整備公団)とともに開発し、人口三十万人の都市をつくらうというものだった。開発の基本的考え方は、①乱開発からの防衛②都市農業の創造③住民参加による民主的都市づくり——の三本柱で「港北ニュータウン方式」と呼ばれた。

あそこは、南は横浜線、東は東横線が走っているんだけど、駅から遠くて不便だね。「横浜のチベット」なんて言われてた。だけど距離的には東京から二十五キロ、横浜の都心からも十キロと近いからね。開発は時間の問題だった。どうせ開発されるなら、いい生活環境ができるように先手を打とうっていうのが基本的な考え方さ。ニュータウンといってもね、多摩ニュータウンみたいな、単なる住宅団地を造るつもりじゃない。「ニュータウン方式」で理想的な町をつくらうっていうことだからね。例えば自動車の通るところと人間の歩くところははっきり分けた。ところが名前が同じ「ニュータウン」だから、ほかと混同されちゃう。もっと違った名前にすれば良かったって、あとで思ったよ。

三本柱の中でも、ボクが一番意味があると思ったのは、都市農業の創造だよ。これはボクが考えたんだ

けどね、大場さん（大場正典農政局次長Ⅱ当時）のサゼスチョンが相当あるよ。農業にはね、ボクは学生の時分から興味があったんだ。一時、大学で農業統計をやるようになって思ったこともあるくらいだ。

当時は、「都市」と「農業」は対立概念で、「都市近郊農業」って言葉はあったけど、「都市農業」なんてのはなかった。農地を手放したいって人がいる一方で、横浜市内でも立派にやってる人もいた。それで、農業をやりたいって人たちを一カ所に集めて、農業専用地区ってのを造ることにしたんだ。農家の人たちが集約してやれるんじゃないかって。区画整理すりゃ、機械化もできるだろう。都市部の農業の近代化だ。それに住宅地からすりゃ、農地は公園みたいなもんだし、逆に農家にしてみりゃ、マーケットがすぐ近くにあるわけだから両方に都合がいい。

ここでも市民参加を考えて、早いうちに、地元地権者、公団、市の三者で話し合えるようになって、協議会を作ったんだ。それでも、「人の土地に勝手に線を引いてけしからん」なんて反対する人もいて、買収交渉は大変だったよ。大場さんがこの辺の出身でね。農政局も長かったからみんなよく知ってるし、世話になってるわけだ。幼なじみもいたりして、「よう、何ちゃんよう」なんて調子で話すんだ。相手も大場さんの話なら聞いてくれる。これで本当に助かった。彼は毎晩のように行ってたよ、一軒一軒。

ところが問題が起きたんだ。計画区域内に水道局が配水池を造ろうっていうんで別に土地買収をやってたんだけど、その値段がニュータウンの方で考えてたのより高いの。同じ所なのに値段が違っちゃまずいだろう。ニュータウンの方は広いからね、高いとパンクしちゃう。困っちゃった。「マムシの力」なんて言われた島村さん（島村力市議Ⅱ当時）にもねじ込まれてね。だけど、これも大場さんに助けてもらったよ。

それから方形周溝墓。弥生時代の墓あとなんだけど、これが出てきた。すぐわきからは集落の跡も見つかった。学者は、非常に重要だから残せっていうんだ。だけど、そこはちょうどニュータウンのセンター

地区でね、公団の集合住宅の予定地なんだ。残すには計画を変えなくちゃいけない。当然、公団は渋る。地主も計画通りやってくれている言うだろう。結局、幹線道路の部分はつぶしたけど、あとは計画変更して残した。今は国の史跡になっているよ。

「ニュータウン方式」は結局、広まらなかった。でもボクはもともと、普遍化する必要はない、模範を示さずすりゃ、良ければみんなまねするさ、くらいに思ってた。だけど模範になり切れなかったね。一番の障害はやっぱり土地の入手だろ。六大事業はみんなてこずったけどね、これだけ長くかったのは少ないだろう。

〔メモ〕 港北ニュータウン計画は、昭和五十五年度に全体の基盤整備が完成する予定だった。が、石油ショックや移転補償交渉の難航などで二度、計画が変更され、現在は六十六年度完成の見通しとなっている。一方で全国的な住宅需要の落ち込みもあり、市は五十九年、それまでの住宅に加え、企業の開発・研究部門や大学を誘致する「多機能都市」「ハイテク・タウン」へと、基本的性格を変更した。

〔証言〕 信田隆治氏（計画地域南部にあった都田農協組合長として買収交渉にかかわった） ニュータウン計画が発表される前から、この辺ではいろんな不動産会社が開発計画を立てて、買収交渉をしていました。私たちもばらばらな小規模開発をされては困ると思い、大場さんに相談していました。計画が発表された時には反発も出ましたが、農地の区画整理を一〇〇パーセント市の事業でやるというので、協力の機運が出てきました。配水池の買収問題は私の管内でした。大場さんに頼まれて飛鳥田市長に会うと、「今、市はまわりの土地より高い値段で買うわけにはいかないが、とにかく、土地を譲ってもらおう。地主の了解をとってくれ。すぐじゃないと水が足りなくなる」と迫られ、その日は眠れませんでした。しかたないので、土地代に見合う金額を農協が地主に無利子で貸す形で、一時、肩代わりしてまとめました。市長からは、「よくまとめて下さいました」と握手されましたが、これはど神経を使ったことはありません。

新貨物線問題

損を承知でやらなきゃ革新市政の意味はない

〔メモ〕四十一年四月、国鉄は横浜・鶴見―東戸塚間に貨物線を新設する計画を発表した。東海道線に並行して走る従来の貨物線を旅客専用に変換することで、貨物輸送の近代化と東京―湘南間の通勤ラッシュ緩和をねらったものだが、新線予定地の住民らは横浜新貨物線反対同盟連絡協議会を結成。白紙撤回を求めて国鉄と全面対決の姿勢をとった。

市政十五年の中で、これはどこたえた問題はないね。でも損を承知で乗り出したの。鳴海君ともども、やらなきゃいかん、という感じだったよ。だって貨物線が市内を通るってんで、住民が不安に思ってるんだもん。それをなくしてやろうと思った。傷だらけになり、国鉄、住民の両方からいじめられることは分かってはいるけど、なおかつやらざるを得ないじゃないか。そうしなければ革新市政の意味はない、ということをよく言ったよ。ちょうど池子問題で、国と市の間に立つ今の県と立場は似てるよ。長洲さんはずっと静観してきたけど、その辺、ボクらは違うんだよ。

ただ、計画を白紙に戻させるってことは考えなかった。それは認めたらえで、条件闘争にもっていかうと思った。騒音や振動の公害を低く抑えるわけさ。貨物輸送が必要だという前提がある限り、白紙撤回はないよ。基地とか原子力船なんてのと違うからね。ところが、これ、誤りだったね。大騒ぎしてつくって

も、いまはあの貨物線、ほとんど使っていないだろう。まさか貨物がこんな状況になるとは思ってもみなかったよ。まだまだ必要だと思ってたんだもん。第一、国鉄がそういう考えだった。仮に横浜市が「貨物に寿命はない。この線はいらない」といったところで、国鉄はつくるつもりだろう。

それから混雑の問題。当時のままじゃ通勤者は大変だし、無理して走ってると事故も起こるしね。その前に鶴見事故があったろう。三十八年の十一月か。女房に言われてオレ、現場に飛んでって、死人がかつぎ出されるのを見たよ。各病院も回って歩いた。阿鼻叫喚だよ。三枝博音（哲学者、横浜市大学長）当時なんて、仲の良かったいい学者も死んじゃってね。何しろ死者百六十一人だろ。惜しい人がたくさん死んだ。ああいう状態をまたつくっていいのかしら。住民の反対する気持ちも分かるけど、ぎゅうぎゅうすし詰めに乗ってる人間のことを考えると、反対同盟のいう地域エゴなんてくそくらえだと思ったよ。

地域エゴってのは、宮崎君（宮崎省吾反対同盟事務局長）当時）が押し立ててきた理論でね。地域の主人公は住民なり、その住民の生活を守らない革新市政とは何ぞやって。保守とけんかするのは得意だけど、革新の名において攻められるんだから、つらいし、効いたよ。宮崎君、頭いいし筆達者だろ。『朝日ジャーナル』なんかにはやたら書くしね。反論したら騒ぎがかえって大きくなるから、こっちは沈黙を守ってたけど、これもつらかった。とにかく敵ながらあっぱれだよ。横浜で雇いたいくらいだった。

〔メモ〕建設を前提とする横浜市に「国鉄・横浜連合軍」のレッテルを張って、反対同盟は測量阻止や市長室占拠などの実力行動で激しく抵抗した。一方、横浜市と国鉄は四十七年五月、騒音を五五ホン以下に抑える、軌道の両側に緩衝地帯を設ける―などを内容とする七項目の公害防止協定を結び、ひとつのヤマ場を越えた。

国鉄と横浜市は連合軍なんかじゃないよ。どんなに国鉄をいじめ、また市もいじめられたか、彼らは知らないんだよ。七項目協定なんて、こっちが食らいついてようやくのませたんだもん。トンネル部分も初

めの計画よりずっと増やした。敗北感は国鉄に相当あると思うよ。これも、市が早くから介入したから取れた。そうでなきゃ、もう縦横無尽にやられてたよ。もちろん反対同盟が騒いでいたのも、ひとつのてこになったけど。逆に国鉄からも有言無言の圧力を受けたよ。関係をあんまりこじらせると市政はやっていけなくなる。向こうは脅す材料をいくらでも持つてるからね。高島ヤードの払い下げとか、横浜線の復線化。地下鉄建設なんかもそうだね。なんだかんだ、随分言われたよ。

反対同盟には市長室を占拠されたり、会議室に缶詰にされたりしたけど、オレ自身がそういうのやってきたくちだから、そう困ったとは思わなかった。でも、最後は警察官入れて排除しちゃった。社会党のオレが国家権力を入れるんだからね。大きなマイナス点だし、逆に反対同盟は目的を達したわけさ。まあやむを得ないって気持ちだった。とにかく国鉄の先の見えない貨物計画のとはっきりで、宮崎君なんかとよくい争いをしたよ。出発点を誤ればどういうことになるか、よく学んだ苦い経験だ。

〔証言〕 宮崎省吾氏(宮崎商会経営) 横浜市の介入とは、結局、条件闘争の押しつけであり、住民の根本的な疑問や怒りと全く相入れないものでした。それを革新市政の勲章のようにいう、その主観的善政主義に鼻持ちならないものを感じました。今の長洲さんのやり方がいいとも思いませんが、全面的に住民側の立場に立てないのなら、変に動いてもいいとは思いません。われわれの運動は、革新市政の正体を明らかにした点などで大きな意味があったと思います。革新自治体も「お上一下々」の関係をいじろうとせずに、「保革どちらがいいお上か」というレベルにとどまっていたため、その後の総敗北を招いたんじゃないですか。貨物に金をかけてもドブに捨てようなものだという反対同盟の主張を全然受けずにいて、今になって先を見る目がなかったなんて言うのもおかしい。とにかくわれわれはやるべきことはすべてやっただけで、金と権力に負けた。今はさっぱりとした感じですよ。

緑化

農家は皆、山林を子孫に残したいと思ってる

〔メモ〕 減少する緑地への対策に横浜市が本腰を入れたのは四十六年。農政局に、計画局の公園部を加えて緑政局を新設し、「市民の森」「子供農園」「フルーツパーク」など緑保存の新規事業を一斉に打ち出した。

それまでサボってたんだよ、緑についてはね。全然考えなかったわけじゃないけど、なるべく保存したいって程度さ。関心の中心はむしろ空き地の確保で、ちびっこ広場とかいろいろ造った。こっちの方が忙しくて緑まで手が回らなかった形だよ。それを大場さん(大場正典農政局長)当時が毎日、市長室に来ては緑保全の重要性を説くんだ。もちろんボクにも異存はない。「じゃあ、どうしたら緑の事業やれるか、知恵出してくれ」って言ってできたのが緑政局さ。

実はね、大場さんが頑張ったのには事情があるんだよ。農政局ってのは目立たない局でね。農家も農地も減る一方。「このままじゃ局がなくなってしまう」という危機感が当時、局内ですごかったの。何しろ、農政局へ異動と言われた女子職員が「島流しだ」なんて泣き出すくらいだからね。何とか日の当たる局に、と考え出したのが、これから伸びるだろう公園部を吸収することさ。本当に起死回生の一打だったね。これやってなきゃ、今ごろ農政部か農政課になってるんじゃないかな。

いい名前だろ、緑政局って。それまで「後進産業だ」って農政予算に冷たかった市会議員も、緑政予算となると同じ事業でもろ手を上げて賛成さ。「島流し」なんて言ってた女子職員も緑政局勤務を希望する始末だよ。ボクも張り切って、予算査定で緑政局の新規事業を全部認めたもんだから、大場さんなんか「本当に全部執行できるか」って一時、不安になったらしい。

〔メモ〕「市民の森」は、市が自然山林を地主から借りて市民が自由に入れる公園とする代わりに、地主には固定資産税と同額の補助金を支払う事業。四十七年四月に第一号「飯島市民の森（栄区飯島町）」が開園し、これまでに十六カ所、約二百七十ヘクタールが提供されている。

山林ってのはね、収入にはならないけど、農家のステータスシンボルなんだよ。皆、子孫に残したいと思ってる。ところが、税金が払えないんでしかたなく手放す人が多かった。だから、税金分を市が出して農家を救うと同時に、市の緑地面積を増やす一石二鳥の手さ。事業を発表すると、希望が殺到したよ。開園式に出た時は、「この森を開発から守ったんだなあ」と感無量だった。

もう一つのねらいは、市民の森を通じて地域のコミュニティを作ること。地元の人たちで管理組合（市民の森愛護会）を作ってもらって、ゴミ拾いなんかの公園の管理を任せただ。ある市民の森ではね、農家の裏山だったんで、中で牛を飼ってたの。いつの間にか、だれかがさくの周囲にヒマワリの種を植えてね。気づいた地主が「ありがとう。大事にします」って看板を立てて育てたんだって。こんな心の触れ合いが生まれたって報告をいくつか聞いたよ。

ひかりが丘（旭区上白根町）の市営住宅の植樹もうまくいった。公園住宅は木が青々としてるのに、市営住宅にはなんにもなくてね。ひかりが丘じゃなくてほこりが丘だ、なんて悪口言われた。で、農家に苗木を委託栽培させて、住民に大量に植えてもらったの。見事に緑化できて「ほこりが丘がみどりが丘になった」って喜ばれたよ。

失敗例も結構あるんだ。駐車場のへりに木を植えて緑化しようと思ってる。木の代金は市で持つからって言ったんだけど、地主がやってくれないんだよ。駐車場が狭くなるからって。けちだね。その時は大憤慨したよ。いくつかはやってくれたけど、そのうちビルが建って木も消えた。今あるのはくすのき広場（市庁舎西側）の駐車場くらいになっちゃった。今の駐車場に全部、緑が植わってれば相当なものだろう。残念だよ。街路樹もまだ足りない。道路が狭くて植えられないところが多いんだ。横浜はちよとずつ、ちよとずつ接収解除された。だから道路を広くすることができなかったの。

全体としては、まあまあ緑化できたと思ってる。議会で「横浜市の公園率が低いのはけしからん」なんて言うけど、「市民の森を含めた緑の率で比べてみる」と、せせら笑ってた。だけど、これからは難しいね。そんなに大きな緑地は残ってないからね。端切れみたいな土地を緑化するよりしかたない。地価も高騰してるから、土地を売りたい地主も多くなるだろう。いずれ市民の森もなくなるのかな。

〔証言〕川井啓介氏（市民の森「第一号」を提供した）農協から「緑を残す事業が始まる」って聞いて喜んで参加したんだ。この森の地主は五人いるけど、みんな、子供たちに緑を残したいと思ってたからね。十年契約だけど更新したよ。うちの周りも昔は水田や畑だったけど、今じゃほとんど残ってなくてね。五年も経てば全部宅地になるんじゃないかって言うくらいなんだ。だから、この森だけは永遠に残したいって気持ちがありますます強くなってるよ。十五、六年も前にこんな制度を作った飛鳥田さんてのは先見の明があると思うね。うちの森では、消防訓練や草刈りを地元の人たちと毎年やってる。新住民の人も参加して、すぐオレたちと仲良くなるだろ。地域のまとまりに一役買ってるのが自慢さ。そんな仲間で年一回、房総や伊豆にバス旅行に行くのも楽しみでね。この費用も市が愛護会に出してくれる委託料でまかなえるんだ。本当に感謝してるよ。

「ゴミ戦争」

オレが首つってる絵とか、その数、無数よ

「メモ」 四十年代、人口急増が続く横浜市ではゴミの処理が問題となった。飛鳥田市長は、四十七年の年頭会見で、「公害、道路交通、水資源、学校用地確保とともにゴミ処理も新しい都市づくりを進めるための課題だ」と語り、「五大戦争」と名付けた。美濃部東京都知事も四十六年に「ゴミ戦争」を宣言していた。

宣言は東京の方が先になっちゃったけど、実は、一緒にやろうって話し合ってたんだ。それを向こうが先にやっちゃった。先越されて内心くやしかったよ。ゴミを減らそうっていう「ノーゴミ運動」とか、ゴミ対策はずっと前からやってたからね。ボクが市長になったころは、半分以上は山林や空き地に捨て場を造って埋めてた。焼却場たつて、臭いし、煙突の煙がすごくて、工場近くでは洗濯物が黒くなったり、黒い雨が降る状態だった。「一〇〇パーセント焼却処理」にしようっていうんで、「一区一工場」を目標して工場をどんどん造ることになった。最新式の設備をもってきて、においも煙も出ないようにしたんだけど、前例がないもんだから信じてもらえない。初めのうちは随分、反対されたよ。四十八年にできた旭工場の時がいちばんすごかった。それまでのゴミ焼き場はひどかったから、無理もないんだけどね。

今でも国道16号のわきにそびえ立ってるけどね。周辺の白根町の人たちが、そんな汚ねえもんはごめんだって反対したんだ。町内会をあげて、署名集めとか陳情とかいろいろやってた。実にやかましかった

よ。中には激しいのもいてね。電柱作戦とかいって、国道沿いの電柱という電柱に一本残らずビラを張るわけだ。半紙に書いてあるやつなんだけど、オレが首つってる絵とか、「飛鳥田のバカヤロー、帰れ」なんてのもあった。その数、無数よ。まだ親父が生きてるころでね。オレの田舎は厚木で、自動車で行く途中あそこを通るんだ。親父と一緒に行ったら、そのビラ見てね、「なんだお前、これは」って嘆いてたよ。

安田さん（安田隆三郎清掃局長当時）とか小泉さん（小泉富太郎同局管理部長当時）たちが説得に当たってた。ボクも足を運んだよ。公害防止には自信あったからね。「できても、諸君が気に入らねえなら、次の日からぶっこわす」なんて言ったよ。小泉さんは「余熱を使って近くの農家でハウス栽培をやったらどうか」って農協にもちかけたけど、反対運動やってる人に遠慮したのか、のってこない。パイプをひいて近くの民家に給湯しようなんて話も出たけど、結局、ふろのついた老人福祉センターと温水プールを造ることになった。余熱をどう使おうかってことがまずあって、それから、反対運動やってる人たちと話し合ってるうちに出てきたんだ。ただ単に、説得するだけじゃ駄目だった。激烈だったからね、反対は。

あの工場の建設はね、三菱重工を指名したんだ。ところがオレの弟（飛鳥田律之三菱重工横浜造船所環境装置設計課長当時）がやっててね、それで弱っちゃった。弟がいたから、なんて言われやしないかと思ってね。この時から業者は実に厳密に選ぶようにしたんだ。まず設計図出させてね。学者に頼んで千項目ぐらいを採点して総合集計をする。旭工場ではね、においとか煙とかは計画通り抑えたけど、予想外だったのがテレビの電波障害。鉄製の煙突が原因なんだ。次からは、まわりをコンクリートで覆うようにしたよ。温水プールでは教育委員会とけんかしたんだ。二面造ったんだけど、オレはふたつとも野天でやれって言ったんだ。そしたら教委の方は、子供たちが風邪でもひくと父兄がうるさいって。ボクはね、モスクワでっかいプールを見てきた。雪降っててね、チラチラ落ちてくるんだ。その中でもうもうと煙を上げて

た。プールのすぐわきに脱衣所があって、上がるとすぐ着替えられるようになってから寒くない。夏なんか、甲羅干しもできるしね。モスクワでできるのになぜこちでやれないんだって、随分けんかしたもんだ。結局、ボクも譲ってね。一面は野天、一面は屋根つき。ところが、造ってみると屋根つきの方がはやるんだね。

実に金がかかったけど、評判良くてね。「旭方式」なんて言われて、全国にも広まって、今じゃ常識になった。京都の船橋さん(船橋求己市長)当時も見に来て、向こうで反対してた住民を四、五十人も見学に寄こしたよ。ただ誤算だったのはね、高度成長期の急増ペースに合わせて工場をどんどん造っただろう。今じゃ余力があるんだよ。

〔メモ〕 飛鳥田市長時代に新設された工場は五カ所。設計まで入れると七カ所になる。この間、ゴミの処理量は約五倍、焼却処理量は約十倍に増えた。焼却処理の割合は、三六パーセントから七四パーセントとなった。

〔証言〕 岩崎多美子さん(白根子供会後援会長として、反対運動に加わった。旭区婦人団体連絡協議会会長) 小学生の娘がいたので、公害と交通事故が心配で反対しました。市側の説明では、公害は出ないということでしたが、どこの処理場を見学に行っても、煙は出てるし、車はバラバラとゴミをまきちらしている状態で、とても信じられませんでした。私たちはビラ張りなんてしませんでした。市議員への陳情などは、それこそ寝食を忘れてやりました。飛鳥田さんにも一度だけ会えましたが、「うん、うん」と調子よくて、うまくかわされた感じでした。できると心配した公害はないようだし、プールは子供たちが喜んで使っています。老人福祉センターもお年寄りの生きがいになっています。私たちの反対運動は何だったんだろうとむなしく思うことがあります。私たちの反対があったからこそ、これだけの施設ができたんだという自負心も持っています。ただ、公害の不安は今も消えていません。将来にわたって、私たちの反対運動が無駄であってくれればいいけれど、と願っています。

物価対策

下げるために、もう本当に何でもやった

〔メモ〕 四十八年暮れの石油ショックをきっかけに、「狂乱物価」と呼ばれた異常な物価の高騰が全国を襲った。飛鳥田市長は「市民生活の防衛」を掲げて、市役所内に「市民生活関連物資緊急対策本部」を設置し、その実働部隊として価格対策部を、臨時に経済局の中に置いた。

これはね、ボクの直轄部隊なんだ。河合さん(河合栄一経済局副主幹)当時)が中心で、あと、各局から生きのいい主査を五人ばかり集めた。物価Gメンなんて呼ばれた。辞令交付の時は、わざわざみんな市長公舎に呼んで、直接手渡した。普通、主査クラスだとやんないんだよね。一応、生活二法に基づいて、業者が決められた値段で売ってるか、不正な在庫はないかなんて調べる仕事があるんだけど、この法律はザル法なんだ。本社が東京にあると横浜市じゃできない、とかね。だから、「そんなのとらわれないで物価を下げるためなら、なんでもどんどんやれ」って言ったよ。権限がなくなっちゃって構わないから、戸をけ破ってでも入っちゃえ。逮捕されたらオレがもらいうけてやる、なんてこともね。とにかく、役人の考え方で判断したって駄目だ、市民が何を求めているのかを第一に考えて、対策を立てなくちゃいかん、という考えだった。

みんな、よくやってくれたよ、本当に。帰るのが夜中の一時、二時なんてのはさらだった。調査ばかりやってたってしょうがないだろ。だから、デパートとかスーパーに、安売りをしてくれて要請したり、メーカーにも乗り込んだよ。ただ頼むんじゃないでね、前もって市民にアンケート調査して、何が高くて、何が品不足かって調べとくん。それを突きつけて、「お宅にも社会的責任はあるだろう」って迫るんだ。これでいい、協力してくれたよ。向こうも消費者を敵に回すほどばかりじゃない。協力すればPRになるって計算もあるからね。それでも渋ると「協力していただけないなら、『広報よこはま』で書くことも……」なんて脅した、とか言ってたなあ。他の市から「どうやるのか教えてくれ」って言ってきたよ。それまで役所が手をつけなかった流通機構の中にまで踏み込んだのが、ミソだね。そこに吏員の苦勞もあるわけだ。みんな勉強家でね、特に河合さんは熱心だった。夜中も平気で部下んとこに電話するんだ。さすがにみんな閉口してたよ。

産直もやったよ。キャベツとかハクサイとかを群馬県の嬬恋村^{つまこい}や長野県から持ってくるんだ。嬬恋方式ってやつで、セリ値に上限をつける。そのかわりに下限も作ってね。それ以下になったら、差額は市で持つてやるって方法さ。とにかく、一キロ百円以下で買えるようにした。市価より二、三割、安かったはずだよ。それに量も確保できる。台風の影響がなんかで、品薄になったことがあったけど、横浜には優先的に回してくれた。これは美濃部さんとこで前の年からやってたんだ。それをまねしたんだけど、ボクんとは海ないからね。こっちからも行った。大成功だったと思うよ。

同じ産直でも一番面白かったのが牛肉。沖縄の石垣島から和牛を持ってきた。これも河合さんのアイデアだよ。ほかではあんまりやんなかった。もちろん安くしてくれて要望はあるんだけど、牛肉は危ない

んだ。キャベツなんかと違って質がバラバラだからね。損するかもしれない。流通機構も複雑なんだ。

あそこに無人島があつてね、島全体が牧場なの。その持ち主と話つけた。石垣市も乗り気でね、すぐまとまったよ。市長（内原英郎氏）もわざわざ来てくれてね、市役所で一緒に記者会見やったよ。石垣島には食肉処理場がないから、生きたまま沖縄本島まで持って行って、そこで枝肉にする。あとは冷凍コンテナに入れて、フェリーで運んだり、飛行機にしてみたり、いろいろやったよ。どうしたら一番安くなるかってね。

消費者にも勉強してもらわなくちゃいけないっていうんで、通信講座もやった。全市民を相手にね。二千人の定員でやったんだけど、初めはそんなに来るかどうか分かんなかった。だけどふたを開けてみたらね、すぐオーバーしちゃった。市外からの申し込みもどんどん来た。次からは全国にしたよ、対象を。山形市なんか、市役所でまとめて何十人とか来てた。

もう本当に、何でもやったよ。

〔証言〕 内原英郎氏 当時、石垣市では、肉牛の生産から出荷まで一貫経営をめざす畜産基地建設事業が始まったばかりでした。たまたま、うちの牧場主と横浜の業者が取引をしていました。横浜から産直の話があり、私も良い物を安く大衆に届けたい、と思っていたので、民間の取引を両市の市長が「保証」する形で始まりました。しかし取引といっても、普通の商売とは違い、何か、遠い親せきに郷里から送って食べってもらうといった感じで、ぬくもりのあるものでした。当時、飛鳥田さんは全国革新市長会の会長として一世を風靡していたころでしたが、偉そうなそぶりも見せず、とても気さくでした。産直はその後、途絶えてますが、こちらの畜産基地建設も進み、またいつでも送れる態勢になっています。

〔メモ〕 石油ショック直後、四十八年十二月の定例市議会で飛鳥田市長は「ソ連から原油五千トン輸入し、精製してできる灯油四百トンを生生活保護世帯に配りたい」と語った。横浜市ならではの物価対策、「海外産直」の一つとなる



市の要請で実現した値下げ販売。飛鳥田氏も買い物をし
てPRに協力＝49年3月、横浜駅西口の横浜高島屋で

を作ったね、一緒に配ってたな。
中国からいろいろ持ってきたよ。まず、
トイレットペーパー。買い占めがすごかった
ら。当時、自宅の八畳間がいっぱいになるほ
ど買った主婦がいる、なんてうわさも流れる
くらいだった。中区の友好商社が買いつけた
のを安く売ろうって計画だった。しかしこれ
も遅れてね。来たのは、発表してから半年近

から、ソ連側はそれでも売れるって思ったの
かなあ。
同じソ連でもシシャモは好評だったよ。北
極海でとれたやつをね、一皿百円で売った。
これは何度もやったよ。オレも食ったけどう
まかった。ただね、シシャモっていても、
日本で食うのは子持ちのメスだろ。ところ
が、ソ連から来るやつはほとんどオスなんだ
よ。中央卸売市場でさばいてくれたんだけ
ど、初めは困ってね。油でいためりゃ食える
っていうんで、わざわざ料理法を書いたビラ
を作ったね、一緒に配ってたな。

はずだった。

産直っていったって、何も国内に限ることはないだろ。実はボクは、ソ連との貿易を拡大しようって
うんで、県や地元の財界と一緒に出張して横浜通商っていう会社をつくってたんだ。そのロシア語のベ
テラン、河西さん（河西武常務＝当時）からちやうど、ソ連から原油を買わないかって話が来てるって聞い
た。石油がない、ないって大騒ぎのころだったろ。冬だったし、こりゃ何としてもやらにゃいかんと思っ
てね。議会でしゃべったんだ。どこにも言っていなかったから、吏員も知らなかったんじゃないかな。だけ
ど量は大したことないから市民全体に配るわけにはいかない。それじゃ、まず弱者にっていうんで生活保
護世帯にしたんだ。約六千あったからね、一世帯当たり十八リットル入りで四缶って計算だった。すぐに
ソ連側と協定書もできて、翌年の一月にも来るって話だった。

新聞なんかでも派手に書いてね。ほかの革新市長からも、こっちにも分けてくれなんて電話がかかってき
た。だけど、結局これ、うまくいかなかったんだ。

なかなか来ないんだよ。輸出の許可が取れないんだか何だか、とにかく向こうの事情でね。だけどそん
なに待ってられない。冬が終わっちゃうからね。アジア石油に頼んで、同じ量の灯油を事前に出してもら
った。配るとなるとこれもまた大変でね。生活保護世帯っていったってバラバラに散らばってるだろ。結
局、別口の灯油券が配れたんでこれはやめて、代わりに老人ホームや保育所に配ったんだ。だけど、肝心
の原油は結局、来なかった。河西さんここで、いろいろ手を打ってくれたんだけどね。

品質も良くなかった。サンプルの分析もアジア石油に頼んだけど、要するに日本という廃油だったん
だ。石油タンクを何年かに一度、掃除するだろ。その時に出てくるもんじゃないかって。精製すりゃ、灯
油が採れないことはないんだけどね。普通なら金払って買うもんじゃないって言ってたな。時期が時期だ

くも後。もうモノ不足の峠は過ぎてた。でもよく売れたよ。野菜もいろいろ輸入した。友好提携してた上海から、キャベツとかタマネギとか。これも日本のを買うのとは違うからね。しんが固かったり、持ってくる途中で芽が出ちゃったり、いろいろあって大変だったよ。

要するに、何でも試みてみるしかないってことだったんだ。思いつくものは手当たり次第にやったの。少しでも効果がありがたいってことでね。産直にしたって、市全体の消費量からすりゃ、わずかなものだろ。それで物価全体が下がるわけではない。だから当時から、せめて物価の上昇を少しでも抑えられればいいんだって、盛んに言ってた。市民にも物価監視員とかでいろいろ参加してもらった。そうやってあらゆる手を打ってね。市民の自覚を高めるってこともあったんだ。

物価対策となると、地方自治体には限界があるからね。やるだけやったと思う一方で、手が出なかったっていう思いもあるね。それだけに、一生懸命に吏員を督励したんだよ。うまくいったっていうより、むしろ、あの人たちの努力でどうやら格好がついたって程度だよ。何しろ相手が大きすぎた。

〔証言〕 河西武氏（横浜通商社長） 原油輸入の話があったのは、ナホトカにある全ソ連邦極東貿易事務所（ダリントルグ）からでした。ソ連の石油輸出は、大口についてはモスクワの石油輸出公団が窓口になっていて、ダリントルグが扱えるのは国家計画の余剰分だけです。飛鳥田さんが公表した時は、相手方と、本当に輸出できるのかも含めて極秘で話を進めている最中だったので、新聞にまで出て驚きました。品質はともかく、一応、協定書までできていたので、テレックスで何度も催促したり、日ソ貿易協会を通じてソ連共産党中央委員会に本契約ができるようにお願いしたりしましたが、結局、向こう側の事情で出せなかった、と記憶しています。飛鳥田さんは時流に乗って、当時の環境に合わせてやったつもりでしょうが、商売なんてそんな簡単なもんじゃありませんからねえ。

福祉見直し

金のある東京にやあかなわんと思ってた

〔メモ〕 五十年七月、飛鳥田市長は「革新自治体の福祉政策全体に反省を求める」ことを、全国革新市長会の議題として取り上げた。革新自治体イコール福祉充実という受け止め方が定着した時代。しかも、この年の統一地方選で、革新側の「ばらまき福祉」による財政硬直化が、自民党の格好の攻撃材料にされた直後の提言だけに、さまざまな波紋をよんだ。

えらく困ったのが、この福祉見直し論なんだ。ボクが言ったのは福祉の質を充実しようってことでね。決して後退じゃなくて前進なんだよ。それを誤解したり悪用したりする人がいるもんだから、真意を分かってもらうのに苦労したよ。

革新市長といえども福祉だけでなく、都市づくりをきちんとやらなきゃいかんということをボク、何度も言っただろ。でも決して福祉をおろそかにしたわけじゃないよ。四十八年に国が老人医療費を無料にして「福祉元年」と言われたけど、横浜じゃあ、一年前から条例で無料化してるし、バスの無料バスを老人に贈るなんて事業もやったしね。毎日毎日、一生懸命働いても食えなくなっちゃう人たちを救済して、少しでも老後を楽しませてやろうと思ったんだ。

医療費無料化には思い出があつてね。実は美濃部さんが四十四年から七十歳以上を無料にしてたんで、

横浜もそれにならったんだ。ところがその後、国が七十歳以上で始めたら、東京都は六十五歳以上を無料にしたの。同じ革新首長でしかも隣同士だろ。ウチも年齢引き下げたいって随分言ったんだけどね。結局、金が足らなくて無理だった。だって一歳下げるだけで何億とかかるだろ。将来の高齢化社会を考えると、とても負担しきれないよ。東京ではできるんだよ。高度成長で法人事業税なんか毎年、はね上がるから。「金のあるとこにゃあ、かなわねえなあ」とか「あんなにボンボンやらないでくれればありがたいの」とか、ブツブツ言ったのを覚えてる。

こんなふうに、革新自治体が競い合う形で福祉は充実してきたんだけど、ボクが見直し発言をしたところになると、福祉を食い物にするやつが出てきたんだよ。福祉施設をつくってそれを商売にする、福祉の心を忘れた経営者。ひどいものになると、市からの補助金をピンはねするやつまで出てきた。もう一つショックだったのは、老人の無料バスだね。発行したのはいいんだけど、おじいちゃん、おばあちゃんが、揺れる車内でよろけ通し。ところがすぐそばの席に若者が平然と座ってるんだ。「仏つくって魂入れず」だね。せつかくの政策が、実はまるで生きてなかった。反省させられたよ、これには。平島君（平島進教育長当時）に、席を譲るよう教育しろって言った。各学校でやってくれたけど、この程度じゃ駄目だよ。

だから、ボクの福祉見直し論てのは福祉充実論なんだ。ただ行政が金を出さなければ、それを生かして助け合う社会づくり、風土づくりをしなきゃいかんてこと。財政問題なんか、はなっから意識してないんだよ。だいたい、自治体は国防費なんてないからね、やろうと思えば何とかなるもんだよ。国だって防衛費を削れば、今も悠々と福祉充実ができるんだ。ところが国の見直しっていうのは、そこを削らないで、一方的に患者の負担を大きくするだけだろ。今の国のやり方にはボク、絶対反対だよ。

この年の暮れに、革新市長会で福祉省を作れって提言したのも、充実論の表れさ。一つの省になれば、

予算を多く取れるだろ。国民福祉会議を作れとも言った。もちろんできっこないけど、あんまり誤解が広まっちゃったんでね。それを否定するアピールの意味もあったよ。

翌年の市の予算も、福祉関係を相当伸ばしたよ。船橋君（船橋求己京都市長当時）が同志社大の小倉さん（小倉襄二文学部教授）に作ってもらった福祉政策モデルを参考にしつてね。決して無理に伸ばそうとしたんじゃないけど、一つ一つの事業見ても削れる部分がないんだよ。実際、それだけ当時の横浜も福祉政策が足りなかったということさ。

一連の流れで一番不届きだと思ったのは、保守の側がボクの論を福祉後退論だと決めつけて、「ほら、革新市長だってばらまき福祉を反省してるじゃないか」と政治的に利用したことよ。特に美濃部攻撃に使われてね。彼、保守にとっては目の上のタンコブだろ。小森さん（小森武東京都政調査会常務理事当時）からも恨まれてね。鳴海君が弁解に行つたよ。まあ今にして思えば、言い出すタイミングが悪かったということだね。ちょっと不用意だったとは反省してるんだ。

〔証言〕 小倉襄二氏 京都市が新しい福祉体系「市民の健康と福祉に関する総合政策体系のあり方」を作ったのも、実は当時革新市長会長だった飛鳥田さんに「京都で全国のモデルを作ってみないか」と勧められたからなんです。いわゆる市民派の学者が多いからだだったと思いますね。このモデルは、体系の提言だけでなく、アクション・プログラムを市に作らせ、実際の事業進行まで市が責任を持ち、市民がチェックしていく態勢を求めました。横浜市にも数回、説明に行きました。飛鳥田さんは革新の星として、実に見事な自治体政策のモデルを作ったと思います。ただ社会党委員長になった後、この経験が国政の場で生かされなかったことが残念でなりません。いろいろ難しい面はあったと思いますが、せつかくの革新自治体の努力の成果を国にかすめ取られてしまい、革新自治体も分断されてしまいましたからね。

日照汚職

信頼してただけにね、ショックだったよ

〔メモ〕四十五年ごろから深刻になってきた日照被害に対応するため、横浜市は四十七年十二月に用途地域別に目標日照時間を定めた日照等指導要綱を制定、翌年には日照相談室を発足させた。十大都市中、最も早い取り組みで飛鳥田市政の看板政策となった。

要綱を作る前から、日照問題には力を入れてたんだよ。建築確認の申請が出てきた段階で、近くの住民から苦情が出ていると、市が住民と業者の話し合いの場をこしらえたり、同席して両方の言い分を調整したりするわけさ。ところが市民の陳情がものすごく増えて、建築局の担当者だけの手には負えなくなってきた。それで、要綱を作ったんだ。業者の反発は、そりゃすごかったよ。「飛鳥田の野郎、次の選挙で落っことしてやる」なんて話も聞こえてきた。

要綱を実施した年の春に日照相談室を作ったんだけど、所属をそれまでの建築局から市民局に移したの。建築確認ってのは、法律的には建築主事個人の責任で行うとされててね。それも法律の要件を満たしていれば二十一日以内に出さなきゃならない。ところが紛争が激しくなると、とてもこんな短期間で片付かないだろ。もし業者が主事を法律違反で訴えでもしたら、主事の方が負けちゃう恐れが強いんだよ。だ

から、担当を市民局に移して、わざと責任体制をあいまいにした。主事の所に「法律違反だ」って業者が来たって、「市民局が担当だから、そっちへ行ってくれ」ってごまかせるだろ。とにかく、ボクはこの要綱に自信持ってた。ところがね、事件が起きちゃったろ。ショックだったよ。響いたね。

〔メモ〕要綱実施から約三年半たった五十二年六月、日照相談室長が住民の調整工作をした謝礼として設計会社からゴルフクラブセットとバッグを受け取っていたことが発覚、県警捜査二課に逮捕された。その後の調べで余罪が次々と明るみに出、同室勤務の約三年間に計十社から約六百万円を収賄していたことが分かった。特にその鮮やかな解決ぶりが評判だった根岸線磯子駅近くのマンション群建設では、五百万円ものわいろが動いていた。捜査は四カ月余りに及び、逮捕者も十九人と、飛鳥田市政で最大の汚職事件に発展した。

ボクはねえ、横浜から汚職と麻薬を追放するって豪語してたんだよ。特に汚職はね、とても神経使ったんだ。事件を起こさないためには、日ごろから警察情報に強い人たちと接触しとくの。弁護士やってたころはボクも直接警察と交渉するから、仲のいい刑事も何人かいたけど、市長になったころはもう顔きかなくてね。もっぱら総務局の連中に指示してアンテナを張らせた。刑事部長とか捜査二課長が代わるとね、ひそかに警戒警報が出るわけだ。新しい人は張り切ってるからね。それまで眠ってた事件まで掘り起こそうとするらしいんだよ。こんなことを繰り返してるとたまに、次はだれそれがやられそうだって情報が入って来る。すぐに担当局長に命じて、その職員の周辺を内々で調査させる。情報が部分的にしからなくて苦労したこともあるよ。例えば「〇〇局の係長の鈴木」ってことしか分からない。調べると該当する係長が三人もいるとかね。

調査して、「どうもあやしい」ってことになる、その職員を呼んでね。「警察が君をねらってるという情報がある。やましいことがなければ気にする必要はないが、じっくり考えてみてくれ。依願退職という

方法もあるから」と言う。十五年間で、辞めてった職員が二、三人いるよ。こういう場合は、なかなか事件にならないんだよ。もちろん警察の方は、独自の判断で立件するかどうか決めるのかもしれないけどね。市役所の中じゃオレ、「もみ消し率高いだろう」っていばってたよ。小泉さん（小泉富太郎助役当時）なんて、県警の幹部から「おたくはよく事件つぶしてくれすなあ」なんて皮肉言われたらしいよ。

「疑わしきは罰せず」に反すると言う人がいるかもしれないけどね、こればかりはやむを得ないと思うた。それに本人のためになる場合もあるんだよ。十万か十五万円、業者から金もらって逮捕されるだろ。そうなりゃあ懲戒免職にせざるを得ない。すると退職金も出ない。再就職も難しいんでね。子供まで高校を中退しちゃった例もあるんだよ。依願退職なら、退職金出るし、就職先も世話してやれるしね。その代わり、調査はとても慎重にやったよ。ボクも弁護士だからね、確かにそうだとすることを認定する能力はあったと思うんだ。

ところが、日照汚職の時は、事前に全く分からなかった。逮捕されたって聞いた時は驚いたよ。「えーっ」って思った。

最初のころは、あんなに大きな事件になるとは思わなくてね。ちょうど逮捕の翌日が開港記念日で、そのパーティーの時にも「あいつのことだから、バーのつけぐらい業者に払わせたのかもしれない」とか「しょうがねえやつだな」なんて話をしてたんだ。うかつだったよね。

ボクはね、彼のことすぐ買ってたんだよ。市の職員より組合専従の方が長いんだ、彼。全国の都市を飛び回って当局と団交するだろ。だから、日照相談のような交渉ごとには非常に有能だった。普通の職員じゃ手に余るようなもめごとが、てきばきと片付けちゃうの。それに、ひとつの法律を見てもね、それをばか正直に実行するだけでなく、法律の欠点を見つけて指摘するんだよ。だから、田村さんもぞっこんほ

れ込んでた。ボクも、いつも「ちゃん」づけで呼んでたしね。彼を室長に抜ぎしたのはボクなんだ。

信頼してただけにね、ショックだった。逮捕されてもしばらくは、「そんなひどいことをするわけないから起訴猶予になるんじゃないか」と思ってたんだけどね。ところが調べれば調べるほど、微罪じゃ済まされないことが分かってくるだろ。参ったよ。ボク自身、日照行政は市政の目玉と考えてたからね。二重の痛手よ。いったん信用しちゃうと、全部任せてほうりっ放しにするんだよ、オレ。彼の場合もそう。ボクの欠点が出ちゃったんだ。女房も「あなたはだれでも信用するから」と言ってた。監督上の責任はボクにあるね。だから、ボクも二カ月間、七万円の減給よ。

それにしても、なぜ、あんなことになったのかね。最初は彼も厳正にやっただよ。それが少しずつ、少しずつ変わってきたんだ。地位が上がるたんびにね。そして、オールマイティーになっちゃった。

〔証言〕菅原幸夫氏（逮捕された元日照相談室長の弁護にあたった） 実は私、市の建築紛争調整委員として、機子のマンション群問題を担当してたんですよ。市長の親父さんの事務所に世話になったこともあって弁護を引き受けました。紛争のころから、政治家が介在して相当の金が動いてるってうわさはありました。が、まさか市の責任者もかんどるとはねえ。私自身も驚きました。何が大変って、けしからんやつを弁護するほど大変なことはありませんよ。彼には「事実をありのままに言え。ただし相手の知らないことまで話すことはないぞ」と指示したんですが、調べ官にカマかけられて随分しゃべったようですよ。飛鳥田さん自身は、親父さんが死んだ時もわれわれ弁護士からの香典を断るほど潔癖な人なんです。部下の指導はうまくいかなかったようすな。一時はノイローゼかと思うほど悩んでいました。弱者保護のために作ったものが結局、政治家や地域ボスら強者の食い物になってたんですからね。そばで見ていて気の毒でした。

警察はね、オレをねらってたんだよ。革新市長ってのはやっぱり嫌われるのかね。いろんな人から聞いたよ。ちょうどロッキード事件の真つ最中だろ。「保守ばかりやってるんじゃないから、警察は革新もねらったんだ」なんてうがった見方をする人もいたよ。まあ、彼（日照相談室長Ⅱ当時）も飲み屋なんかで「オレは飛鳥田の懐刀だ」なんて吹聴したらしいからね。疑うのも無理ないかもしれないよ。

弁護を頼んだ菅原さんがね、なかなか彼に会わせてもらえないんだ。それはもう異常なくらいだったらしいよ。調べの状況がボクに筒抜けになって、証拠隠滅されると思ったんじゃないの。捜査の途中でね、彼がいろいろを自分の名前以外の口座に振り込んでいることが分かった時、県警は小躍りして喜んだって。その口座がボクの口座だと思ったんだね。彼にも「やっぱり（飛鳥田に金が）行ってるんじゃないか」とか、「〇〇ってのは飛鳥田だろ」とか調べ官が言ったというからね。でも、全然勘違いだよ。実際、本当の口座の所有者が捕まってチョン。この辺の話は全部、菅原さんから聞いたよ。まあ実際、筒抜けだったわけさ。

本当のこと言ってるね、彼とのそういう裏の関係なんて全くなかった。捕まった時、ほかの職員のこと心配して、相談室の連中なんかはみんな調査させただけだね。ボク自身については全然。省みてやましいところがあれば平気だよ。

ただ、彼がボクの裏選対の責任者で選挙資金を牛耳ってるとか何とか、尾ひれのついたうわさが出るのは不愉快だったね。ボクは詳しいことは知らないけど、仮に彼が選挙の時、カンバ集めてきたって二十万か三十万円くらいのもんじゃないの。何千万円っていう選挙費用の中でね。それにボクの選挙は、例えば土建業界がカンバしたいって言っても、各社一律にしてもらった。そうすれば後で、オレンとこはよけい出したから言うこと聞けなんてうるさくないだろう。変なうわさにいちいち反論してもしょうがないか

ら、じっと黙ってたんだ。事実が証明してくれるってね。

そのうち、議会や一部のマスコミで、日照汚職は要綱行政の欠陥からきた構造的汚職だって意見が出てきた。法律や条例のような法的権限を持たせず、職員の裁量の幅を大きくしてやることが汚職の原因と言うんだ。でもボクは違うと思う。だいたい法律がなきや条例は作れないんだよ。日照権なんか特に、何も法的規制がなかったんだからね。条例作りたくても作れないんなら、要綱作るよりないだろ。要綱を責めるより、国の対応の遅さを問題にすべきだよ。それに、いかに職務権限があっても、金を受け取らなきゃいいんだからね。だからボクはいまだに、要綱行政に間違いはないと確信してるし、反省する必要はないと思ってる。やっぱり個人の資質の問題よ。

〔メモ〕 事件摘発から半月後の六月十五日、市長は日照相談室の所属する市民局長と同局相談部長を更迭し、相談室長に木下政昭人事課長を起用する人事異動を行った。続いて七月一日には、①紛争調整は職員二人以上の合議制とする②実質的に室長止まりだった決裁を部長、局長まで義務づける——などの事務取扱要領を内容とする制度改正を打ち出した。元室長はその後、懲役一年六月、追徴金五百六十八万円の実刑が確定した。

木下君は穏やかでつきあいのいい人でね。事件の後、室長に据えるにはそういう人でないと駄目だもん。だれにも清潔さを疑われないようにね。それに人事課長っていう中枢中の中枢の人を送り込むことによってね、相談室の職員を勇気づけようと思った。「日照行政は後退させないぞ」って内外に意思表示するねらいもあったよ。

ただ、汚職を絶対になくすってことは本当に難しいよ。ボクは市役所に入っすぐ、業者からお歳暮なんかをもらうのをやめろって通知を出したんだ。そういうことが汚職の素地になるからね。実際、ボクんちもすごかったよ。業者がズラッと贈り物を持って来てね。女房に「手ぬぐい一本もらうな」って言うっ

て断らしたんだ。あれもらってたらトラック一台分ぐらいになったんじゃないの。持って来なくなるまで二年かかったよ。市の施設の完工式なんかで記念品を配るだろ。あれも極力やめさせた。

業者の攻勢はすごいからね。退庁時間にね、市役所の出口で待ってんだよ。で、「〇〇さん、お茶でも飲みませんか」と誘う。「お茶ぐらいならいいか」と思って付き合おうと次は赤ちょうちん、そしてクラブ、料亭になる。何万人って職員を見張ることはできないよ。職務権限も、これを職員に与えなきゃ行政やるはずないしね、やっぱり個人個人の良識で綱紀を守ってもらえないだろうね。汚職を絶無にすることは不可能だ、そう思ったよ。

〔証言〕 汚職事件を起こした元日照相談室長 横浜市の日照行政は、それまで泣き寝入りしていた市民を市が助け、一つの権利にまで育てた行政だと思っています。ただ紛争の調整は、ある部分は建て主に泣いてもらい、ある部分は住民に我慢してもらおうという生臭い仕事でしてね。法律でスパッと切るようなわけにはいかない。難しいんですよ。私は組合での交渉の経験を買われて担当させられたんでしょうが、役人が踏み込むべきでない部分に身を置かざるを得なかったんです。事件のことはあまりしゃべりたくありません。全く私の不徳の致すところです。飛鳥田さんの恩をあだで返した形で、頭を下げるしかありません。警察では、「飛鳥田の裏選対の金はどこから出てるのか」などと、私の全然知らないことまで「知ってるはずだ」と聴かれました。でも、私と飛鳥田さんが裏でつながっていたなどということは全くありません。今でも私は飛鳥田さんを最も尊敬していますし、お師匠さんだと思っています。

横浜スタジアム

子供らにプロ野球を、それがボクの願いさ

〔メモ〕 居留外人がクリケットに興じ、昭和九年にはベープ・ルース、ルー・ゲーリッグら大リーガーが全日本チームと対戦した横浜公園平和球場。だがその施設は老朽化し、四十五年にはスタンド上平分が立ち入り禁止になるなど、とても日本野球発祥の地とは呼べない姿になっていた。これを再建してプロ野球のできる球場にしよう——根っからの野球ファンでもある飛鳥田氏は、燃えた。

新球場のことは市長になった初めてのころから考えていた。とにかく、横浜の子供たちにプロ野球を見せたいというのが、ボクの願いだよ。大都市で球団を持てないのは横浜だけだったからね。ボクも弁護士会のチームに入って、平和球場でプレーしたことがあるの。でも、汚れてひどく汚い球場でねえ。こんないい場所を、こんな汚い形で遊ばしとくのはもったいないじゃないか、とよく話したよ。

だけど球場を造るとなると何十億とかかる計画だろ。機が熟すのを待たなきゃ駄目だった。この問題はね、今までと違って「敵は庁内にあり」さ。助役も、田村さんも鳴海君も、みんな反対。財政に余裕はないし、都市の真ん中、それも緑の軸線内に、何万もの人が集まる構造物を建てるのはいかがなものかって。代わりに、横浜駅東口とか保土ヶ谷の工場跡地とか、いろいろ候補地があがってきた。でも新しく用

地を買うとなると、また十億、二十億とかかるし、スーッと来てスーッと帰れる交通の便のいいところの方が、市民にはいいだろうって主張したんだ。まあ、そんな具合で、庁内はボク一人がラッパ吹くだけで動きそうもないからね。民間にも働きかけて、市会への陳情やら署名集めやらやってもらって、時機を待ったんだよ。

〔メモ〕 四十年代半ばから、新球場構想は何度か顔を出しては消えた。諸々の事情の中でも、都市公園法で公園施設の面積が制限されていることと、資金繰りが最大の難関だった。

そのうちに田村さんが建設の方に変わったんだ。それまでも頭から否定するんじゃなくて、プロ野球は市民の気持ちをまとめるひとつの手段になるって考えを持ってたからね。それから堤義明（国土計画社長）さんを引っ張り込んだ。当時、堤さんは大洋球団の株を四六パーセントも持って、横浜で野球をやる気と見られてたからね。そんなことしたら、西武グループにいいようにやられちゃうんじゃないかって心配する声もあったけど、このあたりから本格的に動き出すわけさ。

まず施設面積だけど、これは球場をすり鉢の形にして、地面に触れてる部分だけが施設だっていうことにしたの。当時の建設大臣が竹下（登）さんで、オレは何度か交渉したんだ。ちようど内閣改造のちようど前で、竹下君は自分の首をなでながら、「オレも今度クビだから」なんて話をしたよ。結局、いいよって置き土産のハンコ押してくれた。大臣が認めて、「君、やりたまえ」って言うんだもん、建設省の役人だって承知するさ。すり鉢にせず、そのまま真下に落とせば、もう違法だよ。でも違法じゃねえように収めちゃったの。専門的なのは田村さんたちに任したけどね。随分苦労したよ。

〔メモ〕 建設省の了解をとりつけたうえで、五十一年十月三十日の市会全員協議会で計画の大筋が発表された。

次に金。ボクは市の負担にならないようにやるって宣言したからね、まず必要な二十億を一般の市民に出してもらおうと思ったんだ。一口二百五十万円で八百口。出資者には内野席を一席、提供するの。だけど、それが集まらない時にはどうするんだという話があったよ。「その時は君に頼む」と堤さんに言ったら、「よし」って胸たたいてね。しかし、西武資本に全面的に頼るのはまずいから、その裏でもってちゃんと工作をして、地元の企業なんかへの割り当ても考えてた。それらが一切駄目な時に初めて堤さんと、こういうふうにしてたんだ。

堤さんは、「なあに、市民が二十億もバーンと出すはずがない。結局、オレを頼って来なきゃどうにもならないさ」てな気持ちだったと思うよ。でもボクは自信満々さ。やっぱし球場を造ることの目新しさ。市民はついて来るって確信してた。実際、募集してみたら千何口か来て、はみ出た分を断る始末だろ。ボクなんかも自分の分割られちゃってね。三口は取ってたのに、「市長はいいじゃないですか」なんて言われて、そのうち一つになっちゃった。

ボクが内心、気を配ったのは、堤さんをさんさん使っという最後いつてボンと捨てちゃう形になったら大変だということ。でも堤さんの態度は見事なもんだったよ。笑いながら「飛鳥田さんの腕には感心した。玄人はだしのテクニクだよ」なんて言って、文句言わない。機を見るに敏な人だからね。その後、すぐに所沢に球場建てて、西武ライオンズで頑張ってるよね。やるな、という感じだね。でも横浜スタジアムが出来たおかげで大洋球団の株が上がって、堤さんもうけたんだ。決して損はしてないはずよ。

〔証言〕 黒田昭氏（西武不動産企画部長として横浜市との交渉の窓口になった。同社専務取締役） 子供たちに野球を見せてやりたいという飛鳥田さんの情熱に堤も動かされ、お手伝いすることになりました。新球場構想はイデオロギーや政治を超えた夢で、国側もこうした呼びかけを理解してくれたものと思います。中

央官庁との交渉のほか、川崎や後楽園への人の流れの調査、大リーグ視察、ハード・ソフト両面からの設計提言などいろいろやりました。市民出資のアイデアや金額の算定もその中から生まれたものです。しかし、西武がスタジアムを乗っ取る、などと邪推されたのは心外でした。堤もこれには腹を立てて、飛鳥田さんも同席されていた地元経済界との話し合いの席で、「そんな狭い気持ちでいるから、市政を革新陣営にとられるんだ」と申したことがあります。また、球場に協力するからといって、開発の許認可など手ごころを加えてもらおうと思っただけはいかん、とよく言っていました。

〔メモ〕 株式会社横浜スタジアムは五十二年二月十六日に発足した。翌年四月のプロ野球開幕までに新球場を完成させることが、第一の仕事だった。

会社ができて難問だらけだね。まず、地主の大蔵省から土地利用変更の許可がなかなか下りなかった。国有地を営利事業に使うのはけしからん、市民に公開して土地なんだからそういう使い方をしろ、ということだね。オープンングゲームまで一年ちょっとしかないのに、こりや間に合わないんじゃないかという危機があったよ。でも市役所のスタッフが、管理主体は横浜市にあるっていうふうに、市の色彩を強く出した方式に大急ぎで修正してくれて、三月末にようやく許可された。市会で、「市長になって国に降参したのはこれが初めてだ」って言ったよ。頭下げて野球場ができるんなら、いくらだって下げてやるって気持ちさ。

新会社にはね、市役所から小泉さん（小泉幸次市民局長当時）に行ってもらった。民間会社だから役所を辞めなくちゃいけない。まだ定年まで二年くらいあったから、彼も考えたと思うよ。それを投げうたって、果たしてスタジアムがどうなるか、分かんないしね。でもボクは決めてた。あの人はきちっと仕事するからね。新会社行きをお願いする直前の予算査定の席で、「ご苦労さまでした」って二度、小泉さんに最敬礼したよ。彼も後から、この最敬礼の意味が分かったってわけさ。

それから大洋球団を川崎から引っ張ってくる問題ね。これはもう、新球場構想を発表する前に中部さん（中部謙吉オーナー当時）から、球場が出来れば横浜へ行きますっていう誓約書を取っているんだ。その中で名前を「横浜大洋ホエールズ」に変えることも約束した。金庫の中に放り込んで、表には出さなかったけどね。大洋は来るしかないんだよ。だって川崎じゃあ人が集まらなくて困ってたんだもん。こっちに来れば満員、黒字に決まってる。事実そうだったでしょ。マスコミは、ボクと伊藤君（伊藤三郎川崎市長）の関係をつかまえて、「革新兄弟の仁義なき戦い」なんて書いてね。たしかに、「飛鳥田さん、ひどいよ」「まあ、かんべんしろや」なんてやりとりはあったよ。けど彼だって、立場上そう言わなきゃならないからね。腹の中じゃあ、しょうがねえっていう気持ちだろうとボクは思っていた。

〔メモ〕 川崎では「大洋球団の横浜誘致に反対する川崎市民総連合」が結成され、五十四万人の署名を集めたが、同球団は五十二年八月二日に横浜移転を正式表明。川崎球場にはロッテ球団が進出することで決着した。

スタジアムの形についてはね、いろいろな案があった。ドーム球場にすることもね、初め考えたんだ。でも二百億かもつとかかる。例の施設面積制限にもひっかかるし、それで消えちゃったの。五十二年夏に日米市長会議がシアトルであった時、ついでにドーム球場で向こうの試合を見たよ。美濃部さんも一緒。そしたらシアトルの市長が、雨もそう降らない横浜で金をかけてドームにする必要はないって言った。もうひとつ、あてがはずれたのは周りの南京街や伊勢佐木町、元町なんかが非常に利益を受けるだろうと思っただことさ。商店街の連中にも、「お客さんが来るようになるから球場に出資しなさい」と言ったよ。だけど外れ。ナイターが終わる九時すぎには子供は眠くなるし、店も閉まっちゃう。話が違っちゃった。そんな思惑違いもあったけど、このプロジェクトは九十点以上の出来栄だよ。

〔メモ〕五十二年四月四日、新球場は横浜大洋―巨人戦でオープン。始球式のマウンドには、すでにその三月に横浜市長を辞めた飛鳥田氏が立った。

始球式の練習はしない。いきなり投げてワンバウンドだった。あの時はねえ、とつても肩が痛かったの。四十肩、いや六十肩か。だから投げる前に痛み止めの注射をしたよ。

いつでもそうだけどねえ、ボクは狙ったら必ずやるけど、もうそれが出来上がっちゃった時にはねえ、たいいてい興味ないんだ。そのプロセスに全力を注ぐ。そのプロセスでも主要なことはやるけれども、細かいやつはみんな信頼できる担当者任せっていう方式だろ。そして出来上がるか、その間際にはもう興味はない。スタジアムもそうさ。ただ、子供たちがいっぱい来て野球を見てる姿はうれしかった。とてもうれしかったよ。それが目的でやったんだからね。

ボクはもともと近鉄のファンだったけど、今は大洋を応援してるよ。でも弱いね。ボクも出資者の一人だから毎年毎年、ドサッと切符が来るけど、その席に座ったことはないんだ。

〔証言〕伊藤三郎氏 ロッテの川崎進出が決まった二カ月後、仙台市長選で先輩の島野武市長の応援に行った時です。個人演説会場で聴衆の一人から、「川崎はロッテを仙台から取り上げてしまった。横浜、川崎、仙台といずれも革新市政なのにおかしいじゃないか。それでも仲間同士ですか」と言われましてね。返す言葉もなく、畳に額をすりつけて謝りました。外に出た時の雪の寒さのこたえたこと。これでは逆に島野さんの足を引くことになるかと判断して、早々に川崎に引き揚げました。「元凶は飛鳥田さん、あなたですよ」と申しますと、「さぶちゃん、そんなこと言っちゃったてしかたないよ。それより大洋―ロッテが日本シリーズで対戦することでも考えようよ」。そんなにうまくいくもんかと思いつながらも、それからは私もよく、神奈川決戦の夢を語るようになりました。取った取られたの話をいつまでもするのはなく、市民に物事を前向きに見てもらいたくて、心を配りました。

山手・大佛記念館

パリ・コミュニケーションがボクらを結びつけた

〔メモ〕横浜・山手の丘に、しゃれたレンガ造りのフランス風建物がある。大佛次郎記念館。小説、史伝、戯曲、随筆に業績を残した大佛次郎をたたえ、五十二年五月に開館。年間十万を超える人が訪れる。

大佛さんとの出会いは変わってるんだよ。あの人が戦後間もなく出した『苦楽』って雑誌を相手に、オレが訴訟を起こしたんだ。もちろん代理人としてだよ。細かいことは忘れちゃったけど、何しろそれで知り合った。それまでにも大佛さんの本はいろいろ読んで、すごく高く評価してたんだ。『ドレフュス事件』とか『ブランジエ將軍の悲劇』とかね。大佛さんがすごいのは、これを昭和の初め、ファシズムの暗雲が日本全体を覆ってくるころに書いたってことさ。軍部が政権を握ればこういうことになりますよ、という警告の書だ。『ドレフュス事件』で軍部がでっち上げた冤罪を書き、『ブランジエ將軍』でファシズムの流れに乗った喜劇役者と、それを支えた民衆を批判してね。反ファシズム闘争の担い手として大佛さんの名前は永久に残るんじゃないかしら。反ファシズムの総大将だ。

訴訟の方は結局和解になったけど、それ以来、行き来するようになった。大佛さんは約束ってのをしないんだ。突然電話をかけてきて、飲まないかって。ボクもよく出かけていったよ。あまり仕事の話はせず

に、ただ雑談したり、世の中の哲学とかを語り合ったりした。そのうち『バリ燃ゆ』を書くことになってね。前も言ったけど、ボクはバリ・コミュニケーションを民主主義の理想と考えていたから、雑誌に連載が始まると欠かさず読んだよ。大佛さんはバリ・コミュニケーションを文学的におさえる。ボクは政治的に興味がある。だから解釈が違ふところもあるけど、とても勉強になった。

『バリ燃ゆ』の現地取材を手伝ったのが、画家の佐藤敬さんたちさ。オペラ歌手で「カルメンお美」っていわれた佐藤美子さんのご主人。ボクは美子さんのファンで、市長になってから教育委員を引き受けてもらうくらい親しかった。ジャクリンっていう敬さんの秘書が、後に佐藤さんの息子と結婚することになってね。四谷の教会で頼まれてボクが仲人をして、大佛さんはジャクリンの代父っていうやつ、つまり父親代わりになった。そんな思い出もあるよ。

大佛さんは四十八年に亡くなってね。前まえから蔵書や資料を散らかしたくないってことをよく言っていた。それで記念館をつくる話を持ち上がったんだ。初めは正木さん（正木千冬・鎌倉市長Ⅱ当時）のところでやろうじゃないか、大佛さんは鎌倉に住んでたんだからそれがいい、というんで一度、譲ったんだよ。でも横浜ほど財力がないから勘弁してくれって。大佛さんの奥さん（酉子夫人）もオレをすっかり気に入ってくれていたから、結局横浜がもらうことになった。

さてどこに建てるかという話になって、最初は県庁前のイギリス領事館、いまの開港資料館ね、あれを考えたんだ。急いで発表しちゃったのはいいけど、イギリスとの交渉が難航してね。検討した結果、山手の港の見える丘公園のわきに市が持っていた土地に回すことにした。旧マッケンジー邸っていつて、近くに西春彦（元駐英大使）さんが住んでいた。その何年か前に、西さんから「マッケンジー邸が売られるらしい。おかしなのに買われたら困る」っていう、お願いというか情報提供があったんで、幹部を引き連れて

見に行ったの。たしかにいい場所なんだ。その時に買取しておいたのが役に立った。あの辺はフランス山もあるし、むしろ大佛さんの世界にふさわしい場所だね。

山手は子供のころよく遊びに行っていたところでね、横浜の顔だから大切にしたいよ。民間に売られそうだったフランス山やイギリス領事公邸をなんとか市のものにして公園の周りを整備したし、四十七年には景



完成した大佛次郎記念館を見てまわる酉子夫人（左）と飛鳥田氏＝53年2月27日

観風致保全要綱までつくった。これはもう完全に田村さんの仕事で、オレの発想を超えてた。景観点をいくつか作ってね。そこからの眺望を確保するため、建物の高さを規制しちゃうってんだから、随分大胆なこと考えたよ。オレは飛びついたけど、他の市長だったらそうはしなかったらうね。これも東急と宅地開発要綱の関係と同じで、その前に実際、二つのマンションの建設計画を変更させているんだ。強引だって怒られたけど、ためらいはなかったよ。

大佛記念館はバリ、モスクワと

並ぶ世界有数のパリ・コミュニケーションの資料館だよ。今でもヨーロッパの古本屋と始終連絡をとって、いい資料が出ればすぐ買う態勢をとってる。おとしかな、モスクワから視察の人が来てね。「将来、資料交換ができればいいですね」なんて話をしたよ。以前入院した時も、大佛さんの本を取り寄せて朝から晩まで読んでた。

民衆が直接民主主義の中からつくり出したパリ・コミュニケーションが、ボクと大佛さんを結びつけてくれた。ああいう作品を書けなかったら、ボクが大佛さんにこんなにはれ込むこともなかったし、記念館もできなかった。それははっきりしてるね。

〔証言〕 大野悦子さん(大佛次郎記念館の一隅にある喫茶店「霧笛」のオーナー) 大学一年の夏休みに鎌倉のお宅にお邪魔して以来、ご夫妻には本当にかわいがっていただきました。先生が亡くなった後、奥様は記念館が建つのを支えに余生を送られていました。お二人は若いころから、いつかは山手に住もうという約束をされていたそうで、そういう意味でも最高の土地に建てていただけたわけです。あれこれ他人のうわさをされるご夫妻ではなかったのかがい知るばかりですが、飛鳥田さんにはとても好意をもっていらっしやうです。ここで喫茶店を、というのは奥様の願いでもあり、コーヒークップひとつに至るまで細かく選んでいらっしやいました。店の名前も二人で食事をしていた時、先生の作品名からふと思いついたものです。「自分のご主人にお茶を出す気持ちでお客様に接して下さい」と、奥様からも、飛鳥田さんからも言われたのが印象に残っています。

人事

自由にもの言える市役所にしたんだ

組織を動かすのは人事と金だって言うけど、ボクはその人事が嫌いだった。あれこれいいじるのが性に合わないんだ。抜擢して喜ばれても三カ月だけど、恨まれたら一生だからね。それでも人事はやらなきゃいかん。で、心がけたことは、原則としてどんな人でも使いこなすってこと。特徴のあるやつ、ないやつ、おのおの違うわね。それを、その人なりの形で使うんだ。ところが何千、何万という吏員の全体なんてとても分からないから、いきおい助役たちが決めてきたやつを尊重するってことになる。田村さんや鳴海君からは、「市長は逃げてる」ってよく言われたよ。

助役になってもらう時はね、市長室の奥にある隠し部屋にその人を呼んで、「何々さん、だっ子を一入預かって下さい」——そういう頼み方をした。向こうは初めキョトンとしているけどね、やがて分かってニコリ。そうやって選んだ助役や総務局長と、ニュージーランドの一室を借り切って人事をやるんだ。みんな対等で議論するもんね。市長が六人、七人いるようなもんだよ。

ボクが市長になるまでは、議会の人事介入が激しかった。聞いてみて驚いたよ。当時は津村峰男さんってのが議長だったんだけど、半井市長との関係をさして、津村市長—半井人事局長というあだ名があっ

たくらいだ。全部、津村の承諾がなければやれなかった。原案を作って市会に相談すると、棒線引いて横に違う名前が書かれて返ってくる、てな具合だからね。ボクの最初の仕事はこの津村退治、つまり議会から人事権を奪い返すという、至極当たり前のことだった。

まず大島(稔一)っていう社会党の市会議員と芝居をやったよ。大島がね、オレのところへ人事案を持ってくるんだよ。それをやつの目の前でもってピリッと破いてくずかごへ捨ててね。秘書課が見てるだろう。てことは、市長の強い態度が庁内に知れ渡るってこと。ボクが脚本書いて持ちかけたら、大島も「いいよ」。かわりに道路整備か何か、彼の言ってくることをひとつだけ受け入れようって裏取引をしたよ。

決めた人事は文句をつけられてもそのまま発表しちゃう。そうこうしてるうちに、飛鳥田市長は議会に言うことを聞かないという評判になって、やがて言ってこなくなっちゃったよ。まあ、助役とか総務局とかに潜かにラブレター、と称するんだけど、紙をもってくるのはあったみたいだけどね。

次に国の介入。これも完全にけったよ。土木、建築、港湾なんか、幹部クラスですでに受け入れてる人がいるだろう。辞めるころになると、国から次の人を言ってくるんだよ。これをピシッとはねつける。横浜市には人材が掃いて捨てるほどいるんだから、中央官庁の干渉には屈しませんでしたね。だっていいことじゃないよ。すでにいる吏員に申し訳ないだろう。だから当時の横浜市の連中は、オレんとはみんな子飼いだってという喜びと誇りをもって仕事をしてたよ。

そのかわり、地方自治体で勉強したいっていうのは採った。大蔵省の人間なんかね、地方の実情を知らないで勝手なこと言ってるでしょ。それを教えてやる意味でね。四十六年に大蔵から坂本導聡君ってのが第一号で来た。よそなら県の財政課長になるようなキャリア組だけど、横浜じゃあ係長扱いよ。ところが失礼な言い方だけど、これが全くの拾い物でね。実に来る男だった。予算を担当してね。かなり大きな

仕事も言いつけて、横浜市のすべてを見せたよ。市長査定なんかにもちゃんと出席させて、意見を言わせた。頭がいいだけでなく骨のある男だったから、ボクと対立する意見も堂々と言ったよ。二年間やって大蔵省へ帰る時、まるで横浜市出身のやつを国へ送り出すような気持ちになっちゃった。

国に強い態度で臨むにしても、こっちに実力がなきゃ駄目だからね。吏員の質の向上にも気を配った。たとえば毎年十数人を外国へ研修に出した。以前は局長とか一部の人のみに限られていたのを一般職員に広げて、論文で選考するの。で、通ったやつに八十万円渡して、まあ一カ月くらいをめぐにそれぞれ希望する海外へ出すのさ。ただこれもはつきりしたもんじゃなくて、金が続くんなら長くなっても構わないよって言うてある。だから中には、「あれ、あいつ行ったきりどうしたんだろう」なんて心配してるよね、やがてのっそり帰ってきてやがる豪傑もいたよ。逆に頭かきかき、「金をすられちゃいました」なんて報告するものもあるしね。女の人も保母とか看護婦とか、福祉関係の人がよく行ってたよ。すぐには役立たなくてもね、先にいつて気がつく点が出てくる。実際に見るってのはいいことだよ。今では多くの自治体がまねするようになったけど、当時は画期的だった。

とにかく自由にものが言える市役所にしたよ。ただの一吏員がね、オレに建白書を奉って「今の市政のやり方はここが悪い。こんなふうにやれ」なんて言ってくるくらいだから、首脳部会議とか予算査定なんか、もううるせえ、うるせえ。でもだからこそ、楽しく、いい仕事ができたって当時の人たちは言ってくるよ。

〔証言〕 坂本導聡氏(大蔵省国債課長) 大都市の財政需要を知る必要があるというのは、当時、秘書課長だった長岡実さん(現・日本たばこ産業社長)の考えでした。ひょんなことから横浜と話がついて私が呼ばれたのですが、さすがにびっくりしました。前例がないのに加えて、相手は全国の革新首長の親分ですから

ね。私は国の仕事がしたくて大蔵省に入ったのであって、果たして横浜の仕事に生きがいを持てるだろうか、とまで思い悩みました。ところが飛鳥田さんの「一切隠しごとはない。反対や不満があれば、どんなぶつけてきなさい」という言葉に迎えられて二年間働いてみて、本当にいい経験をさせてもらったと感謝しています。組織を使って実にうまく、合理的に仕事をする市長でした。部下の意見を十分に聞き、失敗を責めず、市役所全体が生き生きしていましたね。私の結婚披露宴では「折をみて、夫婦で親元を訪ねること。親はそれが一番うれしんです」とスピーチしていただき、人間飛鳥田に触れる思いがしました。

健全財政

気がついたら彼らの手の中で暴れてたよ

誇れるもののひとつが財政運営だね。実質収支が赤字になったのは、四十一年度と五十年度の二回だけ。それもほんの小さな額だ。ボクはでかいプロジェクトをほとんどんやったから、赤字ばかり作って横浜を出ていったなんていうデマを飛ばすやつがいるけど、そいつらは帳じりを見ていないだよ。健全財政を維持できたのはね、やっぱり高度成長期だったという点が大きい。毎年毎年、税収が増えるんだ。法人市民税なんてすごい伸びだった。でもそれは、逆に財政需要も膨らむってこと。前も言ったけど、学校建設だ、都市基盤整備だっていろいろ出てくるからね。その辺の兼ね合いをつけてくれたのが財政当局さ。ボクは本当、財政局長に恵まれたよ。清水（恵感）さん、松宮（理一郎）さんね。二人には助役としても面倒みてもらったけど、「気がついたら彼らの手の中で暴れていたようなもんだ」って、よく言ったものさ。

予算編成がヤマ場だね。向こう一年間の市政がここで決まるんだから、じっくりやったよ。十日間ぐらい野毛の市長公舎にこもって、朝の九時から夜の七時、八時まで数字とにらめっこさ。査定する時は、局長なんかよりも実際の担当者に聞いたよ。後ろの方で小さくなって座っているのに、「おい、若いの。この予算でやっていけるか」って。すると「大丈夫です」とか、「足りません」とか答える。今度は財政

局に声をかける。これも局長じゃなくて、実際に査定したやつに聞くんた。こいつはこいつで、「これで十分です」とか「できればもっと増やした方がいいと思います」とか、自分の考えを言う。市長に直接聞かれるなんて、それまで全然なかったから初めは戸惑うよ。でも、それがオレのやり方だと分かると、喜んでものを言うようになる。そうすると無駄な金が全部出てくる。彼らは政治判断抜きで、本当のことをしゃべるからね。局長と食い違ってもいいんだ。その時は、若い方の意見を採用したよ。

ボクと財政局とのかけ引きも面白かった。ひと通り局長査定が終わるとね、「市長が自由にばらまける残り財源はいくらですよ」と言ってくるんだ。ボクのお小遣いさ。ところがそのつもりで考えると、これがとんでもない間違いでね。税の伸び率なんかをわざと厳しく計算しての数字だから、財政当局の踏ん張り次第で、まだまだ五億や十億は出るんだ。それをとことん搾り上げるんだよ。これに起債なんかがつけば、実質使える金はもっと増えるだろ。松宮さんも磯子に住んでるからね。一緒に帰る車の中で、「まだあるだろう。もう少し出せよ」ってつつかと、ただニコッと笑ってね。それで交渉成立さ。逆に「しかたない。この辺で我慢しよう」と思っていると、「まだやれますよ」って向こうから教えてくれたりもした。だから彼らが「ない」って言ったら本当にないんだ。一度、清水さんが市営住宅の建設費を前の年の半分に査定してきたことがあった。こうでもしなきゃ、お小遣いは増えませんかってね。

選挙を控えた首長が骨格予算を組むってのは、今はよく見るだろう。これをやり出したのはおそらくボクが最初だよ。この次に当選すると決まっていんだからね。次の市長が自由にできる財源を残しておかないとかわいそうだよ。それが民主主義の原則だ。ところが当時はだれもやってなかった。それどころか、半井さんなんて三十八年の選挙の時、目いっぱい組んだあげくに、「開港以来の拡大積極予算」っていばってる始末さ。予算を選挙対策に使ってるんだ。後を引き継いだボクは困ったよ。飛鳥田色を出そう

にも、金がほとんどないんだからね。これじゃいかんと思って、四十二年度当初予算は本当に必要な分だけで編成する方針をたてたんだ。財政の連中は困ったらしいよ。前例がないんだからね。「何が骨で何が肉か」なんてさかんに議論した。結局、通年予算を組んでみて、そこから新規事業とかの「肉」らしき部分を落としたのを発表したんだ。骨格的予算って表現したよ。その後も、選挙前はいつもそうした。野党にとって予算市会では、市長との対決姿勢を示す絶好の機会だろ。彼らの選挙が目前ならなおさらさ。ところが、かみつく先の政策予算がない。中には、「政策を予算化して、信を問うのが民主主義ではないか」なんて質問する議員もいたよ。ボクは「何いってやがる」って気持ちで聞いてた。

横浜の健全財政は自治省も評価してたから、年度末になると電話かけてきてね。「起債の枠が余っているが、お使いになりませんか」って。もう議会は閉会してるから、市長の専決処分でもらっちゃうの。その点、国に目の敵にされた美濃部さんは気の毒だよな。

〔証言〕 松宮理一郎氏（神奈川臨海鉄道取締役相談役） 野毛山動物園の清掃費を査定した時です。例によって市長が意見を聞きますと、財政局の担当者が「この予算ではうちのシロクマはクロクマになってしまします」。大笑いになって増額と決まりました。明るく、のびのびした雰囲気は飛鳥田時代の特徴ですね。しかし市長から指名されるのですから恥かしい答えはできません。自分の考え、見識を持たなくてはと、一般職員も必死になって勉強していました。人口増に伴う基本的な都市整備に追われて、やりたい事業も相当我慢してもらいましたが、市長自身、財政事情をよく理解し、将来の負担につながることや、無理な要求は一切しませんでした。「松ちゃん、もう少し悪知恵を働かせろよ」とよく言われましてね。学校建設公社を設立して、国の補助金を先取りする形で教育環境を整備していく手法などは、教育長だった平島さんと飛鳥田さんだからこそ出来たヒット作だと思います。

彼らともめたなんてあんまり記憶ないよ

交通再建ひとつをとっても分かるように、ボクと労働組合は十五年間、ずっと密接な関係にあった。横交、横水（全水道横浜水道労組）、浜教組（横浜市教職員組合）がご三家と称していたけど、他の組合ももちろん味方になってくれたよ。

中でも横交との縁は深いよ。なにしろ中学時代に横交のストライキを見たのが、ボクが社会主義とか労働運動とかに目覚める、ひとつのきっかけになったからね。その後、県会、国会とボクの選挙を中心になってやってくれたのも横交。ボクの家も向こうの本部も、お互いに磯子だろう。朝晩必ず顔を出したから、もう口に出して頼む、頼まないなんていう関係を通り越しちゃって、一体のものとして行動したよ。また当時は、実戦部隊として力があつたのは横交くらいでね。横交が市会や県会に何人も議員を出しているのを見て、横水も負けるなって深山さん（深山泰治委員長Ⅱ当時）、相当はっばかけてたらしいよ。その横水や浜教組がボクの選挙に入ってきてくれたのは、代議士の後半から市長になってだね。

こんな間柄だから労組ともめたなんて、あんまり記憶ないよ。そりゃあ、期末手当の問題とかで市長室を取り囲まれたり、座り込まれたりしたよ。向こうもひとつのセレモニーをやらなきゃいかんからね。オ

レが「おい」なんて顔出すと、座り込んでる連中が「市長、何とかしてくれよ」って言う、こっちは「してやるよ」って答えてね。その時も、そいつのあだ名とか、ふだんの呼び名で話しかけるんだ。何しろ「市長室に扉はない」から、始終、雑談してる連中さ。

しかしボクは労使交渉の席には、一度も出なかつたはずよ。助役がみんなやってくれるし、組合からも「飛鳥田さんが出てくると言いたいことも言えない、出てこないでくれ」なんて声が聞こえてきた。あうんの呼吸よ。代わりに組合の会合にはよく出席したし、市長公舎で朝めし会をやって意見を聞いたりもした。でも、それもしまいには「もう議題がないねえ」って笑い合ってたね、それで終わり。いつの間にかやらなくなっちゃった。

組合の活動家を引き上げることもしたよ。係長になる時は試験に合格しなきゃいけないんだけど、それと別に昔ながらの選考職ってのがあってね。特別に試験から除いて、推薦で採用するって制度をとって。例の日照汚職の相談室長も組合からこの方式で引っ張ったやつだから、労組との癒着が市政を駄目にするって攻撃されたよ。でもボクの考えは違ってた。横浜市に直接民主主義を植えつけることが、ボクの最大の目標だろう。そのために一万人集会を提唱したり、市民相談の組織をつくったりした。大衆の中に入っていった大衆の声を聞き、また市長の声も伝える。そういう人間がいなきゃいけないんだ。それがやれるのは組合の若い活動家よ。市役所の仕事に慣れちゃったのには、世界が違いすぎて分かんない部分が多いからね。連中が組合で身につけた力を、市政に生かす意味でボクはやった。もちろん一般の吏員も、登用すべき人はそうしたよ。

こう並べていくと、組合に対して強い姿勢を打ち出せなかったように見えるかもしれないけど、全国で初めて実質的な定年制を取り入れたのは横浜市なんだよ。市従が抵抗するのを押し切ってたね。革新自治体

じゃあ、そんなこと出来っこないってのが一般の見方だった。実際、当時は七十何歳でのがろくに仕事もしないでいたんだよ。効率悪いし、職場の士気にも影響するからね。

〔メモ〕 四十九年十二月、横浜市は退職手当条例を一部改正した。六十歳一カ月を超えても退職しない場合は、①勸奨退職制による退職金割り増しをやめる②昇給をストップする③それ以後の在職期間は勤続年数に加算しない——などが主な内容。退職年齢の明文化は全国初で、国家公務員定年制導入の七年前だった。

これにはね、裏があるの。横交も横水も、五十八歳で辞めるっていう協約をかなり前から市側と結んで、それを守ってたんだ。理由はそれぞれあるけど、共通するのは現業部門の仕事がきつってことさ。ところが市従は野放しだろ。当然、横交なんかは「オレたちだけ早く辞めなきゃいけないのはおかしいじゃないか」ってことになる。不満がブスブスくすぶってるからね。だから条例を改正するに際して、横交や横水からちっとも文句がこなかったばかりか、市労連（横浜市労働組合連盟。市従、横交、横水などで構成）ってのがあるでしょ。あの席で、定年制いいじゃないかって意見を吐いてた。旗本が賛成なんだからやりやすいよ。

全国から問い合わせが殺到してね。保守も革新もない。みんな、やりたくてうずうずしてる連中だ。逆に自治労本部はね、「政府が公務員攻撃を仕掛けている時代に、よりによって革新の象徴である横浜市が」って渋い顔だった。共産党もいろいろ言ったけど、でも論理的に定年制を拒否できる理由ないもん。飛鳥田の横浜だからやれるって面もあった。その辺、分かってる人は分かっているはずよ。

〔証言〕 深山泰治氏（四十一年から五十三年まで市労連委員長を務めた。横浜市水友会長） 自分たちがかいだみこしですからね。そのみこしとの間がうまくいかないではまずいですから、こちらが十言いたいことを八で我慢すれば、市長の側も何割かは抑えてくれたと思います。ただ主張すべき点はしっかり主張しま

したよ。一部の組合員から、「上層部は市長に遠慮しすぎて、取れるべき成果も取れない」といった批判が聞かれたのは、誤解であり残念でした。成果を述すことがあるとしたら、むしろこちらの足並みが乱れた時です。あまり大きな声では言えませんが、たとえば下相談の段階で、助役が「ここまで出そう。しかし公にするのは控えて欲しい」と言う。こちらもその線で手を打とうとすると、一部加盟組合が「堂々と公表して成果を披露すべきだ」と反対する。組合によって色がそれぞれ違いますから、その内部矛盾を乗り越えて、いかに最大公約数をとるかの方に苦勞させられました。

市役所改革

時代に応じて柔軟に変わるのは当然だろ

市役所内部の改革にも積極的に取り組んだけど、思い出深いのは、田村さんを迎えて四十三年に企画調整室をつくったことだね。市長をやって一番困ったのが、役所の縦割り機構さ。たとえば建築局と土木局なんて市民には同じように見えても、政府の指導から何から全然違うんだ。間にはさまって参ったよ。吏員もね、中央の省庁を呼ぶのに、平気で「本省」って言葉を使う。これじゃあ、地方は国の出先よ。全体を見通した市政なんて出来やしない。縦割り、たこつぽをぶち破って、どこかでひとつ統合する機関があってもいいだろう。そう常に考えていて、ようやく実現させたのが企画調整室なんだ。

この組織がそこらのと違う点はね、事務と技術の両方のスタッフがいるってこと。企画とか企画管理とか、似たような名前の部局は全国の自治体にあるけど、ああいうのとは根本から違うんだ。よそのは大抵、どこの部局もやりたがらない事務を押しつけられたり、せいぜい長期総合計画なんていうのをつくったりするくらいだろ。でも都市プランナーが加わっていない計画なんてね、隣の局の技術屋から横やりが入ったら、それでおしまい。しょせんは事務屋の作文なんだ。ところが横浜の企画調整室には、実際に図面をひけるやつがいる。「本省」もない。だから勇敢に都市づくりがやれるのさ。六大事業なんて、企画

調整機能がなかったら到底やれなかったらうね。

何とか計画が駄目なもうひとつの理由はね、具体性がないこと。何を、どんな方法で、どんな資金を使ってやるのか。ボクは「実現する手段を考えない計画を作っちゃいかん」と盛んに言ったの。技術の検討から金の工面まで考えた計画ならね、首長が代わったからってそう簡単に捨てられるもんじゃないよ。

ボクは「機構改革なんて毎年やってもいい」くらいの腹だった。市役所も時代に応じて柔軟に変わっていくのは当然だろ。市長になって最初にやった改革のひとつが市民相談室を部に昇格させたことさ。併せて、相談する場所をそれまでの個室からオープンカウンター方式に変えて、市庁舎一階の市民広間に移した。あんまり立派なものが出来て、こっちがびびくりしたくらいだ。それから特別相談日ってのをつくって、各局長がカウンターに座る日を決めた。ボクや鳴海君が「局長の虫干しだ」と言っただけで、だいぶ問題になったよ。彼ら、市民に顔をさらしたり文句言われたりするの嫌だからね。「あんなところに座ってたら仕事はたまるし忙しくて困る」。そういう声も聞こえてきた。でもボク自身が虫干ししてるんだもん。市長・助役相談日というのもあってね。隣地との境目がどうだこうだ、なんていう相談を聞いたよ。

この時、ばかな話が持ち上がった。すごく立派ないすを入れたら、局長が座る分にはいいけど、相談に来る人のまでこんな立派にすることはないって、役所のやつが言うんだ。不思議に思ったよ。座りいいんなら同じでいいじゃないか、ねえ。市民相談部という名前についても、役所の機構にふさわしくないって抵抗があった。ボクは役所の都合よりも、市民に分かりやすいことが大切だと思っていたから押し切ったよ。この方針は十五年間変わらなかったけど、一度だけ逆のことをしたことがある。四十八年に清掃局を環境事業局に変えたんだ。これは従業員の要望だね。子供が友達に「お前のお父ちゃんはどこに勤めてるんだ」って聞かれて、「清掃局」って答えると笑われる、とてもつらいって言うんだ。ボクは清掃の方

が分かりやすいと思ったんだけど、気持ちよく働いてもらうのが大切だからね。

ハンコとの闘いにも苦労した。数局にまたがる書類なんてね、三十もハンコ押して真っ赤になったのが、何週間もかかって上がってくるんだよ。これは何とかしなくちゃと思って、まず権限を下に下ろすことをした。いくらまでの支出なら課長決裁でよろしいとかね。行政の簡素化さ。これはボクの公約の「いっぺんで用の足りる市役所、区役所にする」にもつながるんだよ。あと、ハンコを押した日にちを鉛筆で書き入れさせる。そうしたら、どこで何日止まっていたのか、役所内の仕事の流れが分かるだろう。

とにかくものすごい書類の数だからね。これをどう処理したらいいか、ボクは半井さんに教わったんだ。そしたら、最初の三カ月くらいはよく読みなさい。そしてどんな人の目を通していけば大丈夫か、大丈夫じゃないかを見極める。その次からは大丈夫な人のやつはボンボン、ハンコついてかまいませんよって。危ないのを見ると誤字は多い、文章はまずい。あんまりひどいんで「こいつ、どこの大学出たんだ」って聞くと、「明治です」。オレの後輩なんだ。嫌になっちゃったよ。

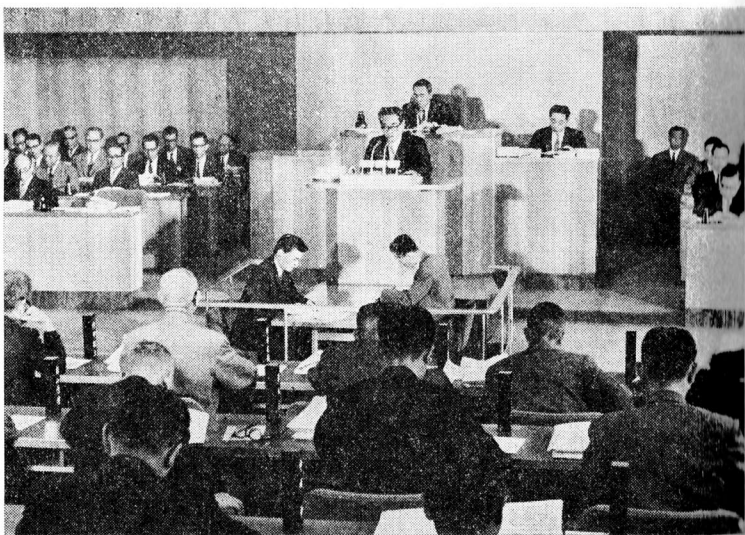
【証言】 田宮敦子さん(三十五年から五十六年まで市民相談の窓口にいた。横浜家裁家事調停委員) 今では全国各地に見られる、弁護士を招いての無料法律相談も飛鳥田さんが始めたものです。借地借家をめぐるとラブルなど民事関係の相談が多いのに、専門家がいないために適切な対応がとれず、困っていたところでした。市民との交流にとっても理解のある市長でしたから、仕事はともややすかった。ただオープンカウンターには驚きました。気軽に立ち寄れるので市民には好評でしたが、職員は道端に座っているようなものでしょ。お客さんがいないからといってボーッとしているわけにもいかず、赤鉛筆片手に六法を広げるなど気を使いました。そのうちに慣れましたが、最初は市長や鳴海さんを恨んだものです。職員の意識まで含めた市役所改革となると、そこは大きな組織ですからね。相当難しかったんじゃないかしら。

議会対策

あんまり仲いいんで飛鳥田自民党なんて

市長になったころはね、議会が完全に市政を牛耳っていたの。議会の承諾を得なければ何ひとつ出来ない。それでボクが最初にやったのが、前にも言ったけど、役所の人事権はこっちにあるってことをはっきりさせること。行動で示したからね。彼らもじきにあきらめちゃった。それから市長提案についても、嫌ならば同意してくれなくてもいいって態度で臨んだ。それまでの地方議会ってやつは、出しゃあ通るのが原則さ。通すのが難しそうだと思ったら、議会に内示してお気に召すように直してもらうえで、正式に提案する。否決されたり、議事が混乱したりするのをひどく嫌がったんだ。首長の本当の考えを貫くよりも、体面や形式を大切にしてね。ところがボクはそういうの嫌いだから、十五年間始終ぶつかっていたよ。何しろ最初の議会で助役案をけられ、初めて組んだ当初予算案では公約の一人集会の予算を切られ、だろう。もう慣れっこよ。周りの役人にも、「否決、修正を恐れるな。国会だって提案の三分の一は流れちゃうんだ。議会が一部同意しないのは、むしろ当然だ」って話したもんだ。

といって議会工作、根回しを全くしなかったわけじゃ、もちろんないよ。社会党の市議団や助役が必死になって走り回ってくれた。社会党のまとめ役は、初めは大島稔一。それから大久保(英太郎)君だね。公



「子供を大切に市政」と「だれでも住みたくなる都市づくり」の施政方針を発表する飛鳥田氏(中央)=38年9月18日

勢で飲むのは年に一度、予算が成立した時だけ。日ごろめし食わなきゃいけない時も、料亭はやめてニュージーランドにするとか気を配った。ボク自身はお膳で食う方が好きなんだけど、料亭は秘密のにおいがするだろう。だから、ホテルで洋食。まあ、それでも内証話ではきるからね。

こんなこと言っちゃ悪いけど、議員の水準は総じて低かったね。ごちそうしないもんだから、「市長、このごろつき合いい悪いじゃない」なんて暗にたかってくるやつもいたし、何より議会での質問が問題にならない。行政と議員とじゃあ、知識、情報の度合いがこんなに違うもん。そいつはボクも国会で経験済みだ。だから、議会が始まる前は「またやるのか」って気が重かったけど、答弁すること自体はちっとも嫌じゃなかったね。つまねえ質問を聞いている時なんかはね、手元にある紙切れにチヨチヨツと俳句を書いて、隣の助役に見せるんだよ。そ

共利金値上げの時なんか石崎(武)君にも随分世話になった。彼ら、ことごとくボクを守ってくれたよ。

社会党は少数与党だろ。で、協力を求めた先が自民党だよ。健ちゃん(横山健一市議)や小串さん(小串靖夫市議)当時によく話をしておくんた。理屈が通っていれば素直に聞いて、無理を言わん男だからね。金沢埋め立てとか、肝心な時になると必ず助けてもらった。あんまり仲いいもんだから、飛鳥田自民党なんて言われてね。ボクにしてみりゃ、自民党の連中をつかまえて、こっちに持ってきてるつもりだし、向こうからすりゃ、市長をうまく取り込んだって考えてるし、まあお互い様さ。人は、飛鳥田自民党って言葉が悪い意味で使うけど、ボクは面白がって聞いてたよ。

健ちゃんとのつきあいはね、彼が三十八年の暮れに議長になったことから深くなった。市長―議長の関係に加えて、ほら、万人集会が否決される一方で、オレの給料を値上げする条例が通っちゃったことがあったろう。オレはすっかり怒って、市長を辞めるって宣言したんだ。そしたら、議長の健ちゃんや大久保さんが驚いて家に飛んで来て、「大人げない。ばかなことするな」って。彼らの説得で考え直したんだけど、この騒ぎがきっかけで親しくなったの。健ちゃんはマムシの力さん(島村力市議)当時にかわいがられて、対立する大ボスの津村(峰男)さんに始終かみついていた。津村退治はボクの目標でもあったから、健ちゃんが津村派と議長を争った時、社会党は彼を応援した。そんないきさつもあったんだよ。

助役にも世話になった。中でも塩田(光雄)助役。これが健ちゃんと中学時分からの飲み友だちなんだ。同じ鶴見の地主でね。ボクが島村さんや健ちゃんの家に交渉に行くこともないわけじゃないけど、自民党との仲はたいがい、社会党と塩田さんが取り持ってくれたよ。

三十八年当時は、まだ宴会政治はなやかでね。連絡をとると称して、市長が市会議員を呼んでごちそうするのは当たり前。議員の飲み食いのつけまで払ったらしいよ。ボクはそいつを全部やめちゃったの。大

れを見て助役も「ニヤッ」として、また次のやつ、また次のやつって紙が回る。議員にしてみりゃあ、答弁の用意か何かだと思うだろうけど、実は俳句さ。ボクの市会句集っていつて有名だった。ほとんど忘れちゃったけど、大場さん（大場正典助役）当時（が覚えていてくれたのがあってね）。

春いくたび 生きて残れる 花ありや

港北ニュータウンの完成が昭和六十年ごろにずれ込みそうだって話になった時の句さ。なかなかの出来だろう。紙切れをちゃんとしてとけば、いい句集が出来たのにね。残念なことしちゃった。

〔証言〕 大久保英太郎氏 道の真ん中をいばって歩いているアッちゃん。その前で道を切り開き、後ろでぞうさんがけをしている社会党市議団——十五年間をマンガにすると、こんな図柄になるだろうね。鳴海、田村両君がいくらい案を出しても、議会を通らなきゃ何にもならないんだ。連日の夜討ち朝駆けで根回ししたよ。議案を通すだけじゃなくて、舌禍事件の後始末なんかでも苦労した。思ったことをズバツと言っちゃう人だからね。いつだったかなあ。怒る野党と、頭を下げるのが大嫌いなアッちゃんの間に入って、ようやく三行ばかりの謝罪文をまとめた。後は市長が各党の控室を回ってそれを読み上げるだけってことになったら、見え坊だからさ、謝るところを新聞記者に見られたくねえって言うんだ。仕方ないから、オレたちがドアの前に陣取って、中をのぞこうとする記者を追い払うなんてこともしたよ。でも、あのころは生きがいがあった。泥のかぶりがいがあったよ。アッちゃんの人柄、魅力がそうさせたんだらうね。

広報・マスコミ

鳴海君が「市長ストップ」。記者諸君はニヤニヤ

市政をうまく進めるには市民の間で多数派を占める必要がある。一人でも多くの市民を味方につけるために気を使ったのが、広報の充実とマスコミ対策だよ。『市民グラフ』や『広報よこはま』の各区版をつくったりして広報には力を入れたけど、忘れられないのは松本（得三）さんの作った二冊の市民生活白書だ。彼、ずっと朝日新聞の記者で、論説委員までやった人なの。四十四年に神中の同級生だった岡田（岡田任雄元朝日新聞社政治部長）が来て、「近く定年になる人がいる」って言うんだ。それまで全然知らなかったけど、岡田が推薦するんだから間違いない人だろうと、市に入ってもらった。彼のために都市科学研究室を作って、「好きなことやってくれ」と言った。そしたら白書を作ってくれたんだ。

いやもう徹底した現場主義でね。研究室の職員四人で白書を作るだろ。とにかく現場に行ってきちんと取材しない限りは一行たりとも書かせないんだよ。原稿を見て彼、「ここはどうなってるの」って聞いてね、答えられないと「もう一度行ってらっしゃい」さ。室員は現場と研究室を行ったり来たり。そんなに丁寧にやらなくてもいいですよってオレ、言ったんだけどね。絶対承知しなかった。だから立派な白書ができあがってね。一ページ、一ページ、彼の血が通ってるって感心したよ。市の抱える問題、矛盾がスト

レートに出てる。それも現場を知った重みがあるからね。素晴らしいよ。

人柄もすごくいい人だから、自然と若い職員が周りに集まってディスカッションするようになった。「松本学校」って呼んでたよ。そんな中で、「市民のための市政と言いながら、機構や人員の問題で本当に市民が求めているとこまで手が回らない」なんて不満を吸い上げてボクに意見するんだ。とても参考になったよ。だから松本さんがいたってことは、白書だけじゃなく、有形無形の効果があったね。

彼には五十二年の相模原市長選に出馬してもらったんだ。ボクも力入れて、何回も応援に行ったし、研究室は二回、世論調査をしたよ。それも松本学校の生徒四十人が三日間、休暇をとって手弁当でやった。彼の人気が分かるだろ。ここでも徹底した手作り主義の本領を発揮してね。ただこの時はかなり驚いたよ。何せボスターも手作りでなきや駄目だって言うんだ。しょうがないから、選対のやつが徹夜して作った。目を真っ赤にして服を絵の具で汚してね。でも素人だから出来は悪いし、松本さんも最後にはあきらめたよ。結局負けちゃったけど、今思うと、あの選挙で草の根民主主義の実験をしてたんじゃないかな。彼、五十六年にがんで死んじゃった。今も、朝日新聞と市役所で彼に教わった人たちが年一回、飲み会やってるんだって。松本学校の同窓会だね。

マスコミも絶好のPR機関だ。半井さんのころは月二回だった定例会見を毎週にした。オレ、言いたい放題のこと言っちゃうんだ。苦勞したのは鳴海君でね。オレが言い過ぎたり、しゃべっちゃいけないことを話すと、会見の後で彼が取り消して歩くんだ。時にはね、オレが話していると隣の鳴海君が「あ、市長。そこでストップ、ストップ」って止めるの。「いいじゃないか。これくらい言わないと書いてくれないよ」「いや、今そこまで言うのはまずい」なんて議論が始まっちゃってね。記者諸君がその様子をニヤニヤ見ていることもあったよ。各当局にも「必ず書いてもらえるネタを作れ」って督促したよ。

けんかもしたよ。最初のころ、記者クラブのボスみたいな古手の記者が何人かいてね。市の幹部を連れ出しちゃあ料亭で飲んだりしてた。自民党に知恵つけてボクの提案が否決されるように動いてるらしいって話も入ってきてね。筋の通った批判ならいいけど、行政に介入するような行動は許せないと思ってオレ、その社の幹部に直談判したよ。クラブの若い記者諸君も、快く思ってたから良かったらしくてね。クラブの運営をもっと民主的にしようって頑張ってた。たまたま両者の利害も一致したわけさ。

まあ大体、好意的だったと思うよ。代議士時代は、いくら話しても書いてくれなかったり、書かれたくないことを書かれたりしたことあるけど、市長の時にはそんなことあまりなかった。ボクの部屋もフリーパスでね。みんな勝手に入って来ちゃあダベってた。ただ委員長に出るときは参った。毎日、夜討ち朝駆けだろ。そのうえ、まだ決心しないうちに「飛鳥田氏は委員長に出ると言明した」なんてうそを報道する社があつてね。あのときだけは、記者に「ひどいよ。もう君たちとは会わない」って怒鳴ったよ。

〔証言〕 浅野隆氏(広報課員として十五年間、飛鳥田氏をカメラで追い続けた。フリーカメラマン) 飛鳥田さんとつきあううち、単なる行事写真だけじゃなく、彼の顔を撮りたいと思ったんです。それは、フライングからぞき見る顔がすごく寂しそうだから。そりゃ、記者会見やセレモニーで報道陣のフラッシュを浴びてる時はニコニコとポーズをとりますがね。取材が終わってみな引き揚げて一人になった時とか、市長室の奥でレコードを聴いてる時、寂しそうな表情するんですよ。こんなところに人間的な厚みを感じたんです。そしてすごく照れ屋。みなと祭の時、人力車に乗せたんですが、恥ずかしがって、自分でカメラを持って撮る格好して顔隠しっ放しなんてこともありました。ポートレートで五、六百枚撮りましたよ。ただ広報については大胆でね。私の発案で未舗装の道路やドブなど汚い写真ばかりのパンフレットを作った時も文句一つ言いませんでした。全国の自治体の広報担当者会議に行ったら、「うちではきれいな部分しか広報しないのに、横浜はすごい」って驚かれましたよ。

後継者

細郷の名が出た時はやられたって感じた

「メモ」五十二年七月の参院選に社会党は「保守逆転」の期待をかけたが敗北。その責任を取る形で成田委員長と石橋書記長は辞意を表明した。九月の党大会では後継委員長として飛鳥田氏の名前があがったが流産。その後、飛鳥田氏は「不出馬」の表明を繰り返し返したが、十二月の統開大会の直前、成田委員長の懇請で一転、出馬を受諾した。地元横浜では「信頼を裏切った」として出馬に反対する声が市民の間や社会党内で上がる一方、後継市長候補をめぐる動きが一挙に表面化した。

ボクはね、端的に言うくと大久保君（大久保英太郎市議会議長Ⅱ当時）がいいと思った。彼の後援会の会合に行っちゃあ、「ボクの後継者は大久保君です」ってやってたよ。頭がいいし勉強家だしね。いろんな本を読んでたよ。

ごく自然に大久保君にスーッとまとまっていくと思ってたんだ。だけど、もう手を上げて賛成なのは彼の後援会だけでね。庁内は反対の声が強かったんだ。彼、役人に対して厳しかったからね。呼びつけてはしるんだ。「おべんちゃらは嫌いだ」ってよく言ってた。いばってるって、嫌がるやつもいたんだね。本当はそんなことは細かなことなんだけどねえ。党内でも大久保じゃ選挙やれないって連中が多かった。

九月の段階で委員長を受けなかったっていうのは、もちろん田さん（田英夫参院議員）たちが離党したりして、出馬する情勢ができなかったこともあるんだけど、大久保君への義理立てもあるんだ。オレが腹でこの人と思うものをね、周囲の情勢が悪いっていうんで出せないんじや、オレも出るわけにはいかない。ところが十二月の時はね、成田さんの懇請に負けて瞬間的に受諾するって決めちゃったんで、自分のことで頭いっぱいだった。後援団体なんかみんな反対の声を上げてただろう。それを口説くので精一杯で、オレからしかけるわけにはいかなかったんだ。

社会党の独自候補を立てるべきだって意見は党内にもちろんあった。それで随分もめたよ。候補者もね、大久保だけじゃなくて、内部では竹田さん（竹田四郎参院議員Ⅱ当時）、片岡さん（片岡勝治参院議員Ⅱ当時）、大出さん（大出俊代議士）、伊藤さん（伊藤茂代議士）なんて現職国会議員の名前もあがってた。

だけど、まずね、ボクが市長の任期を一年ちょっと残して辞めることになっちゃったでしょ。理由は党内事情だけど、市民からは「裏切った」なんて声まで出た。そこでまた社会党が主導で候補者を立てるわけにはいかないだろうって判断があった。それに、与党だった公明の矢野（絢也書記長Ⅱ当時）なんか、ボクが受諾した直後に「背信行為だ」なんて言ってたし、民社、新自と組んで早々と細郷推薦を決めるだろう。その後に控えてた京都と東京の知事選なんかでの選挙協力を考えるとね、独自候補を立てて全面的に戦うのが果たして党のためになるのかってこともあった。

庁内からもね、独自候補を立てるのはいいけれど、負けて社会党が野党になるんじや困る。それより細郷に乗ってくれた方がいいって声が出た。十五年間、一緒にやってきたんだからね。彼らにしてみりゃ、社会党が野党に回ったら議会がやりにくくなる。それに、それまで積み上げてきたものが、新しい市長に代わったとたん、振り出しに戻っちゃうんじゃないって気持ちがあったんだな。



横浜市長に当選した細郷道一氏(右)とお祝いに訪れた
飛鳥田氏=53年4月17日、横浜市中区の選挙事務所で

そんなことをいろいろ考えた末に、細郷でいこうってことにしたんだ。大久保君と斉藤正ちゃん(社会党県本部書記長)が当時を呼んで頼んだよ。大久保君には悪いことしたと思った。後で二人だけで会った時に「アッちゃんはお考え違いをしてんじゃないか」なんて言ってたけど。結局、細郷で一生懸命やってくれたよ。

だけど本心では、ボクは負けるとは思ってなかったよ。社会党が主導で大久保君を出して、共産党が推せば勝つ、という気持ちでいた。オレが「この人が後継者です」って言えば、そうむざむざ負けることはない、いい勝負になるって思ってたんだ。大久保も選挙に向けて独自に世論調査までやってた。民間の調査会社に頼んでね。その結果も、社会党の候補が十分に勝てるってことだったな。ボクはいまだに、どうして大久保君でいいのかわからないのか不思議でしようがない。

〔証言〕 片岡勝治氏(当時、社会党県本部委員長だった。同本部顧問) 飛鳥田さんから、「細郷でやってくれ」と話があった時、私は友人の一周忌に出ていました。電話で「すぐ来てくれ」と呼び出されて、県本部で聞かされたが、「これで党内をまとめるのは大変だ」と話したのを覚えてます。他党は、飛鳥田さんが委員長受諾の声明を出した直後から、待ってましたとばかり動き始めていました。飛鳥田さんはそんな情勢の進み具合を見て決断したんでしょうが、新委員長に重荷をかけてはいけないと考え、党内説得の時には私たちが執行部の判断として持ち出しました。それで長くかかってしまいました。タマ探しの態勢をつくる前だったので、大久保さんだけでなくだれについても、党内で公式に討議できませんでした。まして打診したこともなければ反対したこともありません。候補を立てるには、市民の説得、他党への配慮なども必要で、もう少し時間があつたら、と悔やまれます。

〔メモ〕 飛鳥田市長の社会党委員長への出馬受諾が報じられて二週間たった五十二年十二月十七日、公明、民社、新自の中道三党は、後継市長候補として横浜出身の元自治事務次官で当時、公営企業金融公庫総裁だった細郷道一氏を

共同推薦する動きを明らかにした。二日後には議員も「協力」を表明。細郷氏は一躍、有力候補として注目を集めた。

細郷さんはね、河村(河村勝・民社党代議士)が推してたんだ。二人は府立一中からの同級生なんだ。河村が動いているらしいってことはうすうす聞いてたけど、彼が出てくるとは予想しなかった。よその党から名前が出てきた時はアッと思ったよ。なるほどそういう人がいたな。こつちとしちゃ、すきを突かれた、やられたって感じだったね。

ただ、細郷さんとは知らない仲じゃない。付き合いは長いんだ。自治省時代から知ってた。交通局の再建では、何度か陳情に出かけたからね。彼が財政局長のころだった。できる男だっという印象だったね。後になって四十七年には、横浜駅東口開発公社の理事長に来てもらった。

横浜駅の東口は当時、「伏魔殿」なんて呼ば

れた。企業や政治屋の利権がいろいろ絡み合っただけ。開発の構想はあっても、全然具体化できないでいたんだ。細郷さんを招くっていうのは、清水（惠蔵）助役の考えですよ。国との太いパイプで事業を軌道に乗せて欲しいと思ったんだろ。「いろんなしがらみを一掃するには細郷さんに限る」と、ボクにそう言っただよ。細郷さん、すべてを承知して引き受けてくれた。実際、理事長になるとすぐに、人事を刷新することから始めて、思い切って整理していった。この功績は大きいよ。

ところがその後、やっかいなことになった。開発計画をめぐって対立しちゃったんだ。彼は最初の構想を大きく踏み出して出島地区、いま「そごう」がある一角ね、あそこも含めた東口全体の開発をしようとした。でもボクや田村さんが、それは駄目だって言ったの。そんなに手を広げたら資金的に参っちゃうだろう。市だけじゃない。同じ出資者である県も、そんな金出せやしないよ。補助金をそれぞれ五十億も上積みしなきゃいけないっていうんだからね。そのまま計画は二年間くらいストップしちゃって、結局、公社と市で折り合いがついたのは、彼が金融公庫総裁に出ていったあとだった。

この辺をとらえてね、彼とボクとの間にもやもやしたものがあるっていう人がいるんだ。でも、もともと金融公庫総裁ってポストは自治省の次官経験者が渡り歩く先だね。東口公社に来てもらう時も、「自治省には自治省の人事のローテーションがあるから、その順番が来たら帰すように」って、国から言われてたんだ。何年間か預かって、いずれは出ていく人なの。その時が来たただけであって、しこりが残ったなんて、少なくともボクは思っただけだった。

あとね、理事長に迎えるにあたって「いずれは知事に」という話があったのに、飛鳥田はそれを破った。それで細郷は面白くないんだ、なんて話も伝わってきた。そういうことを考えてる人がいた、というのはあるだろうね。また自治省も、各地の首長をとるって方針を立てて、次々に実現していったから

ね、でもボクはそんなこと一切言ってません。細郷さんの心中は察するだけだけど、結果として良かったんじゃないの。ボクは知事より横浜市長の方が上だと思ってるもん。

細郷に乗ることではね、党内を説得することも大変だったけど、他党との交渉もしくちゃならぬ。社会党が乗ることには民社が特に反対してたんだ。河村とボクはけんかばかりしてたからね。「条件つけるなら駄目だ。無条件降伏しろ」なんて言ってた。自民や新自クもいい顔しなかった。公明だけが、「できれば一緒に」と言ってくれてね、大出さんに話をしてもらった。細郷さんとの話し合いもやってもらってね。細郷さんも協力してくれたよ。出馬声明の文言を一部変えたり、飛鳥田市政を評価するってメッセージを出してくれたね。大出さんの功績だね。

〔メモ〕 市長選は、中道三党に加え、自民、社民連そして社会の計六党相乗りの細郷氏と、共産、革自連支持の朝倉了氏、元県議の金子駿介氏の三氏で争われた。が、保守・革新・中道の大連合が市民の関心を薄れさせたのか、投票率は史上最低の三六・〇八パーセントにとどまった。結果も「細郷圧勝」の予想とは異なり、朝倉氏の健闘を印象づけるものとなった。

三四一〇〇六	細郷	道一	無新
二六九三二五	朝倉	了	諸新
三六九八一	金子	駿介	無新

（53年4月16日投票、17日開票）

別にボクの市政をそのまま継続して欲しいとは思ってなかったけど、いくら何でもボクの業績を尊重してもらえらうという期待は持っていたよ。オレの市政は十五年間続いたからね。にわかにはひょう変はできないだろう、という自信があったの。事実、細郷さんだってね、一期目は随分、遠慮してただろう。でも、全国革新市長会には頼んでも入ってくれなかったし、結局、市政の流れを昔に戻しちゃったね。

〔証言〕 細郷道一氏 市長選に出ることを考えたのは勧められてです。一番最初は河村君でしようねえ。彼は私の長い友人だから、党としてとか何とかいうことじゃないんです。図式をはっきりさせて話が始まったわけじゃないですよ。確かに三党並んでの話もございましたが、どういうふうに、俗にいう根回しをしたかは知りませんね。私はどの党にも推薦して欲しいと言ったことありませんよ。やるか、やらないか打診はされたけど。私は出馬の声明で「脱イデオロギーの市民党」の立場を言いましたが、推薦していただいた党にはこの基本的な考え方をご理解いただいたと考える以外ないんじゃないですか。まあ、飛鳥田さんはイデオロギーのかけを持っていましたが、実際には市町村長っていうのはそういうことでは務まりません。やっぱり私の言ったようなことを現実にはおやりになったんじゃないですか。飛鳥田市政の評価はもう少したってからですね。ただ、市長に当選して久しぶりに横浜に来てみると、市民全体がちょっと元気を失ってるんじゃないか、打ちひしがれてるんじゃないかって思いましたね。

第三部 委員長時代

ky289
P14 (289/1)
P



生々流転 飛鳥田一雄回想録

1987年9月30日 第1刷発行 定価1300円

著者 飛鳥田一雄

発行者 八尋舜右

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03-545-0131(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替・東京 0-1730

©Ichio Asukata 1987 ISBN4-02-255761-3

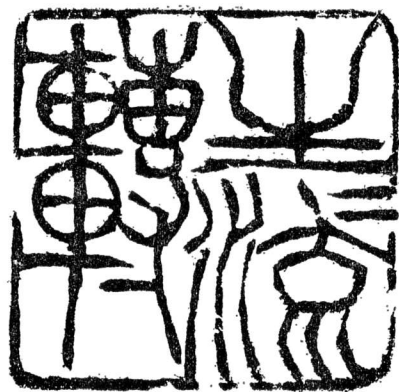
Printed in Japan

6・30
7・15
8・1
9・7
11・28
12
59・5・11

党中執委で次期委員長選への不出馬―退陣を事実上表明。併せて定期党大会の繰り上げ開催を要請
党全国書記長会議で、新執行部への「申し送り」として「党の大胆な脱皮と再生」を求める所信を表明
委員長選の立候補届出が締め切れ、石橋氏が無投票当選で後継委員長に就任することが確定
党大会で石橋新執行部を選出
衆院解散を機に政界から引退
憲法擁護国民連合議長に就任
大佛次郎記念会理事長に就任
厚木基地騒音第二次訴訟の弁護団長に就任

8・21
9・1
10・12
12・20
61・1・22
アキノ暗殺
大韓航空機撃墜事件
田中元首相に懲役四年の実刑判決
石橋委員長、自衛隊違憲合法論の見解
社会党、「新宣言」を採択

飛鳥田一雄回想録



序

市長時代、私は橋や施設の礎石の筆をめったにとらなかった。政治家が橋を架けたり施設をつくったりするのは当たり前で、その当たり前のものに自分の名前を宣伝のようにはりつけるのは私の主義ではない。礎石は市民の胸の中にある、またあるべきだとも思っていた。

自分の人生や仕事を振り返るものを書いてみないかというお誘いを、これまで何度となく受けながらすべてお断りしてきたのは、もともと過去に目を向けること自体に興味がなかったのに加え、この礎石の例と同じように、自分から名前を残すようなことはしたくない、という気持ちがあったからだ。しかし昨年（八六年）夏、弁護士事務所を訪ねてきた朝日新聞横浜支局の若い記者諸君と話しをしているうちに、この辺で一度、区切りをつけるのも悪くないなと思うようになった。中曽根首相の強引な国会解散―衆参同日選で自民党が三百議席を獲得した直後だった。

その時、彼らはこう言って私をくどいた。「革新が深い混沌の中に紛れ込み、首相が八

六年体制を唱える今だからこそ、飛鳥田さんの経験を聞きたい」と。この言葉に私も動かされ、帰宅後、家内に「とうとうつかまったよ」と報告することになったのである。

作業は、記者諸君の質問に私が答え、それをまた彼らが原稿にまとめるという形で進められた。取材班の三人はみな二十歳代で、聞けば私が市長に初当選したころは小学生にもなっていなかったという。が、私はそういう新しい目が加わったほうが、かえって面白いものになるだろうと思っていた。いわゆる飛鳥田市政なり飛鳥田社会党が、いまどういう関心なり興味で見られているのかなどということは、当人にはなかなか分からないものだ。彼らの問題設定や質問の仕方に、そうか、自分の仕事はこんなふうに受け止められているのか、と驚かされるようなことも何度かあった。

私は本来、あれこれ後悔しないたちだが、改めて自分の歩いてきた道を振り返ってみて、これといつて心残りのない市長時代に比べて、委員長時代に対してはやはり内心^{せうじ}忸怩たるものがある。市民に開かれた党づくりを目指して随分努力したのだが、党の体質はそう簡単に変わるはずもなく、種をまき、芽を出したところで力尽きてしまった。本書では納得できた仕事だけでなく、こうした失敗談やなんだか頼りない自分も正直にお話ししたつもりだ。

しかし私が提唱し、横浜市中で、そして党で実践しようとした直接民主主義の理想はいまもってその意義を失っていないと思う。いや、この理想を唱えることが一層必要な時代に

なっているような気さえする。直接民主主義とは言葉をかえて言えば、政治をみんなのものにする、ということだ。政治不信がかつてないほど高まっている今、私の実験を引き継いで新しい政治や自治体のありかたを探る動きが活発化することを願ってやまない。私が自分の経験や考えを世に問うことで、そうした流れが改めて人々の胸に思い起こされ、閉塞気味の時代状況を変えるなんらかのきっかけになってくれれば、これに過ぎる喜びはない。

「生々流転」という題名は、いまだ「流転」の最中と自認する私が望んでつけたものだ。委員長職を退いた後も、体が許す限り平和と民主主義のために戦ってきたし、今後もそのつもりでいる。決して後ろ向きの回想録ではないということをご理解のうえ、お読みいただきたい。

最後になったが、取材班の三人の青年をはじめ、本書が形をなすまでにお力添え頂いたすべての方々に心からお礼を申し上げる。

一九八七年夏

飛鳥田一雄